

# 多賀城市内の遺跡2

—平成25年度発掘調査報告書—

新田遺跡

山王遺跡

西沢遺跡

高崎遺跡

平成26年3月

多賀城市教育委員会



# 多賀城市内の遺跡2

—平成25年度発掘調査報告書—

新田遺跡

山王遺跡

西沢遺跡

高崎遺跡

平成26年3月

多賀城市教育委員会



## 序 文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡や多くの埋蔵文化財包蔵地があり、それらは市域の約4分の1にも及んでおります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であります。このことから当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用することはもとより歴史の解明に資する調査に努めているところです。

本書は、平成25年度に国庫補助事業として実施した8件の発掘調査の成果を収録したものです。特に山王遺跡の調査では、古墳時代の水田跡、古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、中世の溝跡などを発見しました。いずれの調査も規模としては大きなものではありませんが、この地域で1,000年以上にわたり積み重ねられてきた人々の生活の歴史を垣間見ることができます。これらひとつひとつの成果が、本市の具体的な歴史像の解明につながり、ひいては新しいまちづくりに活用できるものと期待しています。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成26年3月

多賀城市教育委員会  
教育長 菊地 昭吾

## 例　　言

- 1 本書は、平成25年度の国庫補助事業による発掘調査8件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 3 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るために、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。また、本書で報告している調査では、平成23年3月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いている。震災以前の調査成果に関しては、座標値を整合させるために、再測量の成果に基づき東に3m、南に1mの補正をかけている。
- 4 掘図中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、「新版標準土色帖」(小山・竹原:1996)を参考にした。
- 6 執筆は、I～III・V・VII章を小原一成、IV・VI・IX章を武田健市、VIII章を石川俊英が担当し、編集は小原が行った。IV・VI章の資料整理は村上詩乃が行い、図版作成は各執筆担当者と高橋純平・千葉都美(VIII章)が行った。また、遺物の写真撮影は板垣泰之と村上詩乃と城口貴彰が担当した。
- 7 第VI章山王遺跡第136次調査出土の畿内系土師器塊について、奈良市埋蔵文化財調査センターの池田裕英氏、安井宜也氏より多くの御教授を頂いた。
- 8 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

## 目　　次

I	遺跡の地理的・歴史的環境	1
II	新田遺跡第95次調査	3
III	山王遺跡第126次調査	20
IV	山王遺跡第128次調査	32
V	山王遺跡第129次調査	61
VI	山王遺跡第136次調査	83
VII	山王遺跡第137次調査	105
VIII	西沢遺跡第24次調査	125
IX	高崎遺跡第97次調査	132

## 調査要項

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 菊地昭吾
- 2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 鈴木典男
- 3 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター  
副主幹 武田健市 研究員 石川俊英 相澤清利 小原一成  
調査員 畠山未津留 高橋純平 板垣泰之 村上詩乃 城口貴彰

- 4 調査協力者 阿部忠之 小川幸男 小野健治 紺野優 佐藤長松 志賀久造 高橋秀明 高橋優子  
武田信二 武田眞克
- 一条工務店 エヌエスプランニング 株式会社メモリアルホームズ コベルエスト  
ート株式会社 スモリ工業株式会社 大成ハウジング株式会社 大東建託株式会社  
マックスホーム株式会社 ライブ住宅工房
- 5 調査従事者 赤間幸祐 渥美静香 阿部孝子 阿部信夫 大泉清吉 大山邦夫 小川勝彦 長田拓  
海 尾上洋子 小野寺紀代子 片桐庄記 片倉忠 加藤義宏 鎌田修一 菊地清喜  
倉宏三 小松まり 小松美樹 今野和子 西條金三 櫻井良博 佐々木一郎 佐々木  
直正 志賀定夫 千葉美恵子 中込弘美 中島弘 根本清 濱田茂樹 平塚孝志 平  
塚武慶 福原寛 藤田恵子 山田理 横尾光男 渡邊賢
- 6 整理従事者 赤沼たみ 千葉都美 宮城ひとみ

#### 調査一覧

No	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	新田遺跡第95次	新田字西後41番、43番の1の一部	6月25日～8月10日	374m <sup>2</sup>	小原・高橋・ 村上・城口
2	山王遺跡第126次	山王字掃下し11-10、12-9	4月10日～4月27日	24m <sup>2</sup>	小原・畠山・ 村上
3	山王遺跡第128次	山王字中山王42番15	5月10日～6月28日	38m <sup>2</sup>	武田・村上
4	山王遺跡第129次	山王字西町浦61番1、62番3	5月8日～6月15日	67m <sup>2</sup>	小原・畠山
5	山王遺跡第136次	山王字山王三区56・57地内	10月1日～12月4日	60m <sup>2</sup>	武田・村上
6	山王遺跡第137次	山王字山王四区195-2、196-2、 197-2地内	11月6日～12月13日	500m <sup>2</sup>	石川・相澤・ 板垣
7	西沢遺跡第24次	浮島字高原150番	8月21日～10月2日	347m <sup>2</sup>	小原・高橋・ 村上・城口
8	高崎遺跡第97次	留ヶ谷一丁目22-11	11月26日～12月5日	36m <sup>2</sup>	武田・相澤・ 村上・城口

## 凡　例

- 1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。
- S A : 柱列跡 S B : 挖立柱建物跡 S D : 溝跡 S I : 竪穴住居跡 S E : 井戸跡  
S K : 土壙 P it : 柱穴及び小穴 S X : その他の遺構
- 2 奈良・平安時代の土器の分類記号は下記のとおりである。詳細は『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』(多賀城市教育委員会: 2003) で報告している。
- (1) 土師器坏  
A類: ロクロ調整を行わないもの

B類：ロクロ調整を行ったもの

BⅠ類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

BⅡ類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

BⅢ類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

BⅣ類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

BⅤ類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

BⅠ・BⅡ類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する

## (2) 土師器窯

A類：ロクロ調整を行わないもの

B類：ロクロ調整を行ったもの

## (3) 須恵器窯

I類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

II類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

III類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

IV類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

V類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

I・II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する。

3 瓦の分類は「多賀城跡 政府跡 図録編」（宮城県多賀城跡調査研究所 1980）、「多賀城跡 政府跡 本文編」（宮城県多賀城跡調査研究所 1982）の分類基準に従った。

4 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期存続中に降灰し、承平4年（934年）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え方と、「扶桑略記」延喜15年（915年）7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考え方がある（町田洋「火山灰とテフラ」「日本第四紀地図」1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10 C頃の降下火山灰について」「中山久夫教授退官記念地質学論文集」1991）。

## I 遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市は、宮城県のほぼ中央、仙台市の北東側に位置する。東西 7.6km、南北 4.2km、周囲 29.9km の規模であり、東側は貞山運河を境界として七ヶ浜町、北西側は加瀬沼を隔てて利府町、北側は塩竈市、南から西にかけては仙台市と隣接する。

市内の地形は、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高 40 ~ 70 m の低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高 5 ~ 6 m の微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤跡も確認できる。

市内には、40 を超える遺跡が所在しており、その面積は市の面積の約 4 分の 1 に及ぶ。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城や付属寺院の多賀城廃寺と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

以下、今年度に発掘調査を実施した遺跡の概略について述べる。

新田遺跡は、標高 5 ~ 6 m の微高地に立地し、その範囲は東西約 0.8km、南北約 1.6km の広さを有する。绳文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では大小の溝で区画されて屋敷跡が多数発見されている。このうち、寿福寺地区では 12 世紀後半から 16 世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。

山王遺跡は、標高 3 ~ 4 m の微高地に立地し、その範囲は東西約 2 km、南北約 1 km の広さを有する。これまで弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ 1 町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいなどを構成する建物跡や井戸跡などが多数発見されている。高崎遺跡は、低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西約 1.3km、南北約 1 km の広さを有する。これまで、古墳時代から近世までの遺構・遺物が発見されている。古代では、多賀城廃寺跡の西側で約 70 軒の堅穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸跡などが発見されている。また、井戸尻地区では大量の灯明皿が一括廃棄された状況で検出され、周辺で万灯会のような仏教儀式が執り行われていたと考えられている。

西沢遺跡は松島丘陵から塩釜方面に向かって張り出した低丘陵上の南西端部に立地し、東西 450 m、南北 700 m の範囲を占めている。これまで、平安時代の掘立柱建物跡や堅穴住居跡が発見されており、多賀城に関わる倉庫や鍛冶工房が存在していた可能性が考えられている。また、中世頃の 30 棟を超す掘立柱建物跡も発見されている。



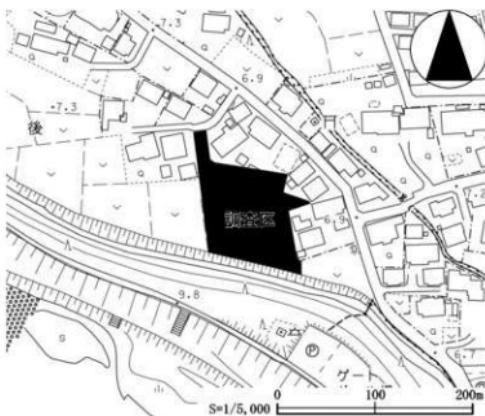
第1図 調査地位位置図

## II 新田遺跡第95次調査

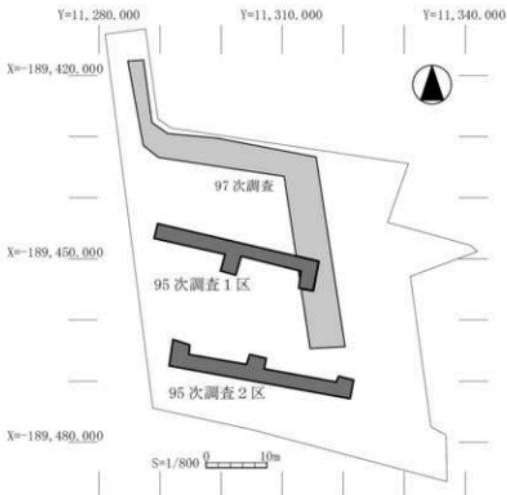
### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、宅地造成に伴う確認調査である。平成25年3月、地権者より当該区における宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出され、その後5月14日に変更の図面が提出された。計画では、宅地を造成する際に総長63.4m、幅6mの道路を建設することとなっていた。これに加え、開発面積が2471m<sup>2</sup>と広大であることから、確認調査を実施することに決定した。その後、6月20日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて確認調査の実施に至ったものである。

調査区は、既存のビニールハウスの隙間に2本設定した(1・2区)。6月25日より重機を使用して現代の盛土及び耕作土層(I・II層)を除去し、III層上面で遺構を検出した。28日より作業員を動員して北側の1区から調査を開始し、搅乱を掘り下げつつ遺構の精査を行った。7月13日に1区のIII層上面遺構検出状況の写真撮影を行い、17日には部分的にIII層を掘り下げ、IV層上面で遺構の存在を確認した。その後、度重なる雨天により作業は停滞したが、24日より2区の精査を開始した。2区でもIII層上面で遺構の存在を確認し、精査ののち31日に検出



第1図 調査区位置図



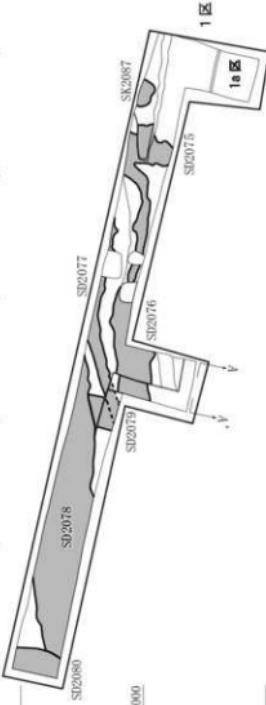
第2図 調査敷地と調査範囲

Y=1, 320, 000

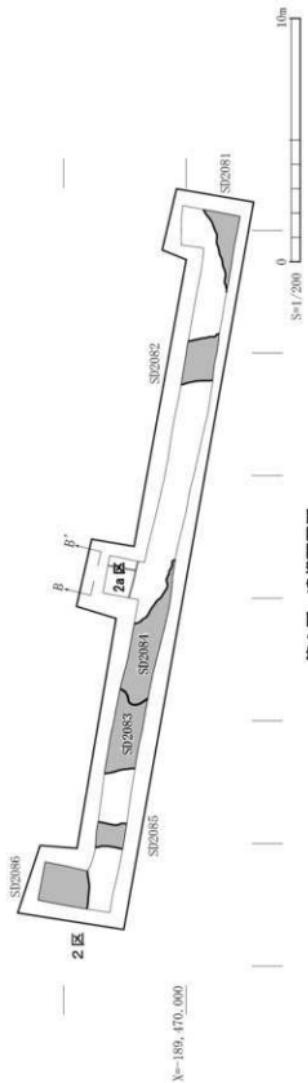
Y=1, 310, 000

Y=1, 290, 000

Y=1, 280, 000



Y=-189, 470, 000



第3図 道構配置図

状況の写真撮影を行った。その後一部遺構の精査と図面を作成し、8月10日に埋め戻して全ての調査を終了した。

## 2 調査成果

### (1) 層序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである（第4図）。

I 層：現代の畠土・盛土層で、厚さは1.1～1.3mである。

II 層：1区で部分的に堆積する褐色土で、厚さは30cmである。

III層：黄褐色土をブロック状に含む黒色粘質土で、厚さは5～15cmである。溝跡や土壤の検出面である。

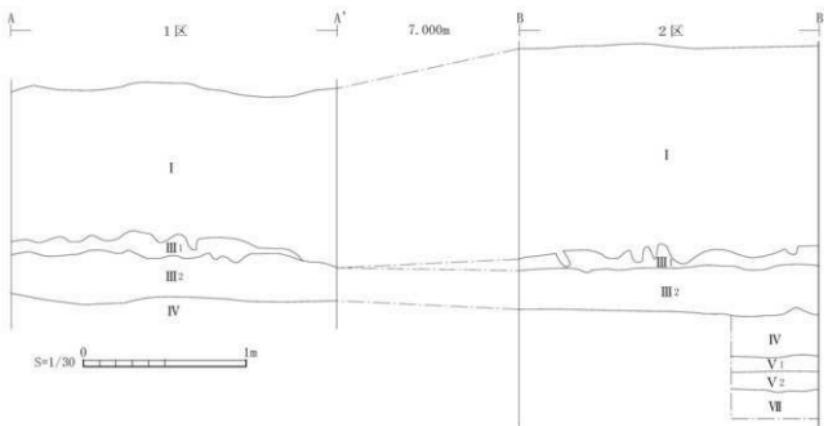
III 2層：黄褐色土をブロック状に含む黒褐色粘質土で、厚さは30cmである。

IV 層：暗褐色土をブロック状にやや含むにぶい黄褐色砂質土で、厚さは30cmである。1a区、2a区では、この層上面で溝跡などを検出した。

V 1層：黒褐色粘土で、厚さは10cmである。2区の深掘り箇所のみで確認した。

V 2層：灰オリーブ粘質土で、厚さは10cmである。2区の深掘り箇所のみで確認した。

VI 層：灰黄褐色粘質土で、厚さは15cm以上である。2区の深掘り箇所のみで確認した。



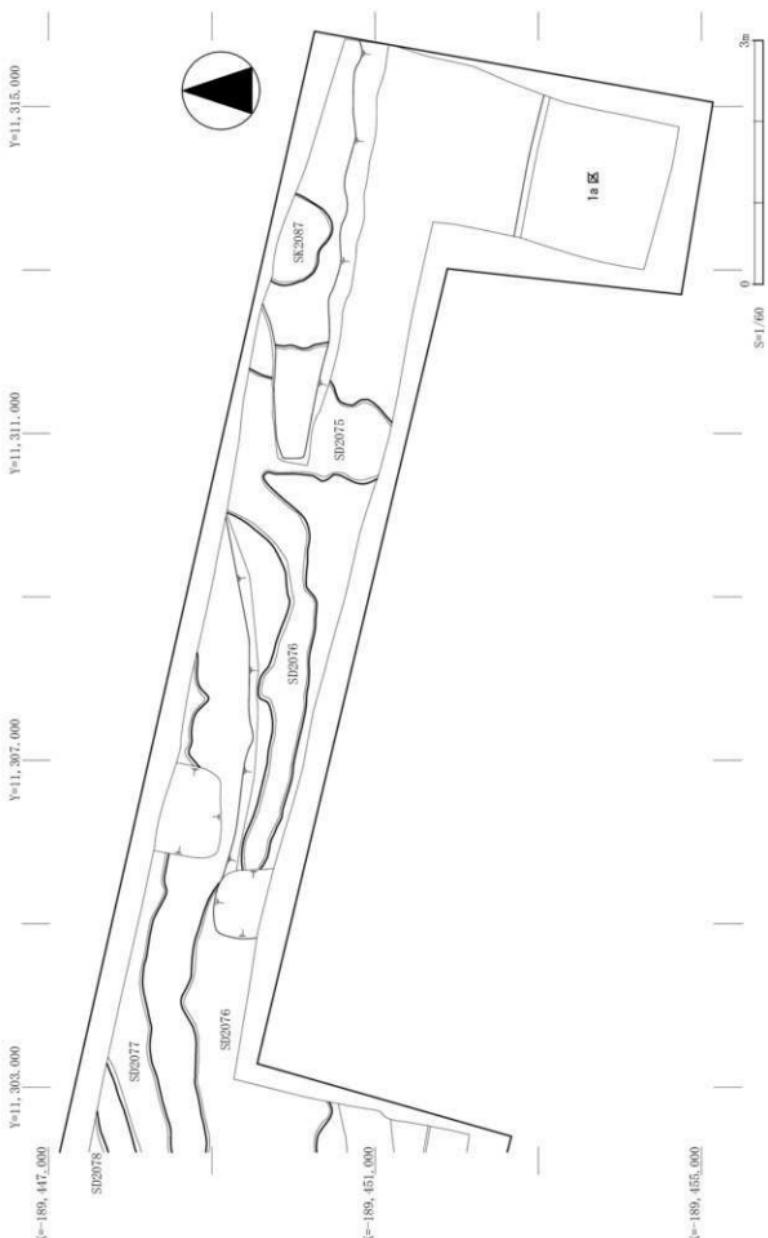
第4図 層序断面図

### (2) 発見遺構と遺物

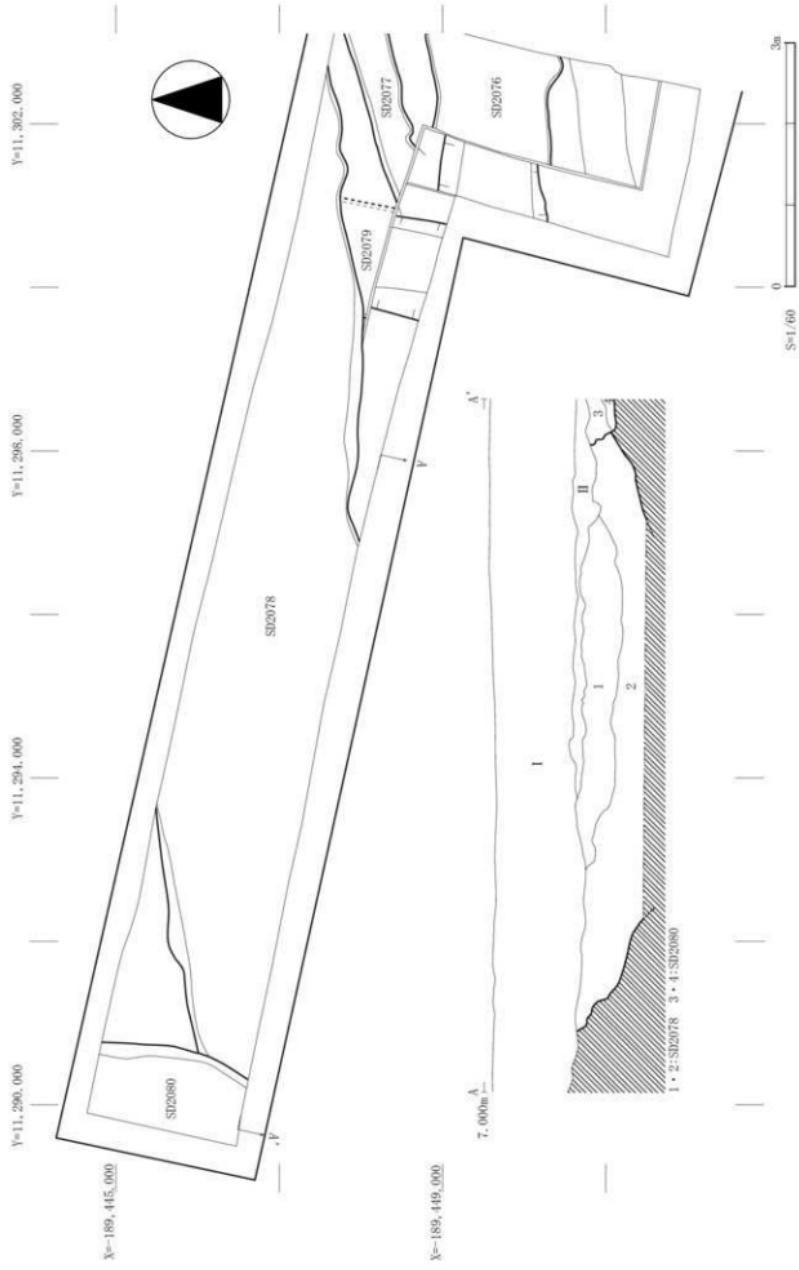
#### IV層上面検出遺構

第3図に示した1a区、2a区において、III層を掘り下げてIV層上面で溝跡などの遺構があることを確認した（写真図版1中央）。

第5図 1区Ⅲ層上面検出遺構平面図(東半部)



第6図 1区Ⅲ層上面突出造構平面図(西半部)



#### S D 2075 溝跡（第5図）

【位置】1区東側で発見した南北方向の溝跡であり、北側と南側は調査区外に延びる。

【重複】北西側でS D 2076とつながる。

【方向・規模】方向は北で約15度東に偏している。規模は長さ1.8m以上、上幅1.6mである。

【埋土】暗褐色土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 2076 溝跡（第5・6図）

【位置】1区東側で発見した東西方向の溝跡であり、北側と西側は調査区外に延びる。東半は、搅乱により上部が壊されている。

【重複】東側で北側に湾曲してS D 2075とつながる。

【方向・規模】方向は東で約21度北に偏している。規模は長さ9.6m以上、上幅1.7mである。

【埋土】暗褐色土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 2077 溝跡（第5・6図）

【位置】1区中央で発見した東西方向の溝跡であり、北側と西側は調査区外に延びる。

【重複】S D 2079と重複し、それより新しい。

【方向・規模】方向は東で約51度北に偏している。規模は長さ7.1m以上、上幅51cm、深さ17cmである。

【埋土】褐色砂質土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 2078 溝跡（第6図）

【位置】1区西側で発見した東西方向の溝跡であり、北側と南側は調査区外に延びる。

【重複】S D 2079・2080と重複し、S D 2080より古く、S D 2079より新しい。

【方向・規模】方向は東で約26度北に偏している。規模は長さ6m以上、上幅32m、深さ90cm以上である。

【埋土】2層に分けることができる（第6図1・2層）。1層は暗褐色土、2層の上方は褐色砂、下方は灰オリーブ粘土を基盤とし、部分的にオリーブ褐色土や黒褐色粘土を含む層である。1層と2層で複数時期のある溝跡の可能性も考えられるが、部分的にしか掘り下げていないため詳細は不明である。

【遺物】検出面から第10図-2に示した無釉陶器壺の口縁部破片のほか、土師器壺・甕、須恵器壺・甕・瓶、須恵系土器、丸瓦、繩文時代の不定形石器が出土した。

#### S D 2079 溝跡（第6図）

【位置】1区中央で発見した南北方向の溝跡であり、南側は調査区外に延びる。

【重複】S D 2077・2078と重複し、それらよりも古い。

【方向・規模】方向は北で約9度西に偏している。規模は長さ1.3m以上、上幅140cm、深さ45cmである。

【埋土】暗褐色土である。

【出土遺物】出土していない。

### S D 2080 溝跡（第6図）

【位置】1区西側で発見した南北方向の溝跡であり、東辺以外は調査区外である。

【重複】SD 2078と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約16度東に偏している。規模は長さ1.9m以上、上幅1.1m以上、深さ37cmである。

【埋土】2層に分けることができる（第6図3・4層）。3層は灰オリーブ土、黒褐色粘土、褐色砂質土の互層、4層は黒褐色土をブロック状に多量に含むにぶい黄褐色砂質土である。

【遺物】出土していない。

### S D 2081 溝跡（第7図）

【位置】2区東側で発見した東西方向の溝跡であり、北辺以外は調査区外である。

【方向・規模】方向は東で約36度北に偏している。規模は長さ3.5m以上、幅1.2m以上である。

【埋土】鉄分が若干沈着している暗オリーブ土である。

【遺物】出土していない。

### S D 2082 溝跡（第7図）

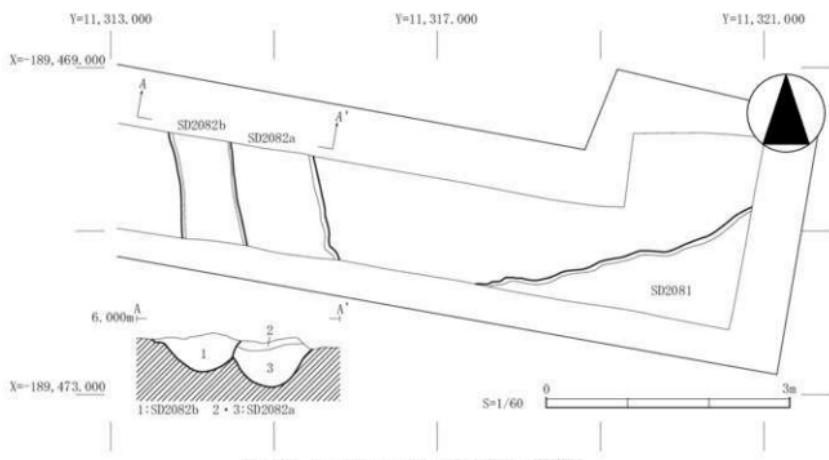
【位置】2区東側で発見した南北方向の溝跡であり、北側と南側は調査区外に延びている。

【重複】ほぼ同位置で2時期の変遷（A期→B期）を確認した。以下、古い順に報告する。

#### ・ A期

【方向・規模】方向は北で約27度西に偏している。規模は長さ1.3m以上、上幅1.1m以上、深さ58cmである。

【埋土】2層に分けることができる（第7図2・3層）。2層は暗褐色土、3層は暗褐色砂である。



第7図 SD 2081・2082 溝跡平面・断面図

【壁】壁は緩やかに外反しながら立ち上がっている。

【遺物】出土していない。

・B期

【方向・規模】方向は北で約27度西に偏している。規模は長さ1.3m以上、上幅75cm、深さ48cmである。

【埋土】褐色砂である。

【壁】緩やかに外反しながら立ち上がっている。

【遺物】出土していない。

S D 2083溝跡（第8図）

【位置】2区中央で発見した南北方向の溝跡であり、北側と南側は調査区外に延びている。

【重複】SD 2084と重複し、それよりも古い。

【方向・規模】方向は北で約29度西に偏している。規模は長さ1.3m以上、幅3.3m以上である。

【埋土】鉄分が多く沈着しているオリーブ黒色土である。

【遺物】出土していない。

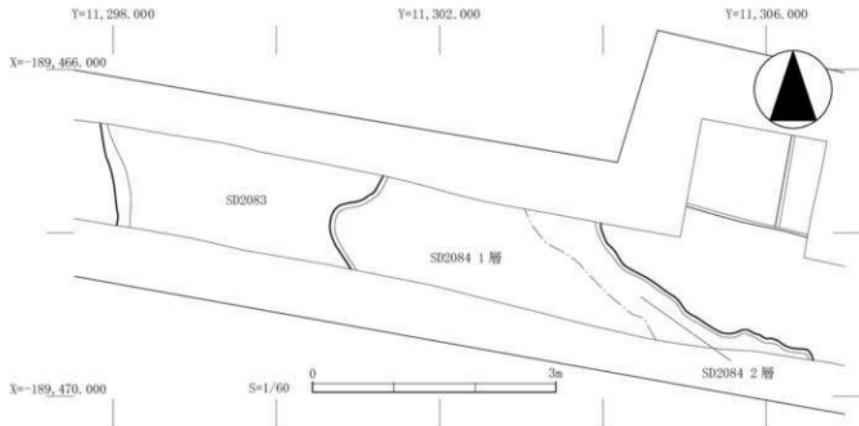
S D 2084溝跡（第8図）

【位置】2区中央で発見した東西方向の溝跡であり、北側と南側は調査区外に延びている。

【重複】SD 2083と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は東で約45度南に偏している。規模は長さ2.5m以上、上幅2.8m以上である。

【埋土】平面で確認した限りでは2層に分けることができる。1層はIV層にぶい黄褐色粘質土とSD 2083埋土のオリーブ黒色土のブロックが斑状に埋まっており、人為的な埋め土と考えられる。2層は灰黄褐色土であり、1層と2層で複数時期のある溝跡の可能性が高い。



第8図 SD 2083・2084溝跡平面図

【遺物】出土していない。

#### S D 2085 溝跡（第9図）

【位置】2区西側で発見した南北方向の溝跡であり、北側と南側は調査区外に延びている。

【方向・規模】方向は北で約4度東に偏している。規模は長さ1.2m以上、上幅0.9m～1.1mである。

【埋土】Ⅲ層の黒褐色土とⅣ層の黄褐色土をブロック状に多量に含む黒褐色粘質土である。

【遺物】検出面から土師器壺・甕（B類）、須恵器瓶の破片が出土している。

#### S D 2086 溝跡（第9図）

【位置】2区西端で発見した東西方向の溝跡であり、南辺以外は調査区外である。

【方向・規模】方向は東で約5度北に偏している。規模は長さ1.6m以上、上幅2.0m以上である。

【埋土】黄褐色土をブロック状に含み、鉄分が多量に沈着している暗褐色粘質土である。

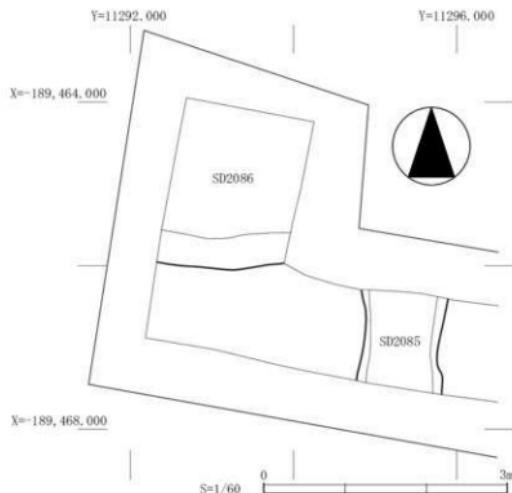
【遺物】検出面から須恵器壺・甕の破片が出土している。

#### S K 2087 土壙（第5図）

【位置】1区東側で発見した。北側は調査区外である。

【平面形・規模】平面形は不整円形をなし、規模は東西1.3mである。

【堆積土】にぶい黄橙色である。



第9図 S D 2085・2086 溝跡平面図



単位：cm

番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 甕	Ⅲ層	ロクロナデ	ロクロナデ	—	5.5 24/24	(4.7)	3-2	R1	
2	無釉陶器 壺	SD2078 検出面	ヨコナデ	ヨコナデ	— (1/24)	—	—	3-1	R2	

第10図 出土遺物

【遺物】出土していない。

### (3) 遺構外の出土遺物

I層から土師器坏・高台付坏・甕、須恵器坏・甕・瓶、丸瓦の破片、II層から須恵器瓶の破片、III層から第10図-1に示した土師器甕のほか、土師器坏・甕、須恵器坏・甕・瓶、丸瓦の破片が出土している。

### 3 まとめ

本調査ではIII層上面で溝跡と土塙、IV層上面で溝跡などを発見した。今回の調査は遺構の検出でとどめているため年代を推定できる手がかりはほとんど得られていないが、調査地の本発掘調査である新田遺跡第97次調査では、III2層とIV層との層離面に灰白色火山灰の堆積が確認できたことから、IV層上面検出遺構は10世紀前葉かそれ以前、III層上面検出遺構は10世紀前葉以降の年代と言える。III層上面検出遺構の中でも、第10図-2に示したSD2078溝跡の検出面から出土した無軸陶器は、内外面ともにヨコナデで調整され、口縁部が緩く屈曲して受け口状となる壺の破片である。口縁形態が常滑窯の編年における4型式に類似していることから、13世紀第1四半期のものと考えられる。よって、今回発見した遺構の中にも、中世のものが存在する可能性がある。

### 参考文献

- 愛知県史編さん委員会 「愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑福」 2012  
中野晴久 「常滑・渥美」「概説 中世の土器・陶磁器」 真陽社 1995 pp.383-400



1区層序（北より）



1a区IV層上面遺構検出状況  
(北より)



S D 2076 溝跡検出状況  
(南西より)

写真図版 1



S D 2078 溝跡検出状況  
(南東より)



S D 2083・2084 溝跡検出状況  
(南東より)



S D 2081・2082 溝跡検出状況  
(北東より)

写真図版2



S D 2084 溝跡検出状況  
(北西より)



S D 2085 溝跡検出状況  
(南より)



無釉陶器 (S D 2078 検出面出土)



土師器甕 (Ⅲ層出土)

写真図版3

# 附章 新田遺跡第95次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

## 1はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れるとともに微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネを中心とするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山、1984）。

新田遺跡第95次調査では、土層断面の観察において水田耕作層とみられる堆積層が認められた。そこで、当該層における稻作の可能性を検討する目的でプラント・オパール分析を実施することになった。

## 2 試料

分析試料は、V1層の暗灰色粘土1点で、調査担当者によって採取され、当社に送付されたものである。

## 3 分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を  $105^{\circ}\text{C}$  で 24 時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約 1 g に直径約  $40 \mu\text{m}$  のガラスピーブを約 0.02 g 添加（電子分析天秤により  $0.1\text{mg}$  の精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法 ( $550^{\circ}\text{C} \cdot 6$  時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 ( $300\text{W} \cdot 42\text{KHz} \cdot 10$  分間) による分散
- 5) 沈底法による  $20 \mu\text{m}$  以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が 500 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料 1 g 中のプラント・オパール個数（試料 1 gあたりのガラスピーブ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは 1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}\text{g}$ ）を乗じて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。

各分類群の換算係数は、イネ（赤米）は 2.94（種実重は 1.03）、ヒエ属は 8.40、ヨシ属（ヨシ）は 6.31、ススキ属（ススキ）は 1.24、メダケ節は 1.16、ネザサ節は 0.48、チマキザサ節は 0.75、ミヤコザサ節は 0.30 である（杉山、2000）。

#### 4 結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、ヨシ属、スキ属型、タケ亜科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。また、プラント・オパール以外に海綿骨針が検出された。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、図1に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

分析試料からは、チマキザサ節型が比較的高い密度で検出された。次いでメダケ節型、ミヤコザサ節型、ネザサ節型、スキ属型がやや低い密度であり、ヨシ属が少量である。海綿骨針も低い密度である。

#### 5 新田遺跡第95次調査における稲作と推定される周辺植生・環境

当該試料からは、イネのプラント・オパールは検出されなかった。主な分類群の推定生産量（図の右側）をみるとチマキザサ節型がやや多いものの、ヨシ属、スキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、ミヤコザサ節型はごく少量である。こうしたことから、当該試料が採取された層準はイネ科草本植物の生育には適さない環境であったと推定され、ここで稲作が行われていた可能性は考えにくい。

#### 6 まとめ

新田遺跡第95次調査においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討を行った。その結果、イネのプラント・オパールは検出されず、当該層で稲作が行われていた可能性は認められなかつた。また、その他のプラント・オパールも低密度であることから、当該層の堆積時はイネ科草本植物の生育に適さない堆積環境であったと推定された。

#### 文献

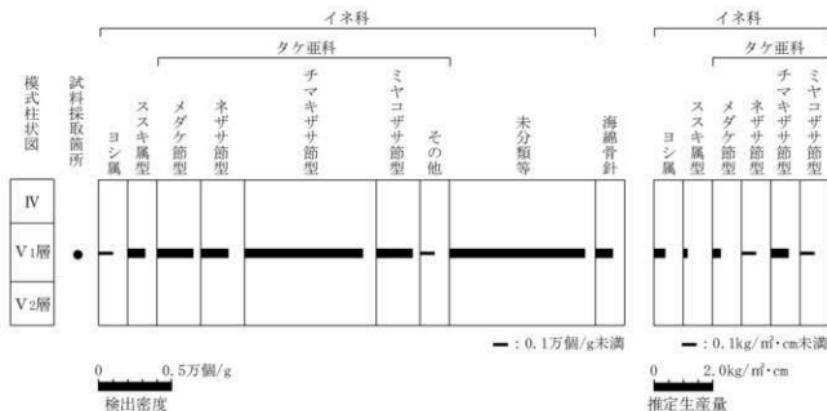
- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体、富士竹類植物園報告、31、p.70-83.  
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）、考古学と植物学、同成社、p.189-213.  
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9、p.15-29.  
藤原宏志（1998）稲作の起源を探る、岩波新書

表1 多賀城市新田遺跡第95次調査のプラント・オパールの分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		
分類群(和名・学名)	層位	
イネ科	Gramineae (Grasses)	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	6
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	12
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	25
ネザサ節型	<i>Pleioblastussect. Nezasa</i>	19
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	81
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	25
その他	Others	6
未分類等	Unknown	93
(海綿骨針)	Sponge	12
プラント・オパール総数	Total	267

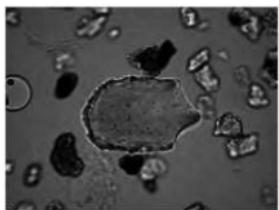
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.39
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.15
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	0.29
ネザサ節型	<i>Pleioblastussect. Nezasa</i>	0.09
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	0.61
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	0.07

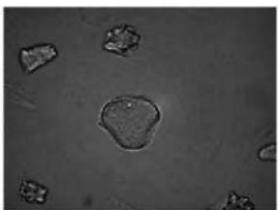


第1図 新田遺跡第95次調査のプラント・オパール分析結果

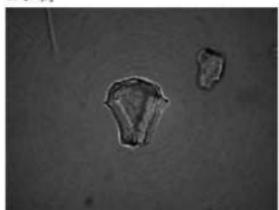
新田遺跡第95次調査のプラント・オバール



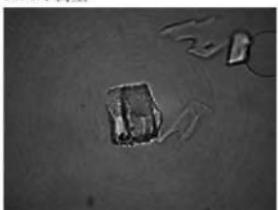
ヨシ属



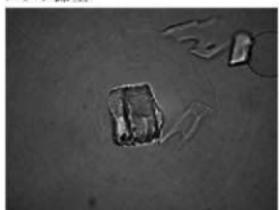
ススキ属型



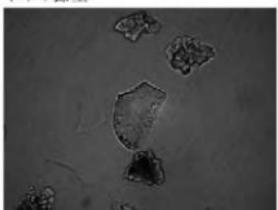
メダケ節型



ネザサ節型



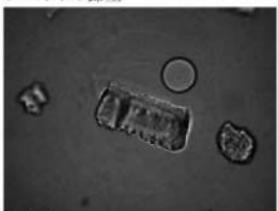
チマキザサ節型



チマキザサ節型



ミヤコザサ節型



未分類



海綿骨針

— 0.1 m

### III 山王遺跡第126次調査

#### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、個人住宅建築に伴う本発掘調査である。平成24年12月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、住宅部分の基礎工事として直径60cm、深さ5.5~8mの柱状改良を36箇所施すこととなっていた。本調査区の北側隣接地の調査成果から、地表面から遺構検出面までの深さは70~80cmであることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、計画以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのこ



第1図 調査区位置図

とから記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、4月4日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

調査は4月10日より開始した。重機を使用して現代の盛土及び水田層を除去した。排水用の側溝を掘つて断面を観察したところ、IV層下面で耕作痕と考えられる層境の乱れとⅢ層にて畦畔状の高まりを確認した。11日からⅢ層上面の精査を開始し、遺構がないことを確認してⅢ層検出状況の写真撮影を行い、掘り下げを進めた。その後、Ⅲ層掘り下げ中にSX1774水田跡の畦畔を検出した。13日にSX1774畦畔検出状況の写真撮影を行い、その後耕作土上面のⅢ層を掘り下げてSX1774の耕作面を検出して図面の作成を行った。17日からIV層を掘り下げ、V層上面で遺構がないことを確認し、さらに掘り下げ進めたところ、調査区北東隅でSX1773水田跡の畦畔を検出した。18日にSX1773畦畔検出状況の写真撮影を行い、V層を掘り下げてSX1773耕作面を検出した。23日に検出状況の写真撮影をおこなったのち、25日に調査区壁の断面図を作成し、26日に埋め戻し、27日に全ての調査を終了した。

#### 2 調査成果

##### (1) 層序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである（第2図）。

I層：現代の表土・盛土層で、厚さは1.4mである。

II層：現代の水田層で、厚さは30cm未満である。

III層：白色砂質土をブロック状に含むオリーブ黒色の粘土層で、厚さは10cmである。土壤分析の結果、

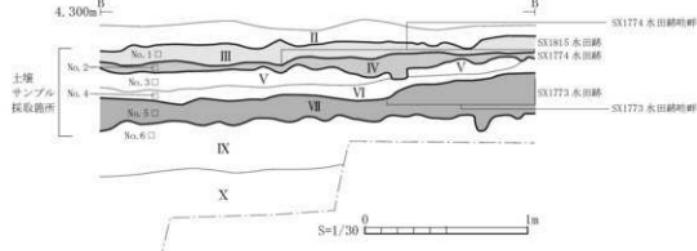
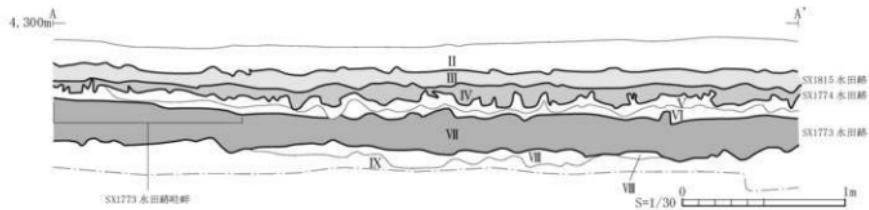
5,500 個／g の高密度でイネのプランツ・オバールが検出されたことから、10世紀前葉以降の水田跡（S X 1815）の耕作土と考えられる。

IV層：オリーブ黒色の粘土層で、厚さは5～15cmである。底面には著しい起伏が見られ、層の下方には耕作時に巻き上げられたと考えられるV層の暗褐色粘土がブロック状に混入している。10世紀前葉以降の水田跡（S X 1774）の耕作土及び畦畔である。

V層：褐色、黒褐色土をブロック状に含む暗褐色粘土層で、厚さは15cmである。S X 1774 の耕作の土圧により、層全体の起伏が顕著である。

VI層：暗褐色粘土で、厚さは5～15cmである。層の下方は、にぶい黄褐色土である。層の上面から干割れ状の痕跡が下に延びており、その中には灰白色火山灰が少量沈殿していることから、10世紀前葉以前の堆積層と考えられる。

VII層：黒褐色の粘土層で、厚さは10～30cmである。下方は、耕作によって巻き上げられたと考えられ



第2図 層序断面図

るⅧ層のにぶい黄褐色砂質土が混入しており、底面には耕作痕と考えられる凹凸がある。VI層上面から延びている干割れが全面に及び、その中には灰白色火山灰が沈殿しており、平面的には亀甲状に灰白色火山灰層が分布するような状況である。SX 1773 水田跡の耕作土及び畦畔である。

VII層：調査区東側に部分的に堆積する暗褐色砂質土であり、厚さは5～15cmである。

IX層：黄褐色砂質土層であり、厚さは30cmである。

X層：灰オリーブ色粘土の植物遺存体層を主体とし、黒色の植物遺存体層と相互に堆積している。厚さは50cm以上である。

## （2）発見遺構と遺物

### VII層発見遺構

#### SX 1773 水田跡（第3図）

【水田域】VII層全域で発見し、水田層は調査区外に延びている。

【検出状況】畦畔はVI層を掘り込んでいく過程で検出した。

【区画・耕作土】1区画を検出した。平面形は不明である。規模は東西2.2m以上、南北4.1m以上であるが、調査区外に延びるため詳細は不明である。耕作土の厚さは10～30cmであり、底面には耕作時の痕跡と考えられる土層の乱れが確認できる。

なお、VII層のイネのプラント・オパール密度は1,800個／gである（附章参照）。

【畦畔の規模・方向】南北方向の畦畔を検出した。規模は、上幅50cm以上、下幅60cm以上、残存する高さは耕作土上面から約15cmであるが、ほとんどが調査区外に延びているため詳細は不明である。方向は北で約27度西に偏している。

【水田面の標高・傾斜】標高は3.64m～3.68mで、ほぼ平坦である。

【遺物】出土していない。

### IV層発見遺構

#### SX 1774 水田跡（第4図）

【水田域】VI層全域で発見し、水田層は調査区外に延びている。

【検出状況】畦畔はV層を掘り込んでいく過程で検出した。

【区画・耕作土】規模は東西1.5m以上、南北3.5m以上であるが、調査区外に延びるため詳細は不明である。

耕作土の厚さは5～15cmであり、底面には耕作時の痕跡と考えられる土層の乱れが顕著に確認できる。

なお、IV層のイネのプラント・オパール密度は3,000個／gである（附章参照）。

【畦畔の規模・方向】南北方向の畦畔1と、東西方向に延びる畦畔2を検出した。畦畔1の規模は上幅70cm以上、下幅80cm以上、残存する高さは耕作土上面から約5cmであり、方向は北で約11度西に偏している。畦畔2の規模は上幅70cm以上、下幅80cm以上、残存する高さは耕作土上面から約2cmであり、方向は東で約9度北に偏している。

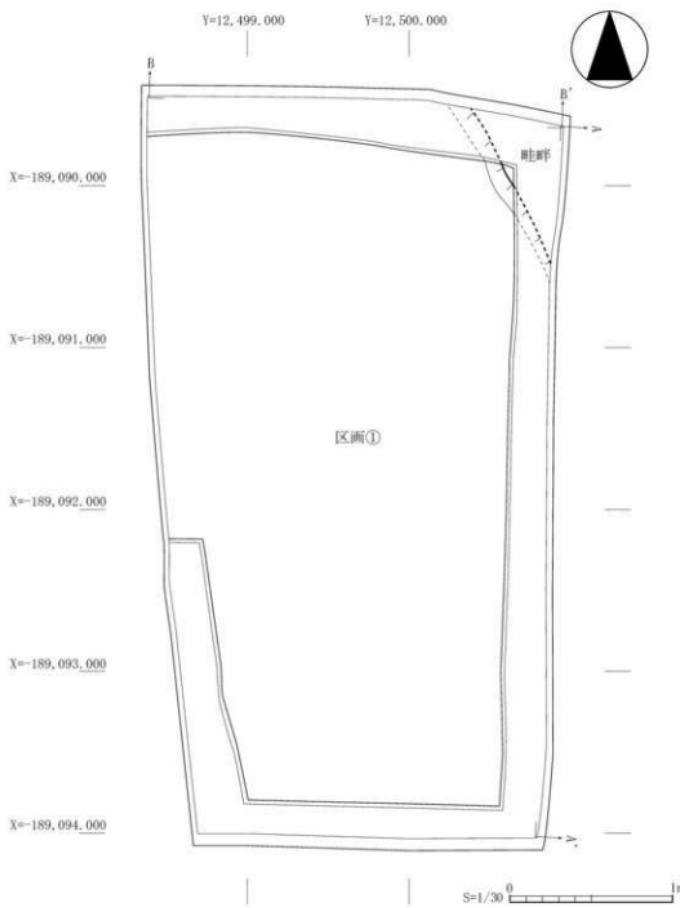
【水田面の標高値・傾斜】標高は3.87m～3.89mで、ほぼ平坦である。

【遺物】出土していない。

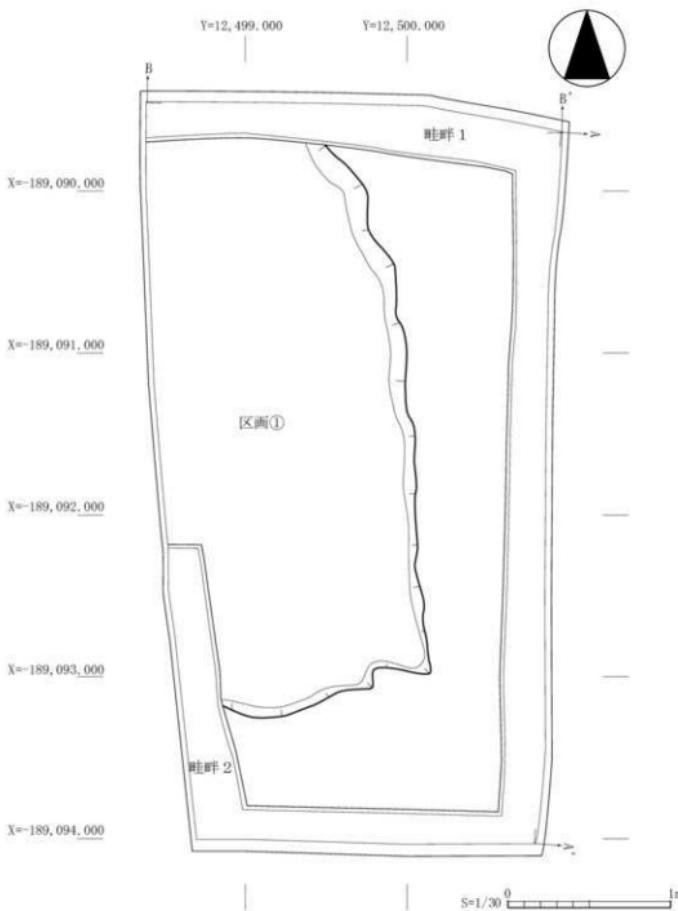
### III層発見遺構

#### SX 1815 水田跡（第2図）

III層が水田耕作土である。畦畔などは確認できなかったが、土壤分析の結果、5,500個／gの高密度で



第3図 SX 1773 水田跡平面図



第4図 S X 1774 水田跡平面図

イネのプラント・オパールが検出されている（附章参照）。耕作土中から土師器甕、須恵器坏の小破片が出土した。

#### 遺構外の出土遺物

II層中から須恵系土器坏、須恵器坏の小破片が出土した。

### 3 まとめ

S X 1773 水田跡は、廃絶後にVI層が堆積し、その後堆積面が干上がり、干割れ中に灰白色火山灰が降下、沈殿したと考えられることから、10世紀前葉以前のものと考えられる。一方、S X 1774・1815 水田跡は、灰白色火山灰との関係から、10世紀前葉以降の水田跡である。

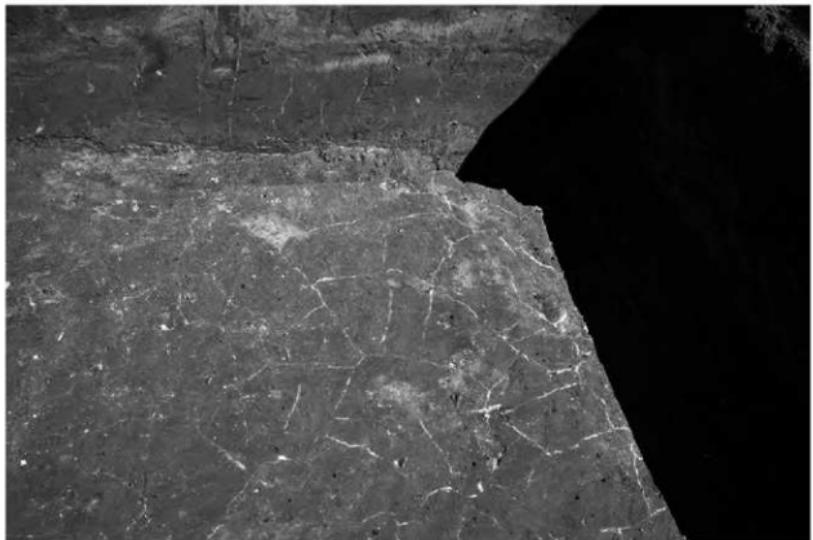


調査区北壁断面（南より）



S X 1773 畦畔検出状況（南西より）

写真図版 1



S X 1773 水田跡灰白色火山灰沈殿状況（西より）



S X 1774 畦畔検出状況（南東より）

写真図版2

# 附章 山王遺跡第126次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

## 1 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネを中心とするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

山王遺跡第126次調査では、それぞれ10世紀前葉以前と10世紀前葉以降の水田層とみられる堆積層が認められた。そこで、これらの層における稻作の可能性を検討する目的でプラント・オパール分析を実施することになった。

## 2 試料

分析試料は、上位より10世紀前葉以降のIV層とその上下層（III層、V層）、10世紀前葉以前のVI層とその上下層（VII層、IX層）の計6点である。いずれも調査担当者によって採取され、当社に送付されたものである。

## 3 分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに直径約40μmのガラスピーブズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブズ個数が500以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスピーブズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}\text{g}$ ）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。

各分類群の換算係数は、イネ（赤米）は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、スキ属（スキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山、2000）。

#### 4 結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、スキ属型、タケア科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。また、プラント・オパール以外に海綿骨針が認められた。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、図1に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

イネはⅢ層、Ⅳ層、Ⅶ層で検出されている。Ⅲ層とⅣ層では高い密度である。ヨシ属はⅢ層、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵ層、Ⅷ層の各層で検出されている。Ⅶ層では高い密度であり、Ⅵ層でも比較的高い密度である。スキ属型はすべての層で検出されているが、いずれも低い密度である。タケア科のメダケ節型とネザサ節型はⅢ層～Ⅵ層とⅨ層で、チマキザサ節型はすべての層で、ミヤコザサ節型はⅢ層で検出されているが、いずれも低密度である。海綿骨針はⅤ層、Ⅵ層、Ⅶ層で検出されているが、いずれも低い密度である。

#### 5 山王遺跡第126次調査における稻作と推定される周辺植生・環境

稻作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、通常、イネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。ただし仙台平野（仙台市域、多賀城市域）では、密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満でも水田遺構が検出された事例が多く報告されていることから、ここでは3,000個/gを目安として検討する。

本調査地では、10世紀前葉以降の水田層？（Ⅳ層）とその上層（Ⅲ層）、10世紀前葉以前の水田層？（Ⅶ層）でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、Ⅳ層ではプラント・オパール密度が3,000個/gと高い値であり、稻作跡の判断基準である3,000個/gに達している。このことから、当該層において稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。上層のⅢ層では5,500個/gとさらに高い密度であることから、ここも水田耕作層であった可能性が高いと判断される。Ⅶ層ではプラント・オパール密度が1,800個/gとやや低い値であるが、直上のⅥ層からはイネは検出されていない。上層から後代のプラント・オパールが混入した危険性は考えにくいことから、Ⅶ層においても調査地で稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

イネ以外の分類群では、ヨシ属がⅦ層で高い密度である。当該層では調査地はヨシ属が生育するような湿地の環境であり、そこを利用して水田稻作が行われたと考えられる。また、その他の層では周辺の比較的乾いたところにはチマキザサ節などのササ属やスキ属なども生育していたと推定される。

#### 6 まとめ

山王遺跡第126次調査においてプラント・オパール分析を行い、稻作の可能性について検討を行った。その結果、10世紀前葉以前の水田層と考えられたⅦ層、10世紀前葉以降の水田層と考えられたⅣ層とその上層のⅢ層において稻作が行われていた可能性が高いと判断された。

なお、Ⅶ層では調査地は湿地の環境であり、そこを利用して水田稻作が行われたと推定された。その他の層では、周辺の比較的乾いたところにササ属やススキ属などが生育していたと推定された。

## 文献

杉山真二（1987）タケア科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告。31, p.70-83.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学。同成社。p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学。9, p.15-29.

藤原宏志（1998）稻作の起源を探る。岩波新書。

表1 多賀城市山王遺跡第126次調査のプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		III層	IV層	V層	VI層	VII層	IX層
分類群 (和名・学名)	層位						
イネ科	Gramineae (Grasses)						
イネ	<i>Oryza sativa</i>	55	30			18	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	6	18	12	24	42	
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	12	6	6	6	12	6
タケ類科	Bambusoideae (Bamboo)						
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	24	6	18	6	12	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	12	12	6	18	12	
チマキササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	12	12	18	12	6	18
ミヤコササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	6					
未分類等	Unknown	73	54	60	55	54	36
(海綿骨針)	Sponge				6	12	6
プラント・オパール総数	Total	200	138	120	121	132	84
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m <sup>2</sup> ・cm)							
イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.60	0.88			0.53	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.38	1.14	0.76	1.53	2.66	
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.15	0.07	0.07	0.08	0.15	0.07
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.28	0.07	0.21	0.07		0.14
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.06	0.06	0.03	0.09		0.06
チマキササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.09	0.09	0.14	0.09	0.05	0.13
ミヤコササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.02					

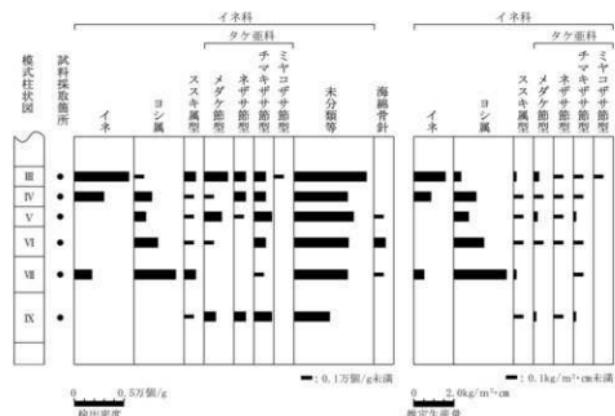
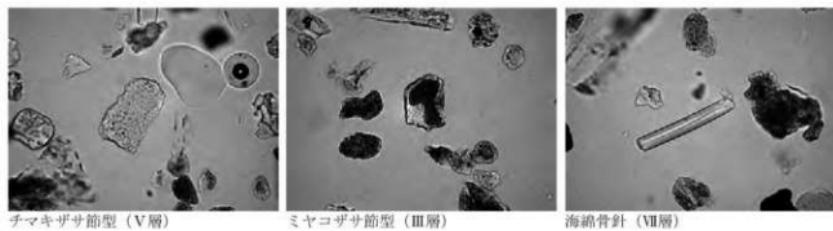
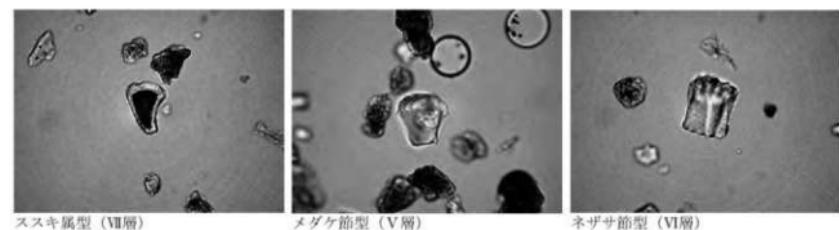
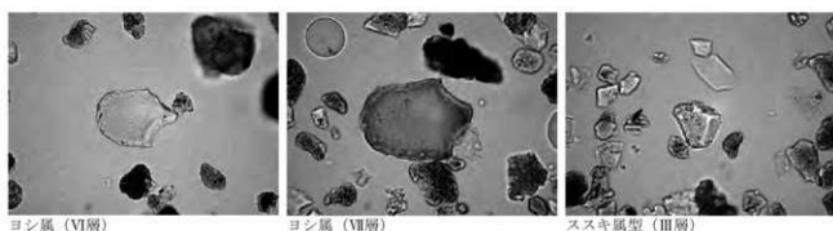
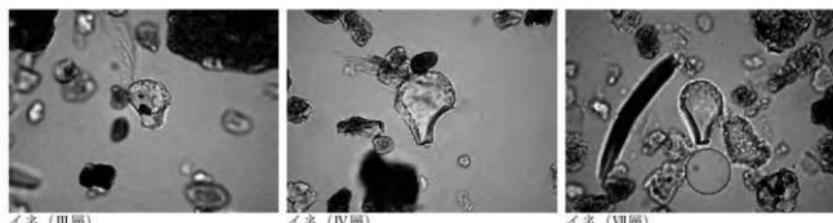


図1 山王遺跡第126次調査のプラント・オパールの分析結果

山王遺跡第126次調査のプラント・オバール



— 50  $\mu$ m

## IV 山王遺跡第128次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字中山王地内における個人住宅新築に伴うものである。平成25年3月、地権者より当該区における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅の基礎工事の際に直径60cm、深さ7mの柱状改良を40箇所で施すことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺跡保存の協議を行ったが、申請どおりの工法で着手することに決定したことから、本発掘調査を実施することとなった。5月1日に地権者から発掘調査に関する依頼・承諾の提出を受け、5月9日より現地調査を開始した。

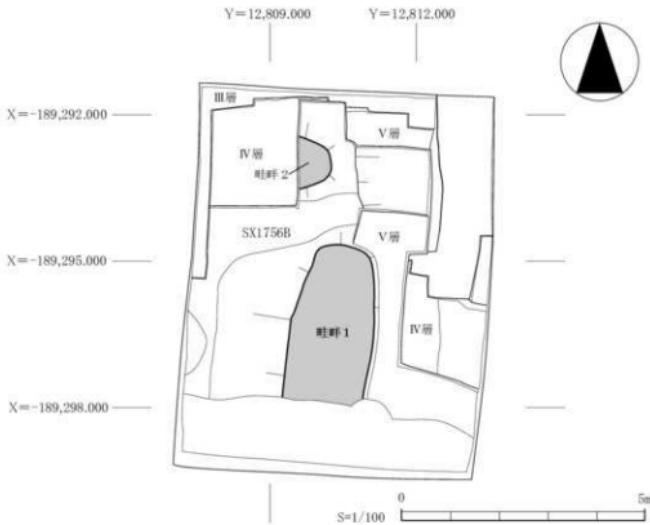
はじめに、重機による住宅建築部分の表土除去から取りかかり、現表土下50~60cm下の黒褐色砂質土(Ⅲ層)上面でS B 1769・1770掘立柱建物跡やS K 1772土壤、東西方向のS D 1865溝跡を確認した。直ちに作業員を動員し、順次それらの掘り下げを行った。このうち、S D 1865は調査区南端部で確認したものであるが、周辺の調査成果や埋土の状況から近世以降の溝跡であると判断した。また、この作業と並行して調査区東西壁際にサブトレーナーを設け土層観察を行った結果、Ⅲ層下層にも複数の遺構検出面が存在していることを確認した。23日、Ⅲ層上面の全景写真を撮影し、28日より平面・断面図の作成を行う。6月1日、Ⅲ層の掘り下げを開始し、暗褐色砂質土(Ⅳ層)上面でS I 1763堅穴住居跡、S D 1766南北溝跡を確認した。なお、Ⅲ層上面のS D 1865に破壊されていたS E 1765・1764井戸跡、S D 1767溝跡については、当初Ⅳ層上面検出遺構と判断したが、壁面のサブトレーナー等を精査した結果、Ⅲ層上面検出であることを確認した。これら遺構の新旧関係を把握した4日から、埋土の掘り下げを順次行い、終了したものから平面・断面図の作成を行った。なお、調査区壁のサブトレーナーで古墳時代前期と推定される水田層の存在が明らかとなっていたが、S D 1767の埋土を掘り下げたところ、その断面で大規模な畦畔が残存していることを確認した。16日、Ⅳ層上面の全景写真を撮影し、直ちに下層にある水田層の検出作業を開始した。23日、南北・東西の大畦畔を確認し、25日に全景写真撮影及び平面・断面図の作成を行った。27日、水田層の土壤サンプルを行うとともに、断面図の再確認及び調査範囲の座標測量を行うなどの補足調査を実施した。28日、重機による埋め戻しを行い、本発掘調査の一切を終了した。



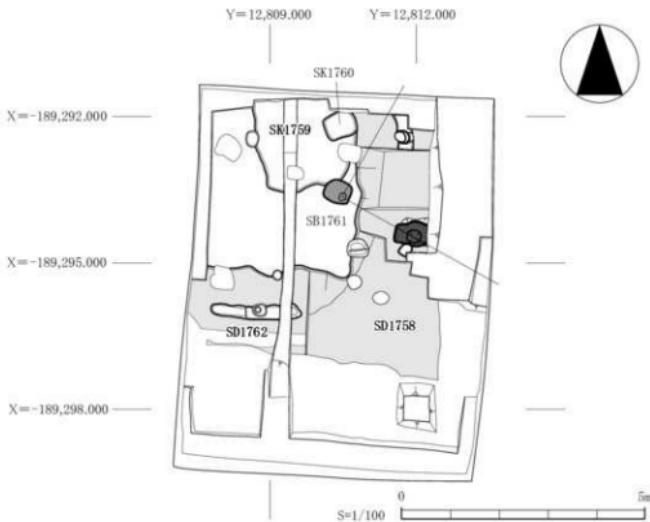
第1図 調査区位置図



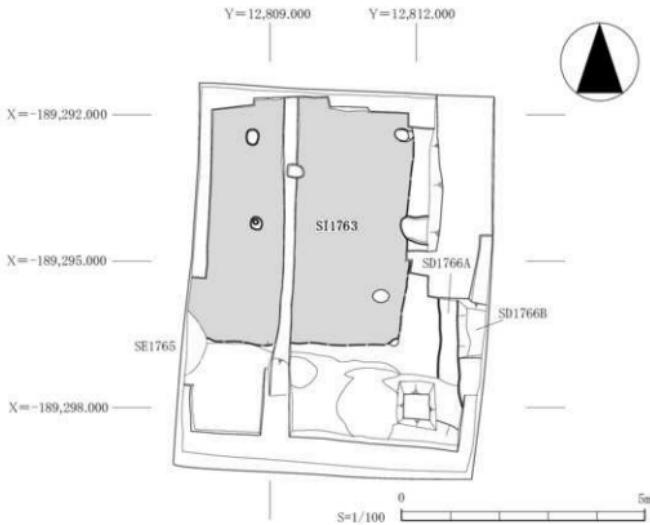
水田畦畔掘り下げの様子



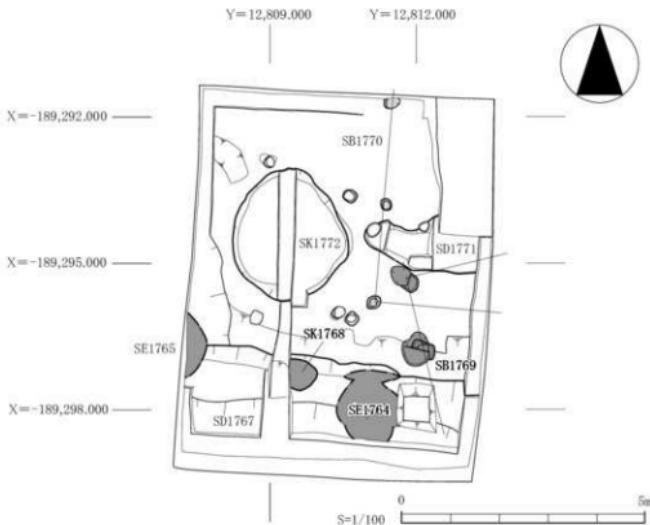
第2図 IV層水田跡平面図



第3図 IV層上面検出遺構平面図(1)



第4図 N層上面検出構平面図(2)



第5図 III層上面検出構平面図

## 2 調査成果

### (1) 層序 (第6図)

今回の調査では、現在の表土以下8層の堆積を確認した。

I 層：現代の造成による盛土で、厚さは約50cmである。

II 層：造成前の旧耕作土である。厚さは10～20cmである。

III 層：全域で確認した黒褐色砂質土で、厚さは10～20cmである。周辺地区の調査成果より、10世紀前葉以降の堆積であることが明らかである。

IV 層：全域で確認した暗褐色砂質土であり、厚さは約10～20cmである。古代の遺構検出面である。

V 1層：全域で確認したにぶい黄褐色砂質土である。古墳時代の大畦畔上面は10cm程度の厚さであるが、耕作土上面では40～50cm残存している。

V 2層：古墳時代の水田層直上に堆積する灰黄褐色粘質土であり、厚さは約20cmである。

VI 層：黒褐色粘土であり、厚さは5～10cmである。古墳時代前期の水田耕作土であり、大規模な畦畔2条と水口を確認した。土壤分析の結果、イネのプラント・オパールが1,200～1,800個/g検出されている（附章1）。

VII 層：黒褐色粘土である。古墳時代前期の水田耕作土であり、大規模な畦畔1条を確認した。厚さは耕作土部分が5～10cm、畦畔部分が40～50cmである。土壤分析の結果、イネのプラント・オパールが1,200～3,600個/g検出されている（附章1）。

VIII 層：にぶい黄褐色砂質土である。縮りが弱いことや、湧水が著しいことから、面的な調査は行っていない。

### (2) 発見遺構と遺物

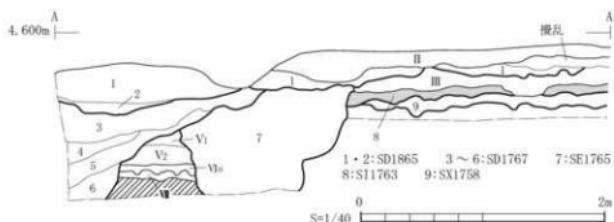
今回の調査では、VII・VI層が水田層であることを確認したほか、IV層及びIII層上面で掘立柱建物跡や堅穴住居跡、井戸跡、溝跡、土壙などを発見した。以下、層序ごとに発見した遺構について記載する。

#### VII・VI層発見遺構

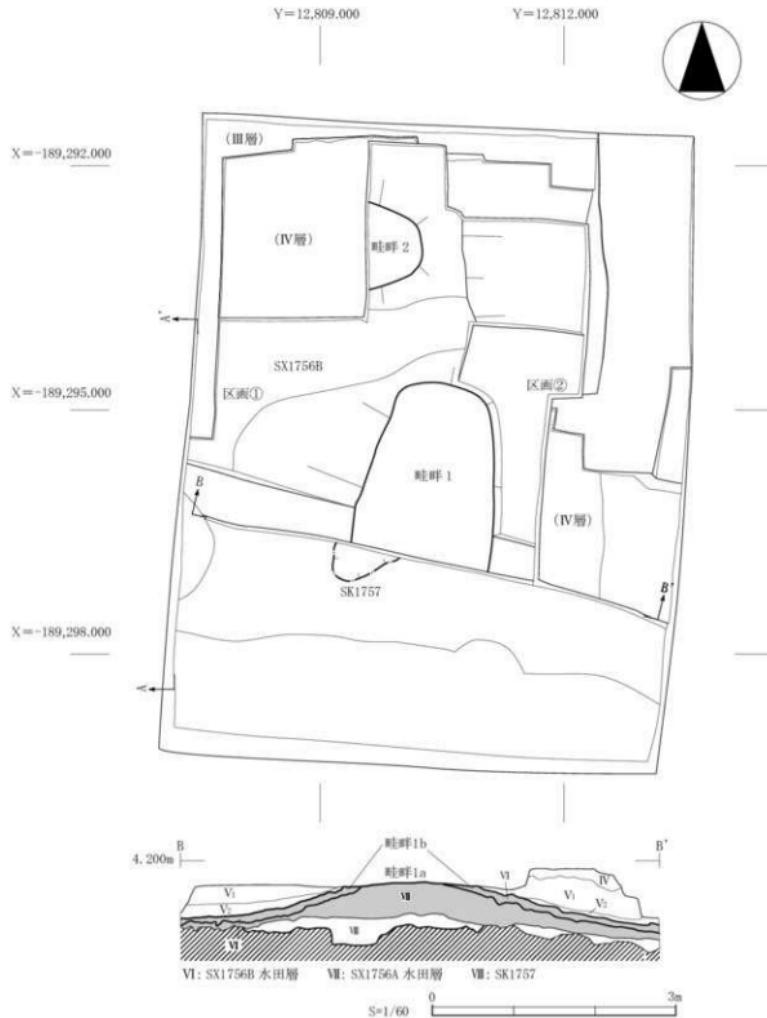
##### S X 1756 水田跡 (第6・7・8図)

【水田域】調査区全域のVII・VI層が水田層であり、2時期の変遷（VII層：A期→VI層：B期）がある。

【検出状況】V 1・V 2層を掘り込んでいく過程で確認したが、調査区の制限により、一区画全体の規模が明らかなものはない。中央部で南北方向の畦畔（畦畔1）、北側で東西方向の畦畔（畦畔2）、畦畔1・



第6図 調査区西壁土層断面図



第7図 SX 1756 水田跡ほか平面・断面図

2間では水口（水口1）を検出した。畦畔1には2時期の変遷（畦畔1a→1b）があり、畦畔1aがA期水田、畦畔1bがB期水田に伴うものである。畦畔1を境に西側を区画①、東側を区画②とした。

・A期：畦畔1a、区画①a・②aを発見した。

【区画・耕作土】区画①aは畦畔1a西側で確認した。規模は東西1m以上であるが、東西方向の断面で確認したのみであるため南北の規模は明らかでない。耕作土の厚さは5~10cmであり、底面には耕作時の痕跡と考えられる土層の乱れが顕著に観察できる。畦畔1a東側の区画②aは調査区東側に緩やかに下っており、本調査区内では明確な耕作痕は認められない。

なお、イネのプランツ・オパール密度は区画①aが3,600個/g、区画②aが1,200個/gである。

【畦畔の規模・方向】畦畔1aは調査区中央部で確認した、大規模な南北方向の畦畔である。規模は上幅約1m、残存する高さは耕作土上面から約50cmである。方向は北で東に約5度偏している。上端部は非常に堅く締まっており、西側耕作土への傾斜は緩やかである。

【遺物】出土していない。

・B期：畦畔1b・2、区画①b・②b、水口1を発見した。

【区画・耕作土】区画①bは畦畔1b・2に開まれた区域である。規模は南北4m以上、東西1m以上であり、確認できる耕作土の厚さは5~10cmである。耕作土底面には、耕作時の痕跡と考えられる土層の乱れが顕著に観察できる。畦畔1b東側の区画②bは、A期同様調査区東側に緩やかに下っており、本調査区内では明確な耕作痕は認められない。

なお、イネのプランツ・オパール密度は区画①bが1,200個/g、区画②bが1,800個/gである。

【畦畔の規模・方向】畦畔1b・2とともに大規模なものである。畦畔1bは調査区中央部で確認した南北方向のものであり、畦畔1aを東西に約70cm拡幅している。規模は上幅1.7m、残存する高さは耕作土上面から約40cmである。方向はA期と同様である。畦畔2は東西方向のものであり、規模は上幅1m以上である。

【水口】水口は区画1の北東隅で確認した。上幅約1.3m、畦畔上面からの深さは約10cmである。壁は凹凸が少なく、非常に緩やかに立ち上がっている。底面は水口の中央部分が最も浅く、区画①・②に向かってやや急角度に下がっている。

【遺物】土師器壺が出土している。



第8図 S X 1756 A期出土遺物

#### IV層上面検出遺構

掘立柱建物跡、堅穴住居跡、溝跡、土壌を発見した。

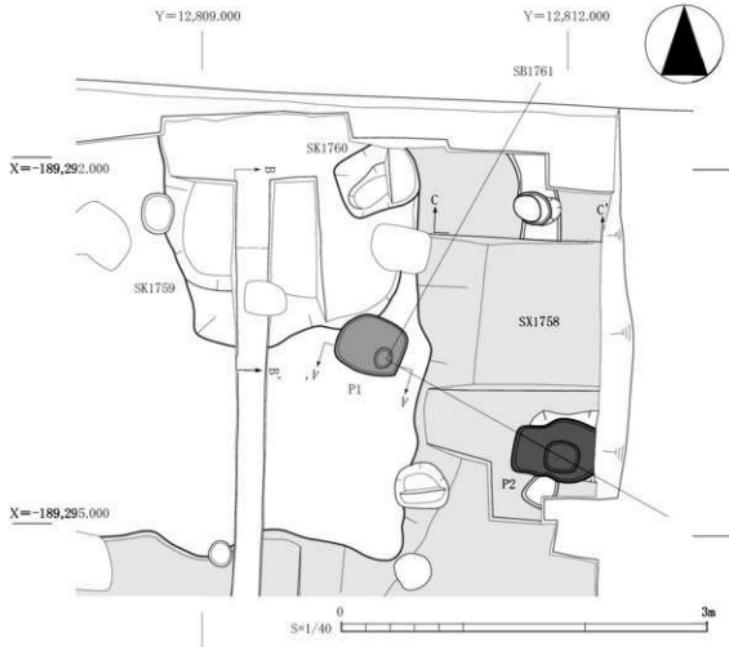
#### S B 1761 掘立柱建物跡（第9・10図）

【位置】調査区北東部で発見した。

【桁行・梁行】2基の柱穴（P1・2）より推定したものであり、南西隅柱穴から南側柱列1間分を確認したと考えられる。このため、本調査区内での桁行・梁行は不明である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】2基ともに柱抜取り穴が認められ、P1では柱のあたり痕跡を確認した。

【重複】S I 1763、S K 1759、S D 1758と重複しており、S I 1763よりも古く、S K 1756、S D 1768よりも新しい。



第9図 S B 1761、S K 1759 ほか平面図



番号	種類	遺構 層位	特徴		口径 底径 残存率 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面					
1	土師器 壺	SB1761 柱抜取り穴	ヘラナデ	ヘラナデ	— 4/24	9.32	— —	R2	A類

第10図 S B 1761 出土遺物

【方向・規模】方向は西で約28度北に偏しており、柱間は約1.8mである。

【掘方】柱穴の平面形はおよそ方形を基調としており、規模はP1で測ると長辺56cm、短辺47cm、深さ40cmである。埋土はにぶい黄褐色砂質土がブロック状に混入する黒褐色砂質土が主体であり、黒色粘土が斑状に若干混入している。

【柱抜取り穴】柱抜取り穴はP1では柱穴の東端に柱穴状に、P2では中央部で楕円状に認められる。埋土は黒色粘質土が主体であり、にぶい黄褐色砂質土がブロック状に僅かに混入している。

【出土】柱抜取り穴から土師器壺（A類）、須恵器壺の小片が出土している。

#### S I 1763 穫穴住居跡（第11図）

【位置】調査区中央から北西側で発見した。

【残存状況】上面はⅢ層の堆積及びⅢ層上面検出のSK1772によって削平されており、残存状況は極めて悪い。

【重複】SB1761、SK1759、SD1758と重複しており、これらよりも新しい。

【平面形・方向】平面形は方形であり、方向は東辺で測ると北で約3度東に偏している。

【規模】東辺が4.1m以上、南辺が3.6m以上である。

【床面の状況】床はにぶい黄褐色及び黒色砂質土が小ブロック状に多量に混入する黒褐色砂質土の貼床であり、厚さは5~10cmである。

【支柱穴】床上面で4基確認している（P1~4）。対角線上に均等に配されており、4基とも柱は抜き取られている。各柱穴の間隔は平均で約2.7m、対角線上はP1・3間が約3.7m、P2・4間が約4mである。平面形はおよそ方形であり、規模はP1で測ると長辺45cm、短辺40cm、深さ26cmである。掘方埋土はいざれもにぶい黄褐色砂質土が小ブロック状に混入する黒褐色粘質土が主体であり、炭化物が粒状に若干認められる。柱抜取り穴はP2が柱痕跡状に、それ以外は柱穴を大きく壊すように認められ、このうちP2が柱のあたり痕跡である。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄褐色砂質土が斑状に混入している。

【カマド】床上面の北辺に布設されている。側壁の一部とカマド前面にある炭化物の範囲を確認したのみである。確認できる燃焼部最大幅は約60cmであり、残存する側壁高は最高18cmである。側壁は内面の赤変が弱く、強く被熱した様子は伺えない。

【周溝】検出した各辺で認められ、規模は幅22~35cm、深さ9~18cmである。壁はおよそ垂直に立ち上がっており、底面はおよそ平坦である。埋土は黒褐色砂質土が主体であり、にぶい黄褐色砂質土が斑状に多量に混入している。

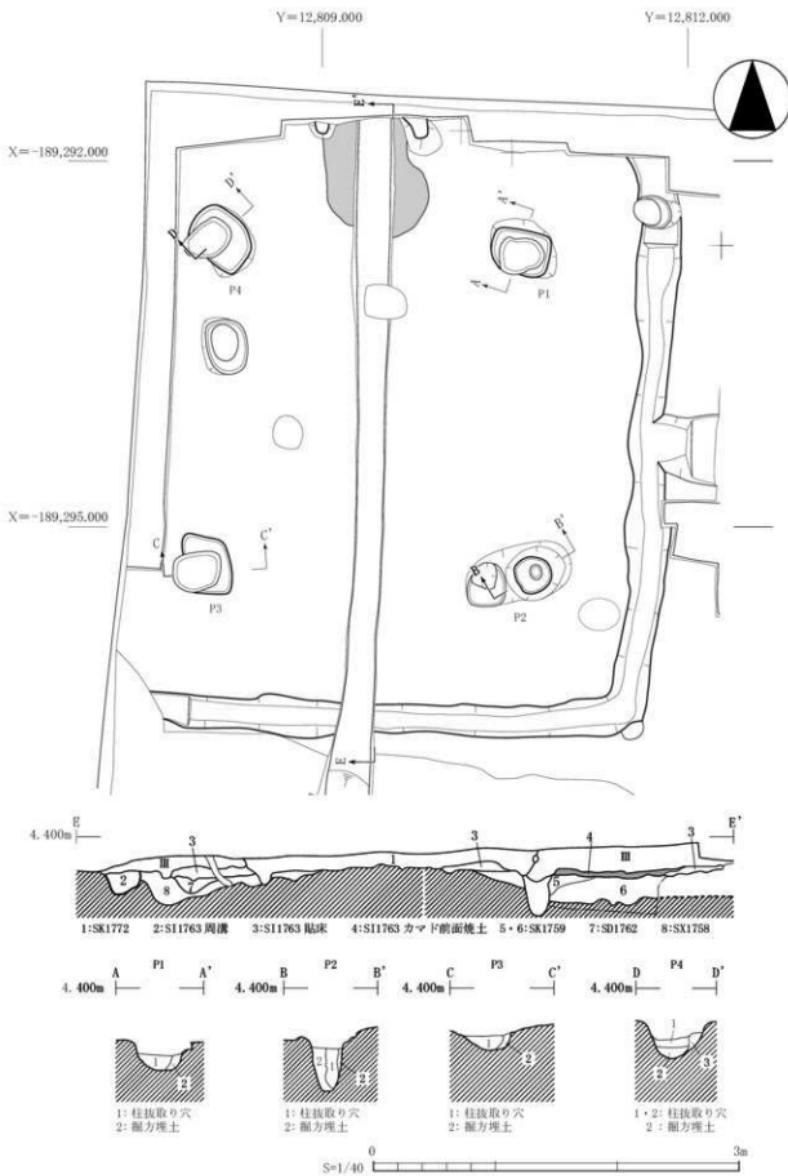
【遺物】貼床埋土から土師器壺B類、壺A・B類、須恵器壺が出土している。

#### S D 1758 溝跡（第9・12図）

【位置・形態】調査区東半部から南半部で発見した、南北方向と東西方向の溝状の落ち込みであり、調査区南東側でおよそ垂直に接続する。

【重複】SB1761、SD1762、SK1759・1760と重複し、それらよりも古い。

【方向・規模】南北方向のものは北で約4度東に偏しており、東西方向のものは西で約4度北に偏している。長さは南北・東西とともに3m以上であり、上幅は南北方向のものが1.5m以上、東西方向のものが1.8m以上である。深さは最深約30cmである。



第11図 SII 1763 壁穴住居跡平面・断面図

【壁・底面】壁には凹凸が多く認められるものの、緩やかに立ち上がりっている。底面にも多くの起伏があるが、北端と西端での極端な比高差は認められない。

【埋土】2層に分けることができる。いずれもにぶい黄褐色砂質土が小ブロック状に多量に混入する褐灰色砂質土が主体であり、上層には一部にぶい黄橙色砂質土が多量に認められる個所もある。

【遺物】遺物は出土していない。

#### S D 1766 溝跡（第13図）

【位置・形態】調査区東端部で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複・変遷】SD 1767と重複し、それよりも古い。およそ同位置で2時期の変遷（A→B期）を確認した。

【方向・規模】B期で測ると方向は北で約2度西に偏しており、長さは2.2m以上である。

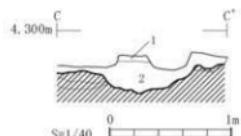
・A期：大部分がB期に破壊されており、残存状況は悪い。

【規模】残存する規模は上幅約40cm、深さ約30cmである。

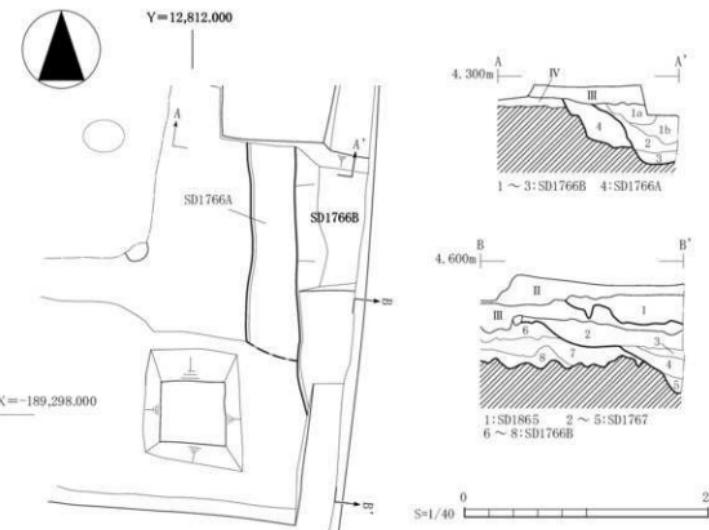
【壁・底面】壁は急角度で立ち上がっており、上方では僅かに段が認められる場所もある。

【埋土】黒褐色粘土、焼土粒が混入する褐色砂質土である。

【遺物】出土していない。



第12図 SD 1758 断面図



第13図 SD 1766 平面・断面図

#### ・B期

【規模】上幅50cm以上、深さ約40cmである。

【壁・底面】下方が急角度で立ち上がるのに対し、上方は緩やかである。底面は凹凸が激しく、一様ではない。

【埋土】3層に大別できる。1層は褐色砂質土が小ブロック状に混入する黒褐色粘土、2層は暗褐色砂質土と焼土が斑状に混入する黒褐色～暗褐色粘土、3層は褐色砂質土がブロック状に混入する黒褐色粘土である。このうち、1・2層には灰白色火山灰が粒状に認められる。

【遺物】土師器壺（BⅤ類）・甕B類・須恵器壺（Ⅱ・Ⅲ類）・瓶・甕・須恵系土器壺が出土している。

#### S K 1759 土壙（第9・14図）

【位置】調査区北部で発見した。

【重複】S B 1761、S K 1760、S X 1758と重複し、S B 1761、S K 1760よりも古く、S D 1758よりも新しい。

【平面形・規模】平面形は方形に近く、規模は南北1.8m以上、東西約2.1m、深さ27cmである。

【壁・底面】壁は南側が緩やかに、西側がやや急角度で立ち上がり、底面は若干起伏があるものの、およそ平らである。

【埋土】3層に細分することができる（第14図2～4層）。いずれも黒褐色砂質土が主体であるが、3層にはにぶい黄褐色砂質土が斑状に、4層には炭化物粒とにぶい黄褐色砂質土が小ブロック状に多く混入している。

【遺物】土師器甕B類・須恵器壺Ⅲ類が出土している。

#### Ⅲ層上面検出遺構

掘立柱建物跡、溝跡、土壙などを発見した。

#### S B 1769 掘立柱建物跡（第15図）

【位置】調査区南東部で発見した。

【桁行・梁行】柱穴2基（P 1・2）より推定したものであり、北西隅柱穴から西側柱列1間分を確認したと考えられる。このため、本調査区内での桁行・梁行は不明である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】2基ともに、柱抜取り穴が認められる。

【重複】S B 1770、S D 1771と重複しているが、新旧関係は明らかでない。

【方向・規模】方向は、北で約19度西に偏しており、柱間は約1.6mである。

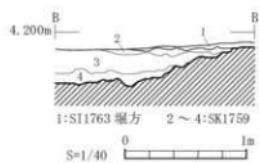
【掘方】平面形はおよそ方形を基調としており、規模はP 1で測ると長辺63cm、短辺33cm、深さ15cmである。埋土はいずれも黒褐色砂質土が主体であるが、P 1では灰黃褐色砂質土が斑状に、P 2では黒色粘土やにぶい黄褐色砂質土、炭化物粒が多量に混入している。

【柱抜取り穴】いずれも柱穴を大きく破壊している。埋土は黒褐色砂質土が主体であり、P 1には焼土塊、P 5には炭化物が多量に混入している。

【遺物】掘方埋土から須恵系土器片が出土している。

#### S B 1770 掘立柱建物跡（第15図）

【位置】調査区北東部で発見した。



第14図 S K 1759 断面図

【桁行・梁行】柱穴 3 基 (P 3・4・5) より推定したものであり、南西隅柱穴から西側柱列 2 間分を確認したと考えられる。このため、本調査区内での桁行・梁行は不明である。

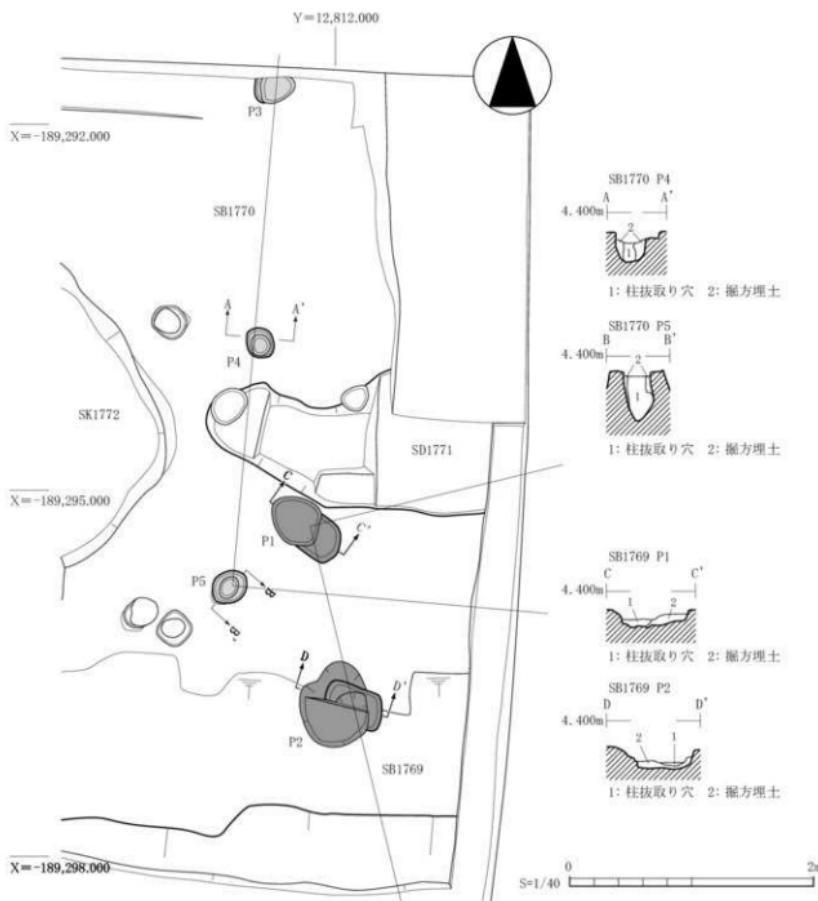
【柱痕跡・抜取り穴の有無】3 基ともに、柱抜取り穴が認められる。

【重複】SB 1769、SD 1771 と重複しているが、新旧関係は明らかでない。

【方向・規模】方向は、北で約 6 度東に偏しており、柱間は南より約 21 m、約 21 m である。

【掘方】平面形は方形または楕円形を基調としており、規模は P 5 で測ると長軸 32cm、短軸 25cm、深さ 23cm である。埋土は、いずれも黒色砂質土が主体であり、灰黄褐色砂質土が斑状に混入している。

【柱抜取り穴の形状・規模】柱抜取り穴は P 3 では柱穴の大部分を破壊しているが、それ以外は柱痕跡



第 15 図 SB 1769・1770 平面・断面図

状に認められる。埋土はいずれも黒褐色砂質土が主体であるが、P 3には灰黄褐色砂質土と炭化物、P 4には暗褐色及び明黄褐色砂質土が混入している。

【遺物】柱抜取り穴より古代の土師器、須恵器の小片が出土している。

#### S E 1764 井戸跡（第16図）

【位置・形態】調査区南東部で発見した、素掘りの井戸跡である（註1）。

【重複】S D 1767と重複し、それよりも古い。上面の大部分がS D 1767により破壊されており、残存状況は悪い。

【平面形・規模】平面形はおよそ円形と推測され、規模は南北14m以上、深さ約13mである。

【壁・底面】壁は下方が急角度で、上方は外に広がりながら緩やかに立ち上がっている。底面は中央付近が丸みを帯びて窪んでおり、VI層下の粗砂層に達している。

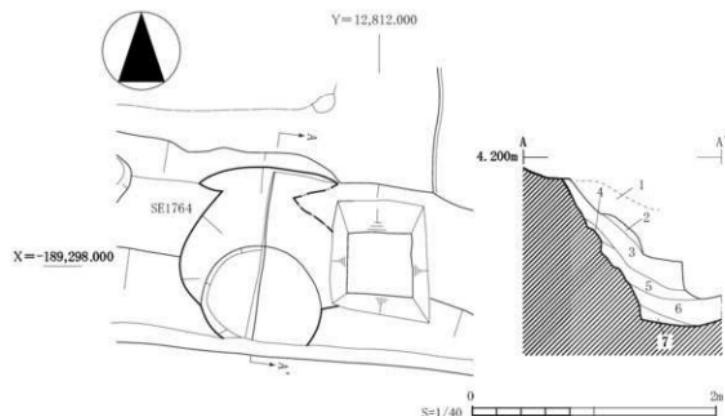
【埋土】7層に分けることができる。1層はにぶい黄褐色砂質土がブロック状に多量に混入する黒色粘土（註2）、2・4層が黒褐色砂質土、3層がにぶい黄褐色～暗褐色砂質土、5層が黒色粘土と黒褐色粘土の互層、6層が黒褐色粘土と灰色砂質土の互層、7層が粗砂混じりのオリーブ褐色粘土である。このうち、1・5・6層には植物遺体が多く混入しているほか、2層には褐色砂質土が小ブロック状に、3層には黒褐色粘土及び褐色砂質土が小ブロック状に認められる。

【遺物】古代の土師器、須恵器の小片が出土している。

#### S E 1765 井戸跡（第17図）

【位置・形態】調査区西端部で発見した、素掘りの井戸跡である。

【重複】S I 1763、S D 1767と重複し、前者よりも新しく、後者よりも古い。



第16図 S E 1764 平面・断面図

註1：S E 1764はⅢ層と接していないため、底面は明瞭ではない。しかし、形態的に近似するS E 1765がⅢ層上面検出であることから、ここでは同じ検出面であると判断した。

註2：註2：1層は埋土掘り下げの際に全削してしまい、断面図を記録することができなかった。

【平面形・規模】平面形は円形と推測され、規模は南北1.3m以上、深さ約0.8m以上である。

【壁・底面】壁は下方がおよそ垂直に、上方は比較的急角度に立ち上がっている。底面は調査区外にあり、明らかでない。

【埋土】黄褐色粘質土と黒褐色粘土がブロック状に混在しており、人为的に埋められたものと考えられる。

【遺物】古代の須恵器小片が出土している。

#### S D 1767 溝跡 (第17図)

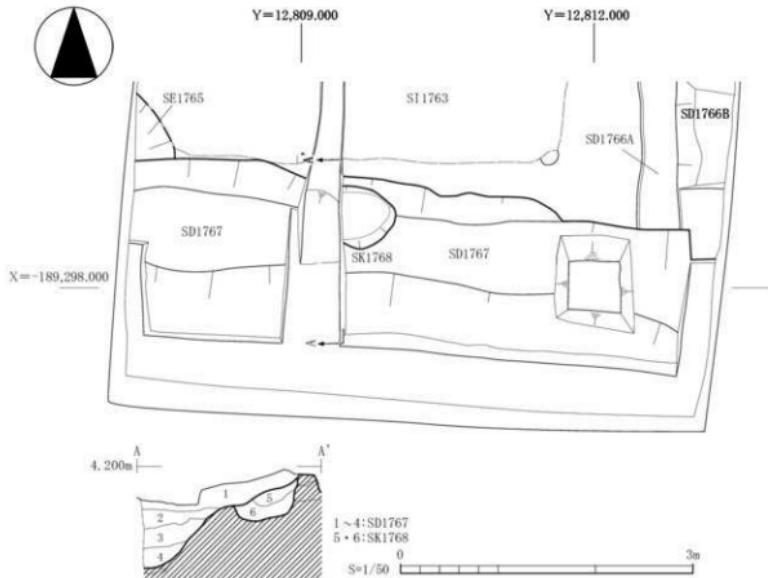
【位置・形態】調査区南端部で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】S E 1764・1765、SD 1766、SK 1767と重複し、それよりも新しい。上端がⅢ層上面検出のSD 1865に破壊されているものの、残存状況はよい。

【方向・規模】方向は西で約2度北に偏している。規模は長さ5.6m以上、幅1.9m以上、深さ1m以上である。

【壁・底面】壁は下方が急角度で立ち上がるのに対して、上方は緩やかである。調査区内では底面の検出には至っていない。

【埋土】中央部で4層に分けることができる。1層は暗オリーブ褐色粘質土、2層は黒褐色粘土が混入する暗褐色砂質土、3層は褐色粘土がブロック状に混入する黒褐色粘土、4層はオリーブ黒色粘土である。



第17図 SD 1767、SK 1768 平面・断面図

【遺物】1層から磁器染付碗（筒型椀）の小片が1点出土している他は、全て古代の土師器、須恵器の小片である。

#### S D 1771 溝跡（第15図）

【位置・形態】調査区東部で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】S B 1769・1770と重複しているが、新旧関係は明らかでない。

【方向・規模】方向は、西で約5度北に偏している。規模は長さ2.3m以上、最大幅約1.2m、深さ約10cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がっており、底面もおよそ平坦である。

【遺物】古代の土師器、須恵器の小片が出土している。

#### S K 1768 土壙（第17図）

【位置】調査区南半で発見した。

【重複】S D 1767と重複し、それよりも古い。

【平面形・規模】東西に長い楕円形であり、規模は長軸76cm、端軸63cm、深さ48cmである。

【壁・底面】壁は起伏も少なく、急角度で立ち上がっている。底面は周開よりも中央付近がやや高くなっている。南に向かって低くなっている。

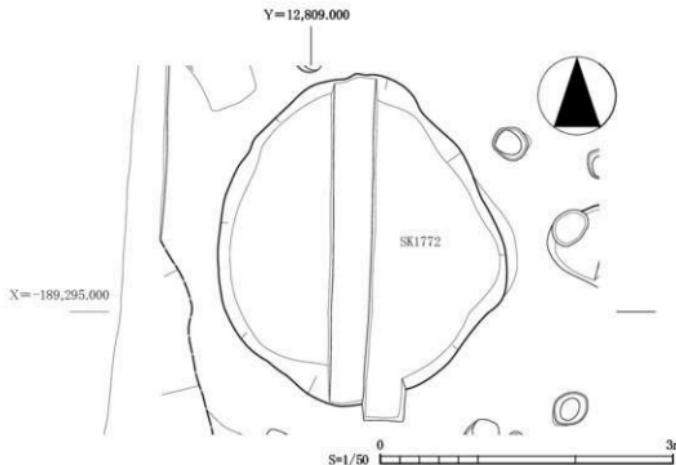
【埋土】2層に分けることができる。上層はオリーブ褐色粘土、下層は灰黄褐色砂質土が主体であり、このうち上層にはオリーブ褐色粘質土が小ブロック状に混入している。

【遺物】出土していない。

#### S K 1772 土壙（第18図）

【位置】調査区西部で発見した。

【重複】他の遺構との重複はない。



第18図 S K 1772 平面図

**【平面形・規模】** 平面形は南北に長い楕円形であり、規模は長径約 2.7 m、短径約 2.4 m、深さ 22cm である。  
**【壁・底面】** 壁は凹凸が少なく、緩やかに立ち上がっている。底面は中央部で僅かに起伏があるほか、壁際でも深く窪む箇所があり一様ではない。

**【埋土】** にぶい褐色砂質土が斑状に混入する黒褐色砂質土が主体であり、炭化物粒及び焼土粒が若干認められる。

**【出土遺物】** 古代の土師器、須恵器の小片が出土している。

## 考察

### (1) 遺構の年代

#### 【VI・VII層】

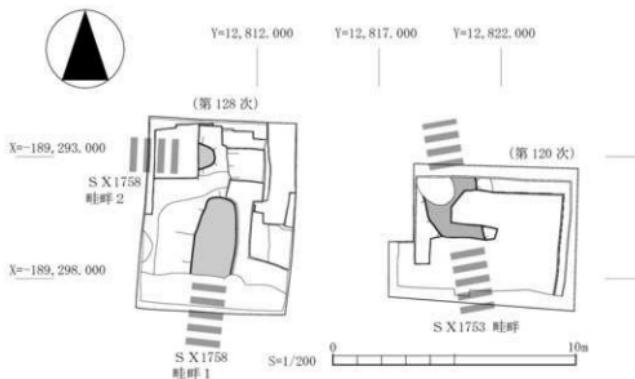
S X 1756 水田跡がある。

S X 1756 は古代の遺構検出面であるIV層より約 60cm 下層、標高値でみると約 3.4 m の高さで発見した水田跡である。黒色粘土が主体の水田耕作土及び畦畔を検出しておらず、これと近似する水田層は本遺跡多賀前・掃下し・山王四区をはじめ、西側に隣接する新田遺跡で確認されている。いずれも古代の遺構検出面である自然堆積層に厚く覆われており、標高 2.2 ~ 4.8 m の高さで検出されている。年代は出土した遺物から概ね古墳時代前期頃と考えられている。

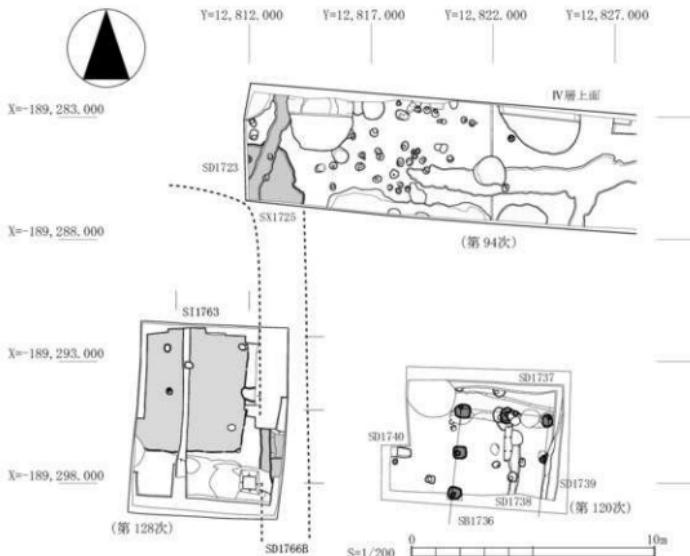
今回発見した S X 1756 水田跡からは、非クロロ調整の土師器壺が出土している。底部の小片ではあるが、体部外側がハケメ後ヘラミガキ、内面はハケメ後ヘラナデ調整が施されており、古墳時代前期の壺の特徴と近似している。このことは、これまで本遺跡や新田遺跡で確認した水田層の年代観とも矛盾しない。

なお、S X 1756 については、放射性炭素年代測定法による年代測定を実施しており、2世紀中頃～3世紀中頃の年代が示されている。

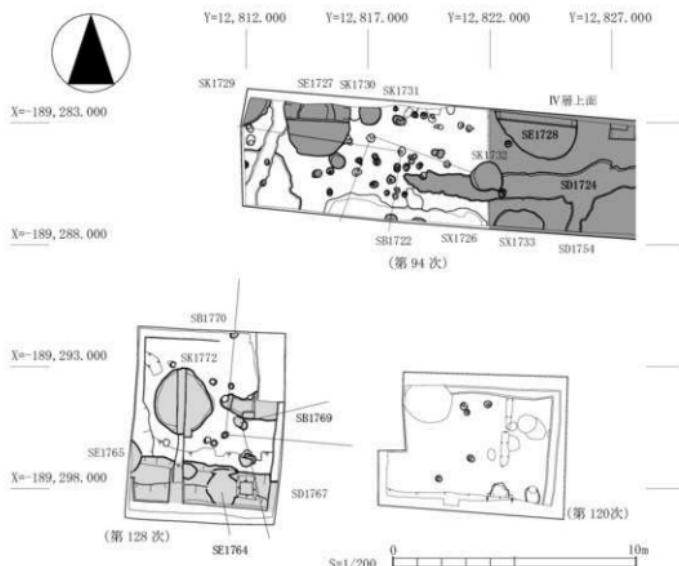
さて、本調査区の東側隣接地で実施した第 120 次調査においても古墳時代前期の水田跡を発見しており、南北方向の S X 1753 畦畔を確認している。上幅は 2.2 m に達し、今回発見した S X 1758 畦畔 1 と同様に



第 19 図 周辺調査区合成（古墳時代前期）



第20図 周辺調査区合成（古代）



第21図 周辺調査区合成（中世）

大規模なものである。方向は北で約8度西に傾いており、北で約5度東に偏するS X 1758 畦畔1とはやや方向が異なるものの、層位的にも一連の水田跡を構成するものであることは明らかである。近年、本市においては上端幅50cm前後的小畠によって区画された古墳時代前期の小区画水田が多く確認されているが、本地区にみられるような大規模な畦畔が近接して確認された類例は少なく、古墳時代前期の水田区画のあり方を考える上で興味深い成果である。

#### 【IV層上面】

S B 1761 挖立柱建物跡、S I 1763 壁穴住居跡、S D 1758・1766 溝跡、S K 1759 土壌等がある。

S I 1763では、床構築土から土師器坏（B類）・壺（A・B類）が出土している。土師器B類が認められることから8世紀後葉以降の年代が推測されるが、土師器壺のなかでA類の占める割合が2割を超えてることから、9世紀前葉頃を下限と捉えておきたい。

S D 1766 Bでは埋土に灰白色火山灰が混入していることや、少量ではあるものの須恵系土器が出土していることから、10世紀前葉以降のものと考えられる。

一方、S B 1761、S D 1758、S K 1759は、新旧関係でS I 1763よりも古いことから、下限がそれ以前であることが明らかである。このうちS K 1759は出土遺物に土師器壺B類、須恵器坏III類が認められることから8世紀後葉が上限、新旧関係でS K 1759よりも新しいS B 1761はそれ以降である。

なお、今回実施した第128次調査区と隣接する第94・120次調査の成果と合わせると、位置的に第94次S X 1725と第128次S D 1766が一連の溝跡であると推測される。また、第120次S B 1736は北で5度、第128次S I 1763は北で3度東に傾いており、近似した方向を示していることから、同時期のものである可能性もある。

#### 【III層上面】

S B 1769・1770 挖立柱建物跡、S E 1674・1765 井戸跡、S D 1767・1771 溝跡、S K 1722 土壌等がある。出土遺物は古代の土器片のみであり、年代を決定する遺物は出土していない。

一方、これら遺構の検出面であるIII層については、確認した標高値や土色等を隣接地で実施した第94・120次調査の成果と比較すると、第94次調査III層及び第120次調査II層に対応すると考えられる（註3）。いずれも中世以降に堆積したものと捉えており、第108・127次調査（註4）でも、この層に対応すると考えられる黒褐色土層の上面で近世の掘立柱建物跡や土壌も確認されている。従って、III層上面検出遺構については、中世～近世頃のものと考えておきたい。

表1 周辺地区との層序対応表

年代	第94次調査	第120次調査	第128次調査
10世紀前葉以降の 古代～中世	Ⅲ層	Ⅱ層	Ⅲ層
	Ⅳ層	Ⅲ層	
古代	V層	IV層	IV層
無遺物層	VI・VII層	V～IX層	V層
古墳時代前期	VIII層	X層	VI・VII層

#### 【参考文献】

多賀城市教育委員会「多賀城市内の遺跡2・平成24年度ほか発掘調査報告書」・多賀城市文化財調査報告書第111集 2013

註3：第94次と第120次調査では、古代の遺構検出面の上面で中世以降の遺構検出面を2枚確認している。しかし、今回の調査では、中世以降の検出面はIII層1面を確認したのみである。

註4：東日本大震災で被災した住宅再建に伴い実施した発掘調査であり、いずれも第94次調査区の北側隣接地に位置している。



S X 1756 畦畔検出状況（南より）



S X 1756 畦畔の高まり（南東より）

写真図版 1



IV層上面全景（南より）



SD 1767 全景（西より）

写真図版2



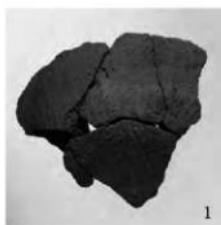
S D 1767 ほか断面（東より）



S E 1764 断面（西より）



S E 1765 断面（東より）



1



2

- 1 土師器壺 第8図 R1  
2 土師器壺（体部外面墨書「十」）  
R3

写真図版3

# 附章1 山王遺跡第128次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

## 1 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れると微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネを中心とするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山、1984）。

ここでは、山王遺跡第128次調査における稻作の可能性を検討する目的で、プラント・オパール分析を実施した。

## 2 試料

分析試料は、S X 1756 区画①水田層（VI層）、水田直上層（V2層）、水田直下層（VII層）、S X 1756 区画②水田層（VI層）、水田直上層（V2層）、水田直下層（VII層）の計6点である。いずれも調査担当者によって採取され、当社に送付されたものである。

## 3 分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を  $105^{\circ}\text{C}$  で 24 時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約 1g に直径約  $40\ \mu\text{m}$  のガラスピーブを約 0.02g 添加（電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法 ( $550^{\circ}\text{C}$ ・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による  $20\ \mu\text{m}$  以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が 500 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料 1g 中のプラント・オパール個数（試料 1gあたりのガラスピーブ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは 1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}\text{ g}$ ）を乗じて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。

各分類群の換算係数は、イネ（赤米）は 2.94（種実重は 1.03）、ヒエ属は 8.40、ヨシ属（ヨシ）は 6.31、

ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山、2000）。

#### 4 結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。また、プラント・オパールの他に海綿骨針が認められた。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、図1に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

イネは、S X 1756区画①の水田層（VI層）、水田直下層（VII層）、X X 1756区画②の水田層（VI層）、水田直下層（VII層）で検出されており、区画①の水田直下層（VII層）では比較的高い密度である。キビ族型は、区画①の各層、区画②の水田層（VI層）、水田直下層（VII層）で検出されているが、いずれもやや低い密度である。ヨシ属は、区画①の各層、区画②の水田層（VI層）、水田直下層（VII層）で検出されているが、いずれもやや低い密度である。ススキ属型、タケ亜科のメダケ節型、ネザサ節型およびチマキザサ節型はすべての試料で検出されている。ススキ属型はS X 1756区画②の水田層（VI層）で、またチマキザサ節型はS X 1756区画②の水田層（VI層）と水田直上層（V 2層）でやや高い密度である。ミヤコザサ節型はS X 1756区画①の水田直下層（VII層）とS X 1756区画②の水田層（VI層）で検出されているが、いずれも低い密度である。海綿骨針は、S X 1756区画①の水田直下層（VII層）と水田直上層（V 2層）、S X 1756区画②の水田層（VI層）と水田直下層（VII層）で検出されているが、低い密度である。

#### 5 山王遺跡第128次調査における稻作と推定される周辺植生・環境

稻作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、イネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。ただし、仙台平野（仙台市域、多賀城市域）では、これまでの調査で密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満でも水田遺構が検出された例が多く報告されていることから、ここでは3,000個/gを目安とする。

本調査地では、S X 1756区画①とS X 1756区画②において水田層（VI層）、水田直上層（V 2層）、水田直下層（VII層）を対象に分析を行った。その結果、区画①と区画②の水田層（VI層）及び区画①の水田直下層（VII層）でイネのプラント・オパールが検出された。プラント・オパール密度は、区画①では直下層（VII層）が3,600個/gと高い密度であり、水田耕作層であった可能性が考えられる。一方、水田層（VI層）では区画①で1,200個/g、区画②で1,800個/g、であり、稻作跡の可能性の目安とされる3,000個/gには達していない。ただし、両水田の直上層（V 2層）からはイネが検出されておらず、上層からのプラント・オパールの混入は考えにくい。こうしたことから、両水田層（VI層）において稻作が行われていた可能性が考えられる。

イネ以外の分類群では、区画②の水田層（VI層）と区画①の水田直下層（VII層）でキビ族型のプラント・オパールが検出されている。種までの同定はできないが、水田耕作層とみられることから、イヌビエが水田雜草として生育していた可能性が考えられる。その他の分類群については、主な分類群の推定生産量（図1の右側）をみるといずれも低い値である。したがって、調査地の周辺の湿ったところにはヨシ属（区画

②の水田直上層（V2層）を除く）が、比較的乾燥したところにはタケ・ササ類（メダケ節型、チマキザサ節、ミヤコザサ節）やススキ属などが生育していたと推定される。

## 6 まとめ

山王遺跡第128次調査においてプラント・オパール分析を行い、稻作の可能性について検討を行った。その結果、S X 1756区画①・S X 1756区画②の水田層及び区画①の水田直下層において稻作が行われていた可能性が認められた。なお、両層ではイヌビエが水田雜草として生育していたと推定された。また、区画②の水田層と水田直上層、区画①の各層では、周辺の湿ったところにヨシ属が、区画①・②の各層では周辺の比較的乾いたところにはタケ・ササ類やススキ属などが生育していたと推定された。

## 文献

- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体、富士竹類植物園報告、31、p.70-83.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）、考古学と植物学、同成社、p.189-213.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—、考古学と自然科学、20、p.81-92.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（I）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9、p.15-29.
- 藤原宏志（1998）稻作の起源を探る、岩波新書、

表1 多賀城市山王遺跡第128次調査のプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		SX1756区画①			SX1756区画②		
分類群(和名・学名)＼層位		V2層	VI層	VII層	V2層	VI層	VII層
イネ科	Gramineae (Grasses)						
イネ	<i>Oryza sativa</i>		12	36		18	12
キビ族型	Paniceae type				12	12	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	12	12	6	12	6	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	12	18	12	6	36	18
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)						
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	6	6	6	6	12	24
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	6	6	24	18	24	12
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	6	18	18	30	66	24
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>			6	6		
その他	Others			6	6		
未分類等	Unknown	54	54	97	72	114	73
(海綿骨針)	Sponge	6		6		6	6
プラント・オパール総数	Total	96	126	223	132	306	169

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.35	1.07		0.53	0.36
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.76	0.76	0.38	0.76	0.38
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.15	0.22	0.15	0.07	0.45
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.07	0.07	0.07	0.07	0.14
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.03	0.03	0.12	0.09	0.12
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.05	0.13	0.14	0.23	0.50
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>			0.02	0.02	

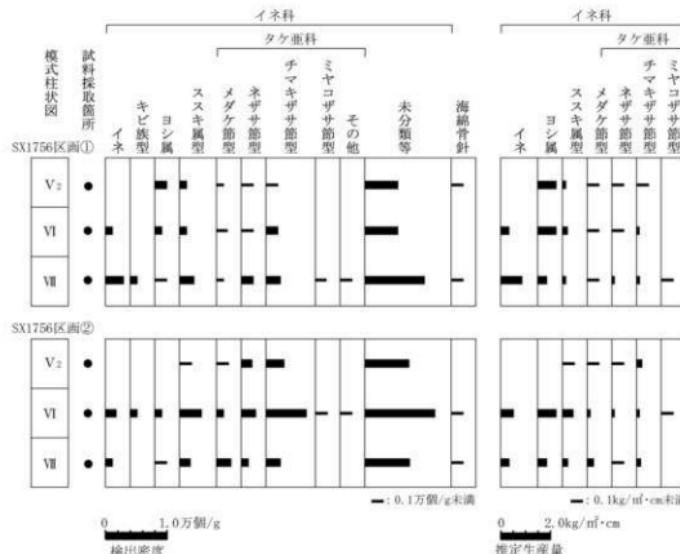
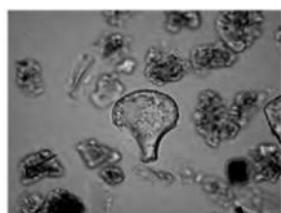
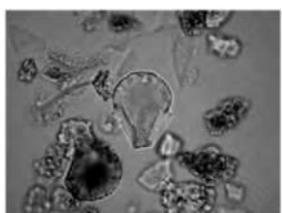


図1 山王遺跡第128調査SX1756水田跡のプラント・オパール分析結果

山王遺跡第128次調査のプラント・オパール



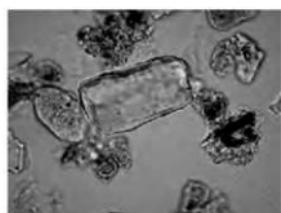
イネ (SX1756区画② VI層)



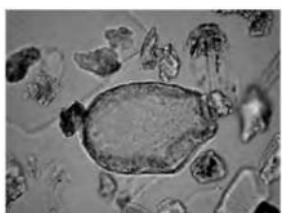
イネ (SX1756区画② VII層)



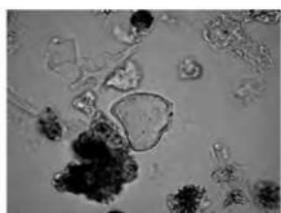
イネ (SX1756区画① VII層)



キビ族型 (SX1756区画② VI層)



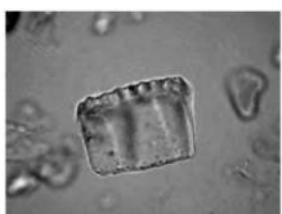
ヨシ属 (SX1756区画① VI層)



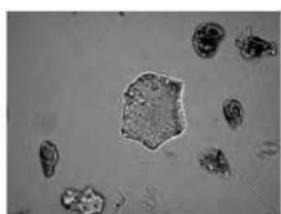
ススキ属型 (SX1756区画② VI層)



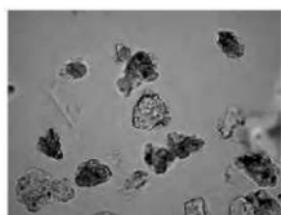
メダケ節型 (SX1756区画② VII層)



ネササ節型 (SX1756区画② VI層)



チマキササ節型 (SX1756区画② VI層)



ミヤコササ節型 (SX1756区画① VII層)



海綿骨針 (SX1756区画① VII層)



未分類 (SX1756区画② VI層)

— 50  $\mu$ m

## 附章2 山王遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

(株) 加速器分析研究所

### 1 測定対象試料

山王遺跡は、宮城県多賀城市山王字中山王に所在し、河川の沖積作用により形成された自然堤防上に立地する。測定対象試料は、水田畦畔の土中から出土した炭化物2点である（表1）。試料が出土した水田畦畔と考えられる遺構は、奈良・平安時代の遺構検出面に覆われている。時期は古墳時代前期と推定されているが、出土遺物から年代を決定することが難しい。

### 2 測定の意義

試料が出土した遺構は古墳時代前期の水田畦畔と考えられているが、年代決定の根拠となる出土遺物がないため、年代測定により遺構の年代を推定する。

### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA : Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常  $1\text{mol}/\ell$  (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 4 測定方法

加速器をベースとした <sup>14</sup>C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、<sup>14</sup>C の計数、<sup>13</sup>C 濃度 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C 濃度 (<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の <sup>13</sup>C 濃度 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である（表1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 <sup>14</sup>C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として算出される年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使

用する (Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}\text{C}$  年代は  $\delta^{13}\text{C}$  によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。 $^{14}\text{C}$  年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$  年代の誤差 ( $\pm 1 \sigma$ ) は、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の  $^{14}\text{C}$  濃度の割合である。pMC が小さい ( $^{14}\text{C}$  が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 ( $^{14}\text{C}$  の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の  $^{14}\text{C}$  濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の  $^{14}\text{C}$  濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に対応する較正曲線上の歴年代範囲であり、1 標準偏差 ( $1 \sigma = 68.2\%$ ) あるいは 2 標準偏差 ( $2 \sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が  $^{14}\text{C}$  年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$  補正を行い、下 1 桁を丸めない  $^{14}\text{C}$  年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal09 データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。历年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

## 6 測定結果

測定結果を表 1、2 に示す。

試料 2 点の  $^{14}\text{C}$  年代は、誤差 ( $\pm 1 \sigma$ ) で一致する。

历年較正年代 ( $1 \sigma$ ) は、いずれも弥生時代後期頃に相当する (小林 2009)。

なお、これらの試料 2 点が含まれる 1 ~ 3 世紀頃の历年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal09 に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある (尾崎 2009、坂本 2010 など)。その日本版較正曲線を用いてこれらの試料の測定結果を历年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率はいずれも 60% を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

## 文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散、西本豊弘編、新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代、雄山閣、55-82

尾崎大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素 14 年代からみた弥生時代の実年代、設楽博己、藤尾慎一郎、松木武彦編、新弥生時代の考古学 1 弥生文化の輪郭、同成社、225-235

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 51(4), 1111-1150

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木－弥生から古墳へ－、第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集、(株)加速器分析研究所、85-90

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data. Radiocarbon 19 (3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$  补正值）

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法 (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	$\delta^{13}\text{C}$ 补正あり	
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)	
IAAA-130686	SX1756 田畠	SX1756A 期田畠 (1a)	炭化物	AAA	-24.86 ± 0.24	1,810 ± 20	79.83 ± 0.21
IAAA-130687	VII層	VII層	炭化物	AaA	-29.28 ± 0.52	1,830 ± 20	79.60 ± 0.23

[#5898]

表2 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、曆年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代）

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 补正なし		曆年較正用(yrBP)	$1\sigma$ 曆年代範囲	$2\sigma$ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-130686	1,810 ± 20	79.85 ± 0.20	1,809 ± 20	140calAD - 153calAD (10.4%) 169calAD - 195calAD (22.8%) 210calAD - 241calAD (35.0%)	131calAD - 253calAD (95.4%)
IAAA-130687	1,900 ± 20	78.90 ± 0.21	1,833 ± 23	135calAD - 213calAD (68.2%)	126calAD - 242calAD (95.4%)

[参考値]

## V 山王遺跡第129次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、個人住宅建築に伴う本発掘調査である。平成25年2月、地権者より当該区における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、住宅部分の基礎工事として直径60cm、深さ6.5mの柱状改良を44箇所に施すこととなっていた。本調査区の北側隣接地の調査成果から、地表面から遺構検出面までの深さは1.1～1.5mであることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、計画以外の工法では建物を

支えるための十分な強度を得られないとのことから記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、4月24日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

調査は5月8日より開始し、重機を使用して現代の盛土及び耕作土層（I層）を除去し、II層を検出した。この層を掘り込む遺構がないことを確認した上でII層を除去し、III層上面にて遺構を確認した。9日から精査を開始し、21日にIII層上面遺構の検出状況の写真撮影を行った。その後、遺構実測図の作成と掘り下げを進め、6月8日にIII層上面検出遺構の完掘状況の写真撮影を行った。同日III層の掘り下げを開始し、調査区東側のIV層上面で埋土に灰白色火山灰を含む遺構を検出した。11日にIV層上面遺構の検出状況の写真撮影を行うと同時に、遺構がなかった調査区西側でIV層とV層を掘り下げ、VI層を掘り下げている途中でSX1775水田跡の畔を検出した。その後、遺構の精査を進め、14日に調査区北壁の写真撮影と断面図を作成し、15日に埋め戻して全ての調査を終了した。

### 2 調査成果

#### （1）層序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである（第2図）。

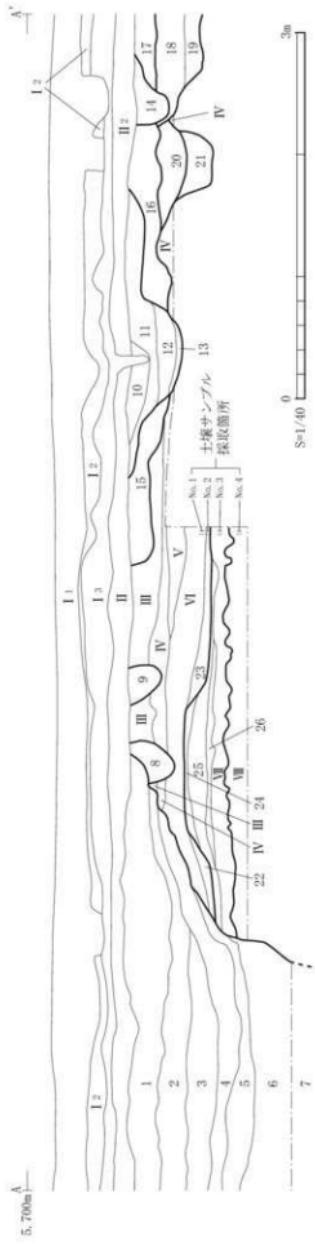
I 1層：現代の盛土層で、厚さは25～40cmである。

I 2層：黄灰色土の現代の耕作土層で、厚さは3～15cmである。

I 3層：オリーブ褐色土の現代の堆積層で、厚さは5～27cmである。



第1図 調査区位置図



1 ~ 7: SX1784 井戸跡 8: 仁野 9: SD1783 清野 10 ~ 13: SD1781 岩脉 14: SD1782 清野 15 \* 16 \* 17: SD1778 清野 18 \* 19: SD1777 清野 20: SD1776 清野 b 断面  
21: SD1776 清野 a 断面 22, 23: SX1775 上部墨土 24 ~ 26: SX1775 水田耕起跡

第2図 調査区北壁断面図

- II層：褐色土をブロック状に多く含む黒褐色土層で、厚さは7～22cmである。
- III層：褐色土をブロック状にやや含む暗褐色土層で、厚さは20～25cmである。中世の遺構検出面である。
- IV層：褐色の砂質土層で、厚さは5～15cmである。古代の遺構検出面である。
- V層：褐色の粗砂層で、厚さは15cm程である。調査区中央を中心に部分的に堆積する。
- VI層：灰色粘質土をブロック状に含むにぶい黄褐色土で、厚さは15～25cmである。
- VII層：層の下部にはVII層由来の土がブロック状に混入する黄灰色粘土層で、厚さは8～20cmである。  
古墳時代前期の水田跡（S X 1775）の耕作土である。
- VIII層：にぶい黄褐色土層で、厚さは25cm以上である。

## （2）発見遺構と遺物

### VII層発見遺構

#### S X 1775 水田跡（第3図）

【水田域】深掘りしたVII層全域で発見し、水田層は調査区外に延びている。

【検出状況】畦畔はVI層を掘り込んでいく過程で検出した。

【区画と耕作土】畦畔を境に西側を区画①、東側を区画②とした。区画①の規模は東西1.1m以上、南北4.0m以上である。区画②の規模は東西1.1m以上、南北3.3m以上である。耕作土の厚さは8～20cmであり、底面には耕作時の痕跡と考えられる土層の乱れが顕著に確認できる。

なお、VII層のイネのプラントオパール密度は2,400個／g（附章参照）である。

【畦畔の規模と方向】耕作土上面に灰黄褐色土と褐灰色粘質土と灰色土を積み上げて構築されている、南北方向に延びる畦畔を発見した。規模は上幅1.0m、下幅23m、残存する高さは耕作土上面から約22cmであり、方向は北で約3度東に偏している。

【遺物】出土していない。

### VII層上面検出遺構

#### S D 1776溝跡（第2・3・4図）

【位置】調査区東側で発見した南北方向の溝跡であり、北側と南側は調査区外に延びる。

【重複】SD 1777と重複し、それよりも古い。ほぼ同位置で2時期の変遷（A期→B期）を確認した。以下、古い順に報告する。

#### ・A期

【方向・規模】方向は北で約1度東に偏している。規模は長さ6m以上、上幅48～82cm、下幅28～57cm、深さ43cmである。

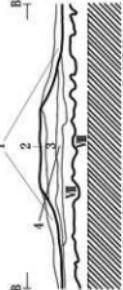
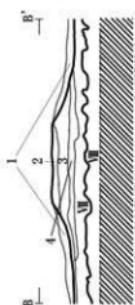
1:50

第3図 SX 1775 水田路とIV層上面換出地盤

SX1775 断面

X=180,188,000

4,500m—  
B

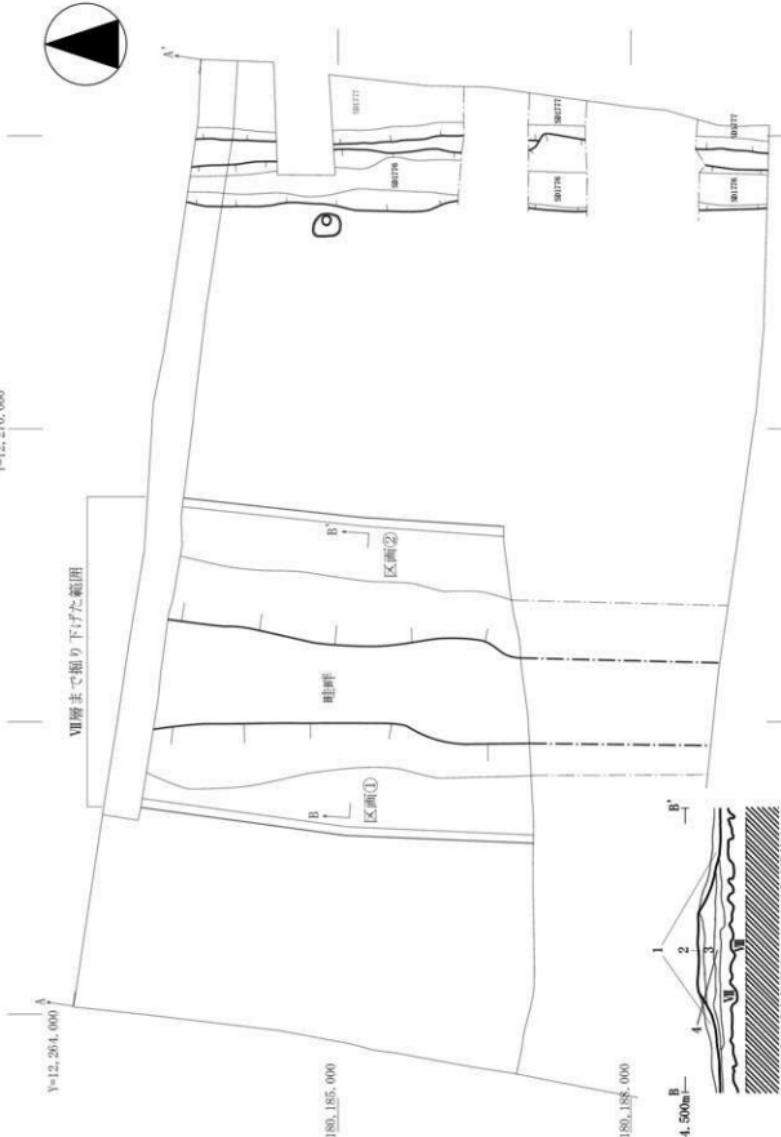


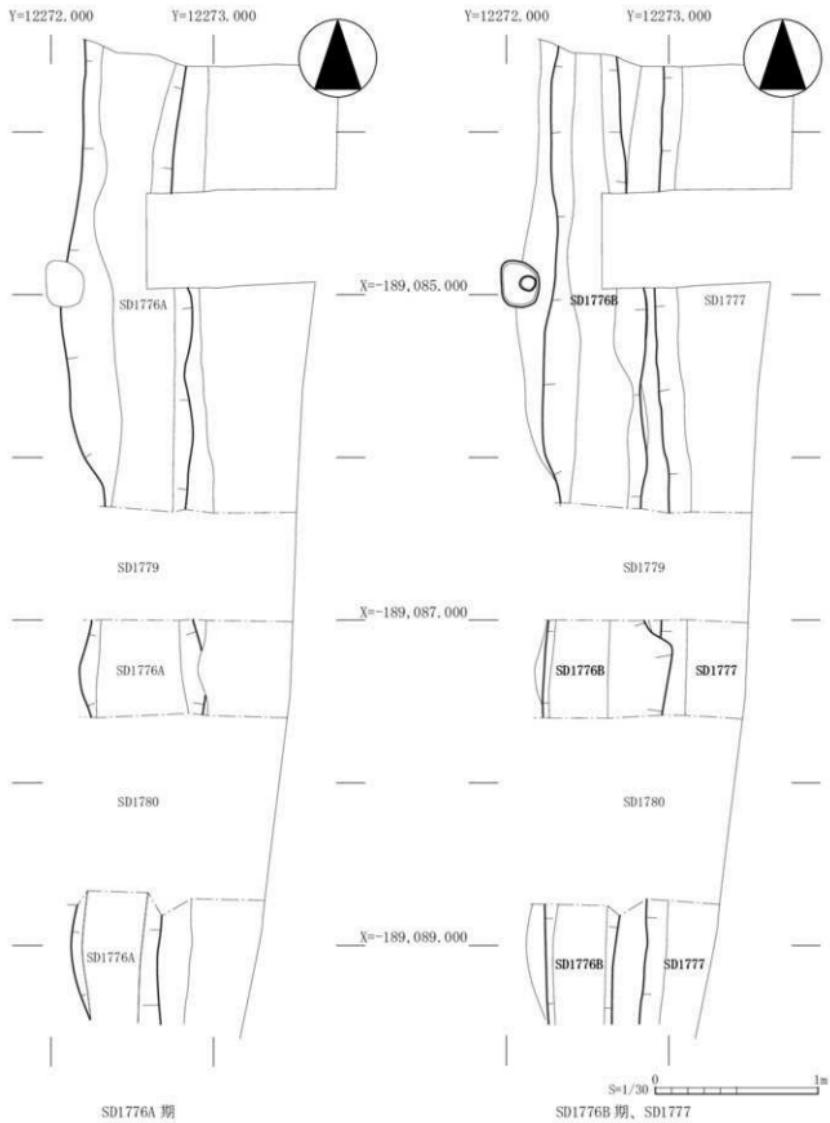
Y=12,270,000

Ⅷ層まで掘り下した範囲

Y=12,294,000

64





第4図 IV層上面検出遺構平面図

【埋土】IV層の褐色砂質土をブロック状に含む黒褐色土である。

【壁・底面】壁はほぼ垂直に立ち上がっており、底面は平坦で北から南に向けて緩やかに傾斜している。

【遺物】出土していない。

#### ・B期

【方向・規模】方向は北で約1度東に偏している。規模は長さ6m以上、上幅44~78cm、下幅18~35cm、深さ25cmである。

【埋土】IV層の黄褐色粘質土の大ブロックを主体とし、灰白色火山灰と灰色粘質土を大ブロック状に含む土であり、人為的な埋め土と考えられる。

【壁・底面】壁は緩やかに外傾して立ち上がっており、底面は平坦で北から南に向けて緩やかに傾斜している。

【遺物】出土していない。

#### S D 1777溝跡（第2・3・4図）

【位置】調査区東端で発見した南北方向の溝跡であり、南北と東側は調査区外に延びる。

【重複】S D 1776と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約2度東に傾く。規模は長さ5.9m以上、上幅は80cm以上、下幅68cm以上、深さ40cmである。

【埋土】2層に分けることができる（第2図18・19層）。18層はIV層の褐色砂質土を小ブロック状に多く含むオリーブ黒色土、19層はIV層の褐色砂質土を大ブロック状に多量に含むにぶい黄橙色土である。

【壁・底面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。

【遺物】出土していない。

#### III層上面発見遺構

##### S D 1778溝跡（第5・6図）

【位置】調査区北東側で発見した東西方向の溝跡であり、東側は調査区外に延びる。

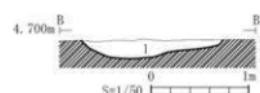
【重複】S D 1781と重複し、それよりも古い。

【方向・規模】方向は東で約14度南に偏している。規模は長さ4.9m以上、上幅は0.9~1.4m、下幅は0.8~1.1m、深さは17cmである。

【埋土】炭化物を若干含む黒褐色土である。

【壁・底面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面にはやや凹凸があり、西から東に向けて緩やかに傾斜する。

【遺物】第9図-1・3に示した無釉陶器壺のほか、土師器甕、須恵器壺・甕、無釉陶器壺の破片が出土している。



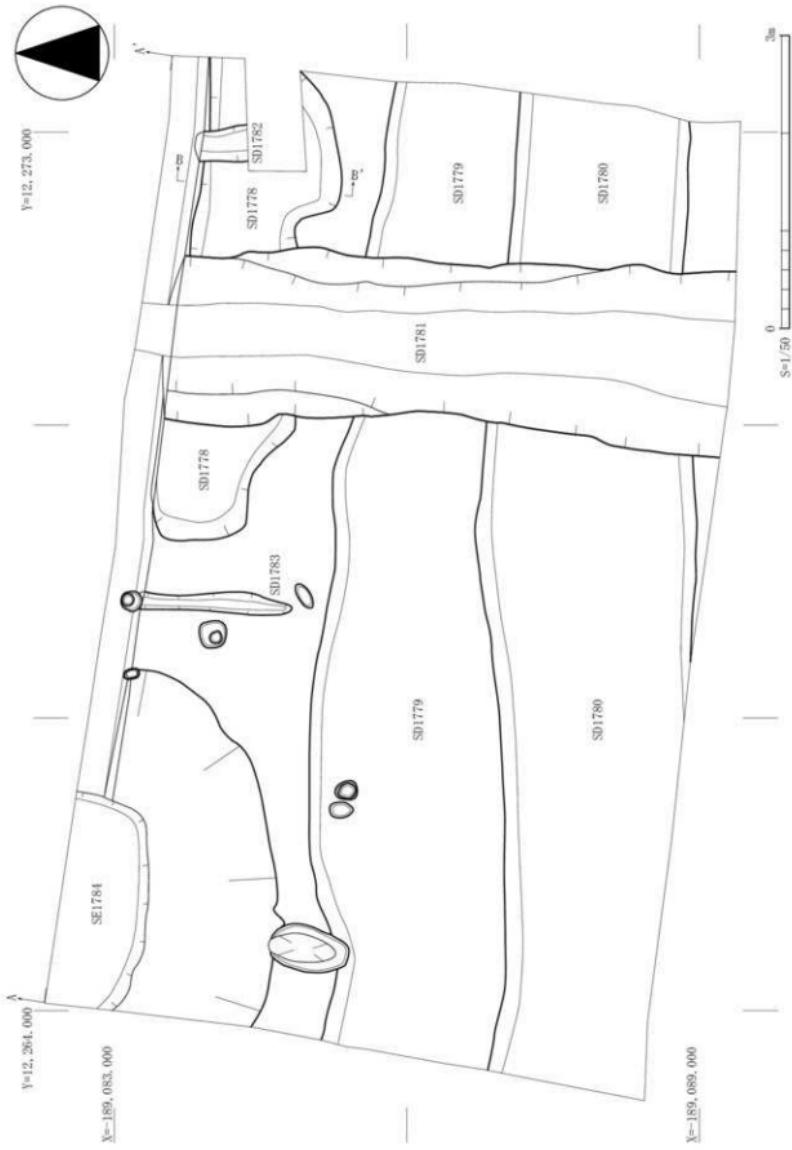
第5図 S D 1778断面図

##### S D 1779溝跡（第7・8図）

【位置】調査区中央で発見した東西方向の溝跡であり、東と西は調査区外に延びる。

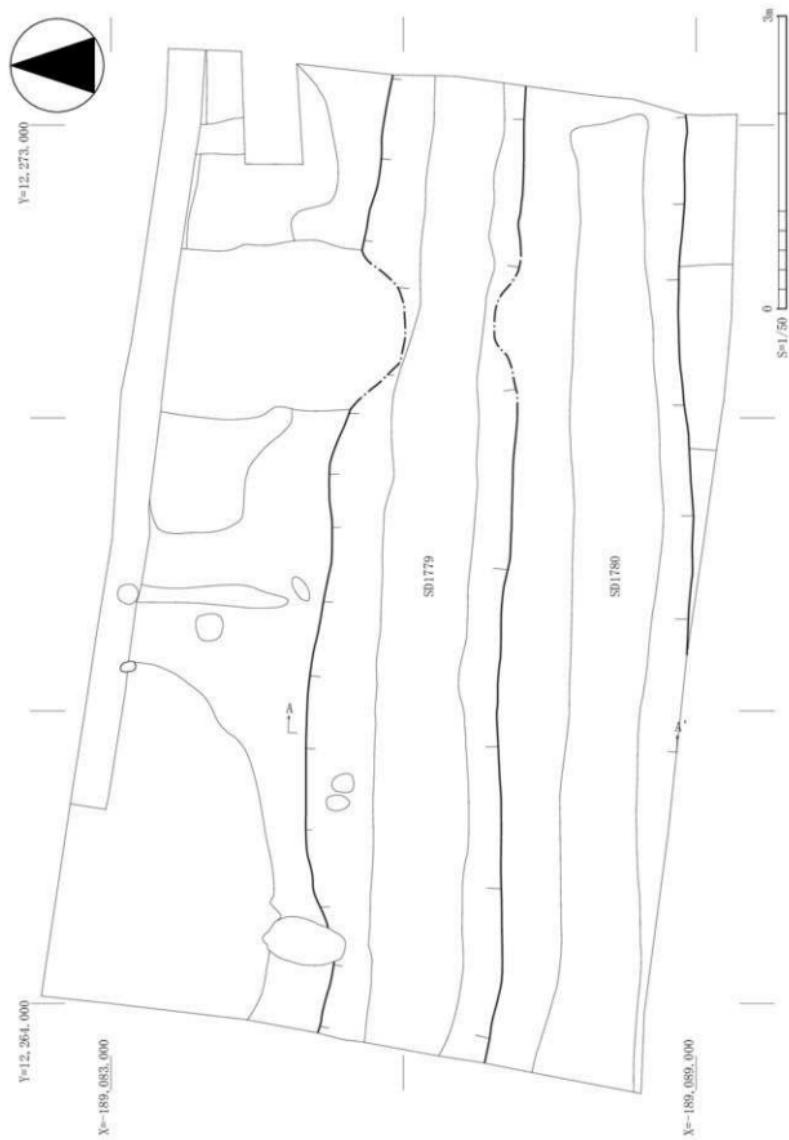
【重複】S D 1780・1781と重複し、それらよりも古い。

【方向・規模】方向は、ゆるやかに蛇行しながら東で約4度南に偏している。規模は長さ10m以上、上幅は1.9m、下幅は0.9~1.0m、深さ44cmである。



第6図 III層上面突出連構平面図

第7図 SD 1779・1780 連構平面図



【埋土】4層に分けることができる（第8図1～4層）。1層は白色土と炭化物を含む黒褐色土層、2層は炭化物を多く含む黒褐色土層、3層は黒褐色の壁崩落土、4層はVI層のぶい黄褐色土と黒褐色粘質土をブロック状に含む淡黄色粘質土である。

【壁・底面】壁は外反しながら立ち上がる。底面は平坦であり、比高はない。

【遺物】1層から第9図-10に示した咸平元宝のほか、刀子、土師器壺・甕、須恵器壺・甕・瓶、須恵系土器壺、鉄鏃、無軸陶器甕の破片が、2層から須恵器壺、須恵系土器壺、無軸陶器の甕・壺の破片が出土している。

#### S D 1780溝跡（第7・8図）

【位置】調査区南側で発見した東西方向の溝跡であり、東と西は調査区外に延びる。

【重複】S D 1779・1781と重複し、S D 1779よりも新しく、S D 1781よりも古い。

【方向・規模】方向は、ゆるやかに蛇行し

ながら東で約1度南に偏している。規模は長さ10.1m以上、上幅1.7～2.3m、下幅70～90cm、深さ74cmである。

【埋土】5層に分けることができる（第8図5～9）。5層はVI層の黄褐色土をブロック状に多く含む黒褐色土層、6層はS D 1779埋土の壁崩落土、7層はVI層ブロックを主体とする黄褐色土層、8層はVI層の黄褐色土ブロックと黒褐色粘質土ブロックで構成されている層、9層は黒色の植物遺存体層である。9層は溝機能時の沈殿物層、5から8層は人為的な埋め土と考えられる（註1）。

【壁・底面】壁は底面からおよそ42cmを弧の頂点としてきつく外反しながら立ち上がる。底面に比高はなく、調査区東端では底面が隅丸形状に閉塞している（註2）。

【遺物】5層から土師器壺・甕、須恵器甕、無軸陶器甕の破片が、7層から土師器甕、須恵系土器壺、砥石、無軸陶器甕の破片が、9層から第9図-2に示した無軸陶器甕のほか、須恵器壺の破片が出土している。

#### S D 1781溝跡（第2・6図）

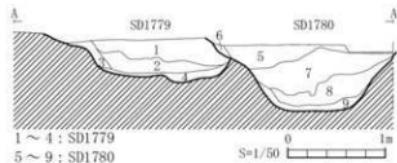
【位置】調査区ほぼ中央で発見した南北方向の溝跡であり、北と南は調査区外に延びる。

【重複】S D 1778・1779・1780と重複し、それらよりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約3度東に偏する。規模は長さ6.1m以上、上幅1.5～1.7m、下幅0.5～1.1m、深さ40cmである。

【埋土】4層に分けることができる（第2図10～13層）。10層は灰色土層、11層はオリーブ黒色土層、12層は白色粒と炭化物を若干含む暗オリーブ灰色土層、13層は粗砂を多く含む黄褐色土である。

【壁・底面】壁は強く外反しながら立ち上がり、部分的には屈曲している。底面は平坦であり、南から北に向けて緩やかに傾斜する。



第8図 SD 1779・1780断面図

註1：北壁の渋曲と7層の立ち上がりが対応することから、複数の時期に分かれる溝跡の可能性も考えられるが、埋土に際立った差異がなかったことから、ここでは1時期と判断している。

註2：この東側に第51次調査で発見されたような土橋が存在している可能性が想定できるが、調査区外のため詳細は不明である。

**【遺物】** 10層から第9図-8に示した青磁碗の破片のほか土師器壺・甕、須恵器壺、無釉陶器壺が、11層から土師器壺、平瓦の破片が、12層から土師器壺、須恵器壺の破片が、13層から土師器壺、無釉陶器壺の破片が出土している。

#### S D 1782 溝跡（第2・6図）

**【位置】** 調査区北東側で発見した南北方向の溝跡であり、北側は調査区外に延びる。また、南側は搅乱により壊されている。

**【重複】** S D 1778と重複し、それよりも新しい。

**【方向・規模】** 方向は北で約2度西に偏している。規模は長さ83cm以上、上幅34cm、下幅17cm、深さ27cmである。

**【埋土】** 炭化物を多く含む灰色土層である。

**【壁・底面】** 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦であり、比高はない。

**【遺物】** 出土していない。

#### S D 1783 溝跡（第2・6図）

**【位置】** 調査区中央で発見した南北方向の溝跡であり、北側は調査区外に延びる。

**【方向・規模】** 方向は北で約3度東に偏している。規模は長さ1.9m以上、上幅21cm、下幅8cm、深さ27cmである。

**【埋土】** 炭化物をわずかに含む灰黄褐色土である。

**【壁・底面】** 壁は外傾しながら立ち上がる。底面は平坦であり、比高はない。

**【遺物】** 出土していない。

#### S E 1784 井戸跡（第2・6図）

**【位置】** 調査区北西端で発見した素掘りの井戸跡であり、北側と西側は調査区外に延びる。

**【平面形・規模】** 不整円形と考えられる。規模は開口部で直径3.5m以上、深さ80cmの段状の部分で直径2.1m以上、深さ1.4m以上である。

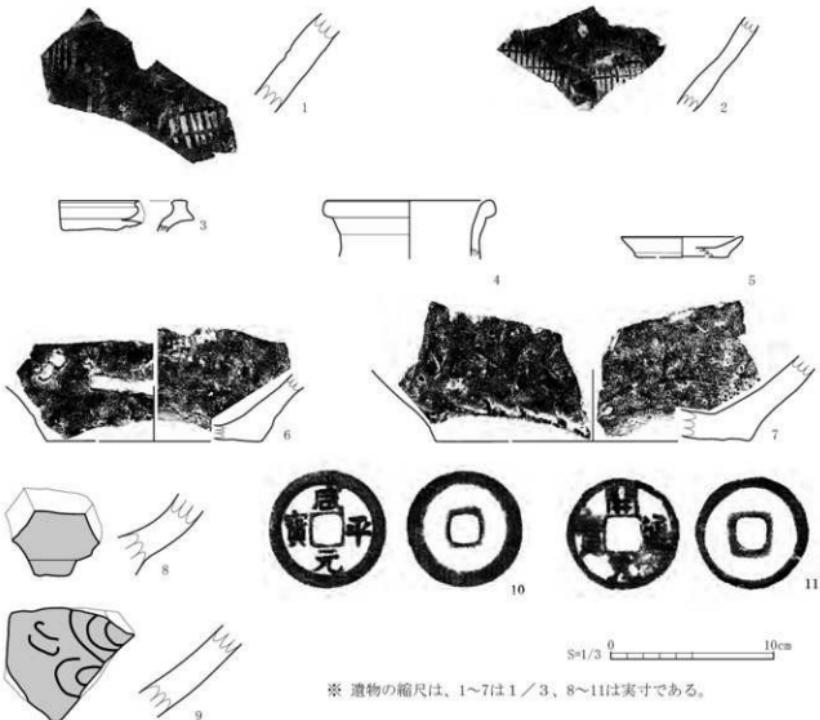
**【埋土】** 6層に分けることができる（第2図1～6層）。1層は炭化物を含む暗緑灰色土、2層はVI層の橙色土をブロック状に含む1層よりも暗みの強い暗緑灰色土、3層は上方に鉄分が層状に沈着している2層よりも暗みの強い暗緑灰色土、4層は黒色の植物遺存体層、5層は黒褐色の植物遺存体層、6・7層は緑黒粘土である。

**【壁】** 檜出面から約80cmの深さまでは緩やかに外傾しながら立ち上がり、それ以下では立ち上がりが急となる。

**【遺物】** 1層から第9図-4に示した無釉陶器の小型壺、5に示したかわらけ、9に示した青磁碗、11に示した開元通宝のほか、土師器壺・甕、須恵系土器壺、無釉陶器壺の破片が、3層から土師器壺、須恵器壺の破片が、4・5層から第9図-6・7に示した無釉陶器壺のほか、土師器甕、須恵器壺・甕、無釉陶器甕・壺の破片が出土している。

#### 堆積層その他出土遺物

I層から須恵器壺、須恵系土器壺、無釉陶器壺、近世の陶器碗の破片が出土している。



※ 遺物の縮尺は、1~7は1/3、8~11は実寸である。

番号	種類	層位	特徴		口径 既存率	底径 既存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	無輪陶器 甕	SD1778 1層	押印	ナデ	—	—	—	5-1	R1	
2	無輪陶器 甕	SD1780 5層	押印	ナデ	—	—	—	5-2	R2	
3	無輪陶器 甕	SD1778 1層	ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	—		R3	
4	無輪陶器 壺	SD1784 1層	ヨコナデ	ヨコナデ	10.0 6/24	—	—	5-5	R4	
5	かわらけ 小皿	SD1784 1層	底部：静止赤切り	ロクロナデ	7.4 6/24	6.0 5/24	1.4		R5	
6	黒釉陶器 甕	4or5層	ナデ	ナデ	—	13.2 5/24	(3.4)	5-3	R6	
7	無輪陶器 甕	SD1784 4or5層	ナデ	ナデ	—	19.2 5/24	(4.4)	5-4	R7	
8	青磁 碗	SD1781 1層			—	—	—	5-6	R8	
9	青磁 碗	SD1784 1層	草花文	—	—	—	—		R9	
特徴										
10	錢貨 成平元宝	SD1779 1層	直徑：2.4、厚さ：0.1					5-7	R10	初鉄：998年
11	錢貨 開元通宝	SD1784 1層	直徑：2.3、厚さ：0.1					5-8	R11	初鉄：621年

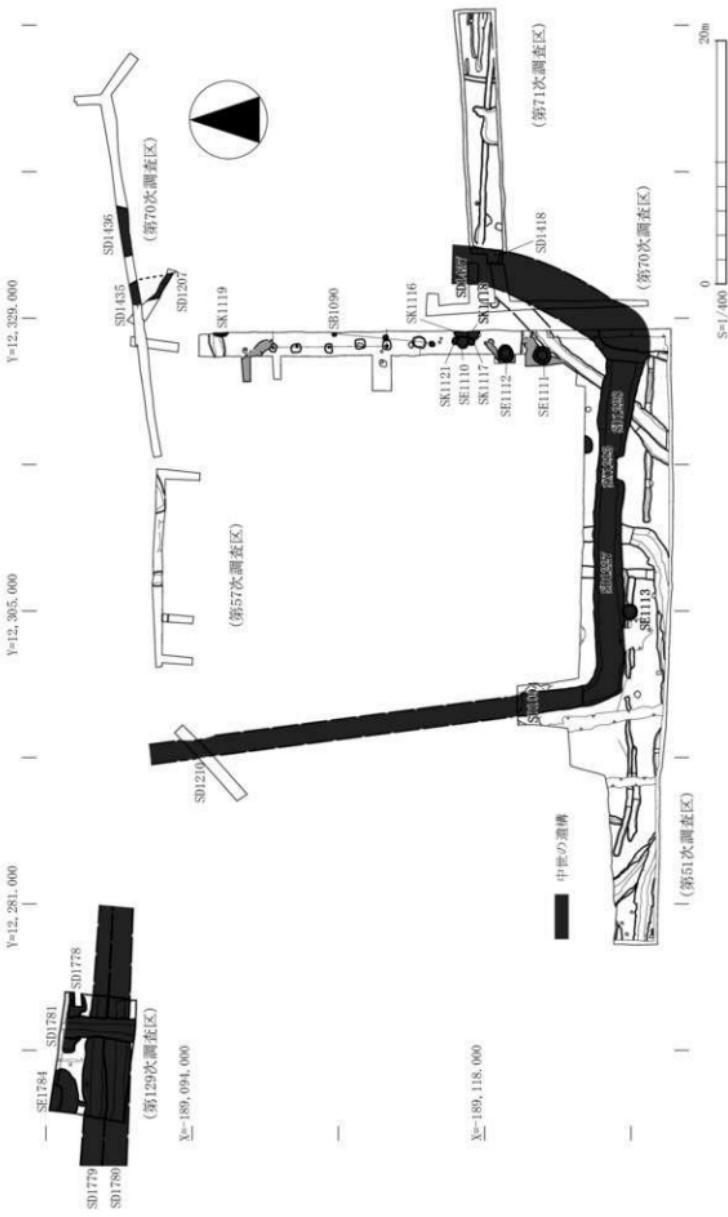
第9図 出土遺物

### 3 まとめ

- (1) SX 1775 水田跡は、古代の最終遺構検出面であるIV層よりも下層にある。本調査区から約 60 m 南東側の第 51 次・71 次調査においても同様の状況で水田跡（V 層水田跡）が発見されており、田面の標高値についても本調査の 4.15 m に対して第 51 次調査では 4.2 ~ 4.3 m、第 71 次調査では 4.1 ~ 4.2 m と近似していることから、SX 1775 と「V 層水田跡」は一連の水田跡であったと考えられる。よって、SX 1775 水田跡は「V 層水田跡」と同様に古墳時代前期のものと考えられる。
- (2) IV 層上面検出遺構に関しては、重複関係から SD 1776 A 期 → SD 1776 B 期 → SD 1777 の新旧が明らかである。SD 1776 は、B 期の埋土中に灰白色火山灰の大ブロックが含まれる人為的な埋め土であることから、10 世紀前葉頃に埋められたと考えられる。SD 1777 は中世の遺物が出土していないことから、10 世紀前葉以降の古代と考えられる。
- (3) III 層は、(2) の遺構との関係から、10 世紀前葉以降の堆積層である。III 層上面検出遺構のうち、SD 1778・1779・1780・1781、SX 1784 は、無釉陶器や青磁や錢貨が出土していることから、中世の遺構と考えられる。
- 第 9 図-3 に示した壺は、内外面ともにヨコナデで調整されており、口縁部が受口状の壺である。口縁形態が常滑窯 5 型式の特徴に類似していることから、13 世紀第 2 四半期のものと考えられる。よって、SD 1778 は 13 世紀第 2 四半期以降に埋まつたと考えられ、SD 1781・1782 はそれ以降の時期のものと言える。
- 第 9 図-5 に示したかわらけは、底部付近が屈曲して外傾しながら口縁部に立ち上がり、底部は静止系切りである。こうした器形のかわらけは、仙台市南小泉遺跡第 16 次調査出土（仙台市教育委員会 1990）のものに類例を求めることができ、13 世紀中葉から 14 世紀前半頃に位置づけられている（佐藤 2003）。よって、SX 1784 は 13 世紀中葉から 14 世紀前半以降に埋まりきったと考えられる。
- (4) SD 1779・1780 は、南東側に隣接する調査区である第 51・54・70・71 次調査で発見された 14 世紀以降の屋敷の区画溝と考えられる遺構（第 10 図）(51・57 次：SD 1094・1210・1227・1228、SX 1223、70 次：SD 1437、71 次：SD 1418) と同等の規模である。年代が不明であるため詳述はできないが、これまで周辺で発見された中世の溝跡と関連して屋敷の区画溝として機能していた可能性もある。

### 参考文献

- 愛知県史編さん委員会 「愛知県史別編 窯業 3 中世・近世 常滑編」 2012
- 佐藤 洋 「陸奥のかわらけ (2) 陸奥南部 2-宮城県-」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院 pp.29-36
- 仙台市教育委員会 「南小泉遺跡 第 16 ~ 18 次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第 140 集 1990
- 多賀城市教育委員会 「山王遺跡 - 第 51・54・57 次調査報告書 -」 多賀城市文化財調査報告書第 81 集 2006
- 多賀城市教育委員会 「山王遺跡 - 第 71・77 次調査報告書 -」 多賀城市文化財調査報告書第 101 集 2010
- 東北中世考古学会編 「中世奥羽の土器・陶磁器」高志書院 2003
- 中野晴久 「常滑・涅美」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995 pp.383-400



第10図 第129次調査区周辺の遺構配置図



S X 1775 水田跡畦畔検出状況・断面（南より）



調査区東側IV層上面遺構検出状況（南西より）

写真図版 1



III層上面遺構検出状況（南西より）



III層上面遺構完掘状況（南西より）



S D 1779・1780 完掘状況（北東より）



S D 1780 断面（西より）

写真図版3



S D 1781 完掘状況（南西より）



S X 1784 井戸跡掘り下げ状況（南東より）



無釉陶器壺 (S D1778 1層出土)



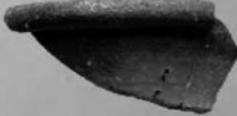
無釉陶器壺 (S D1780 5層出土)



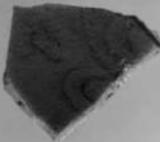
無釉陶器壺 (S X1784 4・5層出土)



無釉陶器壺 (S X1784 4・5層出土)



無釉陶器小型壺 (S X1784 1層出土)



青磁碗 (S X1784 1層出土)



咸平元宝 (S D1779 1層出土)



開元通寶 (S X1784 1層出土)

写真図版5 遺物写真

# 附章 山王遺跡第129次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

## 1 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネを中心とするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山、1984）。

山王遺跡第129次発掘調査では、古墳時代の水田畦畔とみられる高まりとその下位に古墳時代の耕作土とみられる堆積層が認められた。ここでは、これらにおける稻作の可能性を検討する目的でプラント・オパール分析を実施した。

## 2 試料

分析試料は、上位よりVI層、古墳時代の水田畦畔とみられる高まりを覆うS X 1773上部埋土、古墳時代前期の耕作土とされるVII層、その下位のⅧ層の計4点である。いずれも調査担当者によって採取され、当社に送付されたものである。

## 3 分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を  $105^{\circ}\text{C}$  で 24 時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約 1 g に直径約  $40 \mu\text{m}$  のガラスピーブを約 0.02 g 添加（電子分析天秤により  $0.1\text{mg}$  の精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法 ( $550^{\circ}\text{C}$ ・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 ( $300\text{W}$ ・ $42\text{kHz}$ ・10分間) による分散
- 5) 沈底法による  $20 \mu\text{m}$  以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が500以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料 1 g 中のプラント・オパール個数（試料 1 gあたりのガラスピーブ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは 1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}\text{g}$ ）を乗じて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。

各分類群の換算係数は、イネ（赤米）は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、スキ属（スキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山、2000）。

#### 4. 結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、スキ属型、タケア科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型）および未分類である。また、プラント・オパールの他に海綿骨針が認められた。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、図1に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

イネは、SX 1775 上部埋土とⅦ層で検出されている。SX 1775 上部埋土では高い密度である。ヨシ属もSX 1775 上部埋土とⅦ層で検出されている。SX 1775 上部埋土では比較的高い密度である。スキ属型は、Ⅵ層、SX 1775 上部埋土、Ⅶ層で検出されているが少量である。メダケ節型は、SX 1775 上部埋土、Ⅶ層、Ⅷ層で検出されているがいずれも低い密度である。ネザサ節型、チマキザサ節型は、すべての層で検出されている。SX 1775 上部埋土でネザサ節型がやや多い以外はいずれも低い密度である。Ⅵ層、SX 1775 上部埋土、Ⅶ層からは海綿骨針が検出されている。SX 1775 上部埋土ではやや高い密度である。

#### 5. 山王遺跡第129次調査における稻作と推定される周辺植生・環境

稻作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、通常、イネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。ただし仙台平野（仙台市域、多賀城市域）では、これまでの調査で密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満でも水田遺構が検出された例が多く報告されていることから、ここでは3,000個/gを目安とする。

本調査地では、Ⅵ層、SX 1775 上部埋土、Ⅶ層、Ⅷ層について分析を行った結果、SX 1775 上部埋土とⅦ層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、下位のⅦ層では、プラント・オパール密度は2,400個/gと比較的高い値である。周辺には、同じ程度の密度で水田耕作層と判断された調査地もあることから、本地点でも水田耕作層である可能性が考えられる。SX 1775 上部埋土ではプラント・オパール密度が3,000個/gと高い値である。ただし、堆積状況からみてここが水田跡である可能性は考えにくい。ここで検出されたプラント・オパールの由来は明らかでないが、直上のⅥ層からはイネが検出されないことから、水田耕作層と考えられる下位のⅧ層が何らかの要因でここに堆積した可能性が考えられる。

イネ以外の分類群では、SX 1775 上部埋土でヨシ属が比較的高い密度である。当時の調査地がヨシ属の生育するような湿潤な環境であったか、ヨシが敷設あるいは投棄されたことなどが考えられる。

#### 6. まとめ

山王遺跡第129次調査においてプラント・オパール分析を行い、稻作の可能性について検討を行った。その結果、古墳時代の水田層とされたⅦ層において稻作が行われていた可能性が認められた。

## 文献

杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体、富士竹類植物園報告、31、p.70-83。

杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール)、考古学と植物学、同成社、p.189-213。

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (I) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 -、考古学と自然科学、9、p.15-29。

表1 多賀城市山王遺跡第129次調査のプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群(和名・学名)	層位	VI層	SX1775 上部埋土	VII層	VIII層
イネ科	Gramineae (Grasses)				
イネ	<i>Oryza sativa</i>		30	24	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>			24	12
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	6	6	6	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)				
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>		6	18	6
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	18	42	36	12
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa etc.</i>	24	24	12	6
未分類等	Unknown	66	48	54	36
(海綿骨針)	Sponge		12	24	6
プラント・オパール総数	Total	114	180	162	60

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>·cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.88	0.71
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	1.51	0.76
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.07	0.07
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.07	0.21
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.09	0.20
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa etc.</i>	0.18	0.18

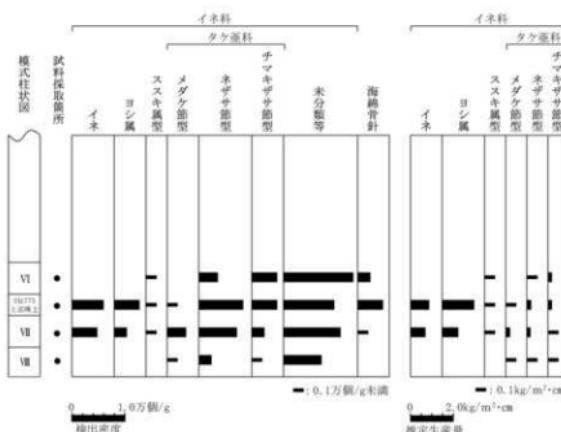
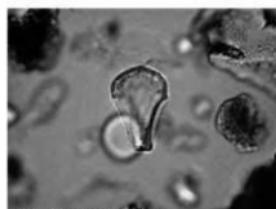
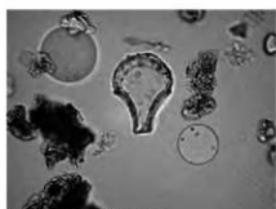


図1 山王遺跡第129次調査のプラント・オパール分析結果

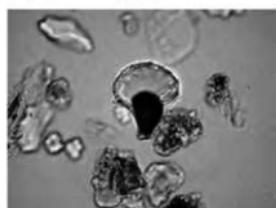
山王遺跡第129次調査のプラント・オバール



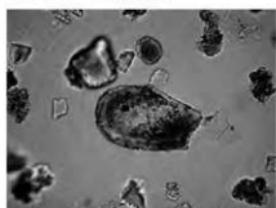
イネ (SX1775上部埋土)



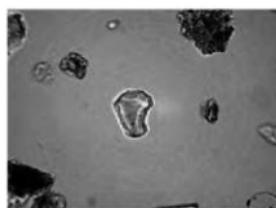
イネ (SX1775上部埋土)



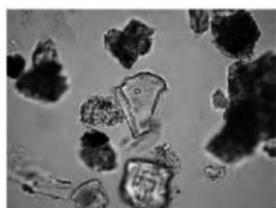
イネ (VII層)



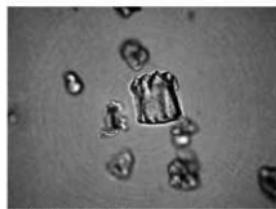
ヨシ属 (SX1775上部埋土)



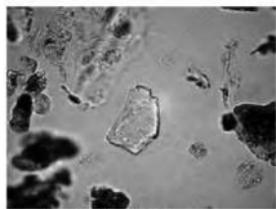
ヨシ属型 (VII層)



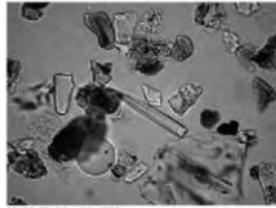
メダケ節型 (VII層)



ネザサ節型 (VII層)



チマキザサ節型 (VI層)



海綿骨針 (VI層)

— 50  $\mu$ m

## VI 山王遺跡第136次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字山王三区内における個人住宅新築に伴うものである。平成25年7月、地権者より当該区における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅の基礎工事の際に直径20～25cm、深さ5mのコンクリート杭を51本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺跡保存の協議を行ったものの、申請どおりの工法で着手することに決定したことから、本発掘調査を実施することになった。9月21日に地権者から発掘調査に関する依頼・承諾の提出を受け、10月1日より現地調査を開始した。

はじめに、重機による住宅建築部分の表土除去を行い、現表土下1.2～1.3m下にあるにぶい黄色粘質土が多量に混入する黒褐色粘質土または黒褐色粘質土が多量に混入するにぶい黄色粘質土(Ⅲ層)上面で多数の柱穴や土壙を確認した。

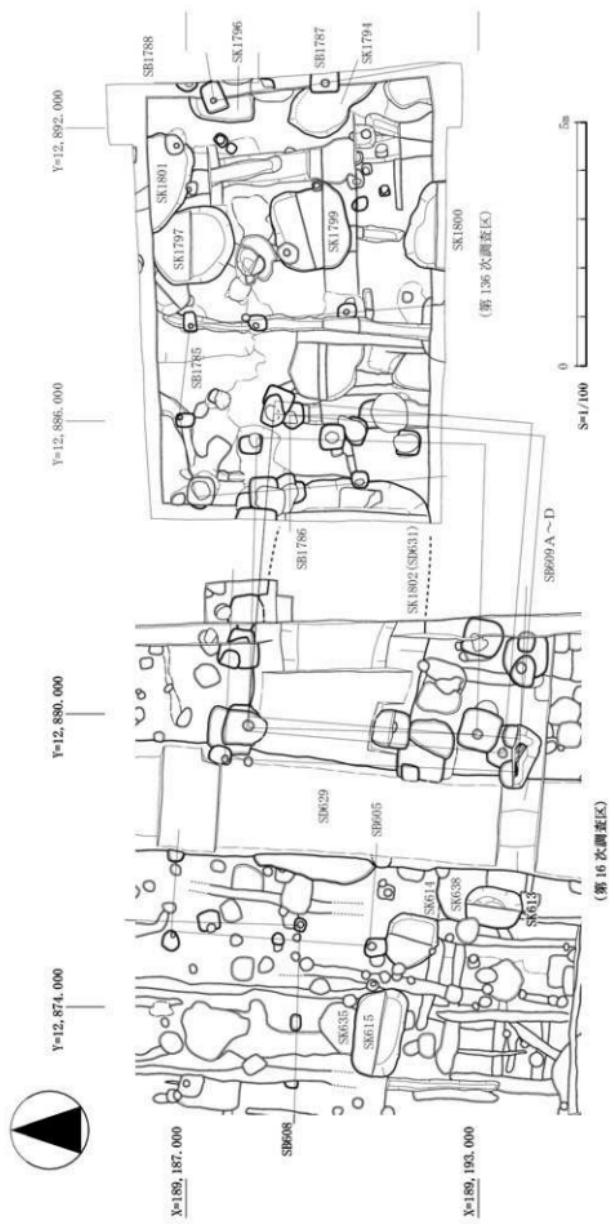
3日より作業員を動員し、Ⅲ層上面の精査および調査区東西壁際に排水用のサブトレーニングを設け土層観察を行った。この結果、調査区西半部では隣接する第16次調査で発見したS B 609掘立柱建物跡東側柱列やS D 631溝跡東端部、それよりも古いS B 1785・1786掘立柱建物跡、調査区東半部ではS B 1787・1788掘立柱建物跡やS D 1791・1792溝跡、S K 1794～1801土壙等を確認した。また、壁断面よりⅢ層下には10～20cmの褐灰色粘土層が調査区全面に及んでいることが明らかとなり、Ⅲ層はこの粘土層上面に施された整地層であると判断した。8日より遺構個別の精査と埋土掘り下げを開始し、終了したものから順次平面・断面図を作成したが、著しい湧水や台風・長雨に影響され、これら作業に多くの時間を費やした。11月19日、整地層上面の全景写真を撮影し、22日より整地層下の遺構の有無を確認するために、この掘り下げを開始した。26日、整地層下層には古代の遺構が存在しないことを確認したことから、調査区壁面の断面図作成に取りかかった。また、周辺地区で多く発見されている古墳時代の水田層を確認するため南東端部を標高2.8mまで深く掘り下げたが、粗砂層が厚く堆積するのみであり水田耕作土と考えられる層は確認できなかった(註1)。29日、土層注記や一部土壙の断面図作成等を行い、12月1日に重機により調査区内の埋め戻しを開始した。4日、休憩用のプレハブ等を撤去し、本調査的一切を終了した。



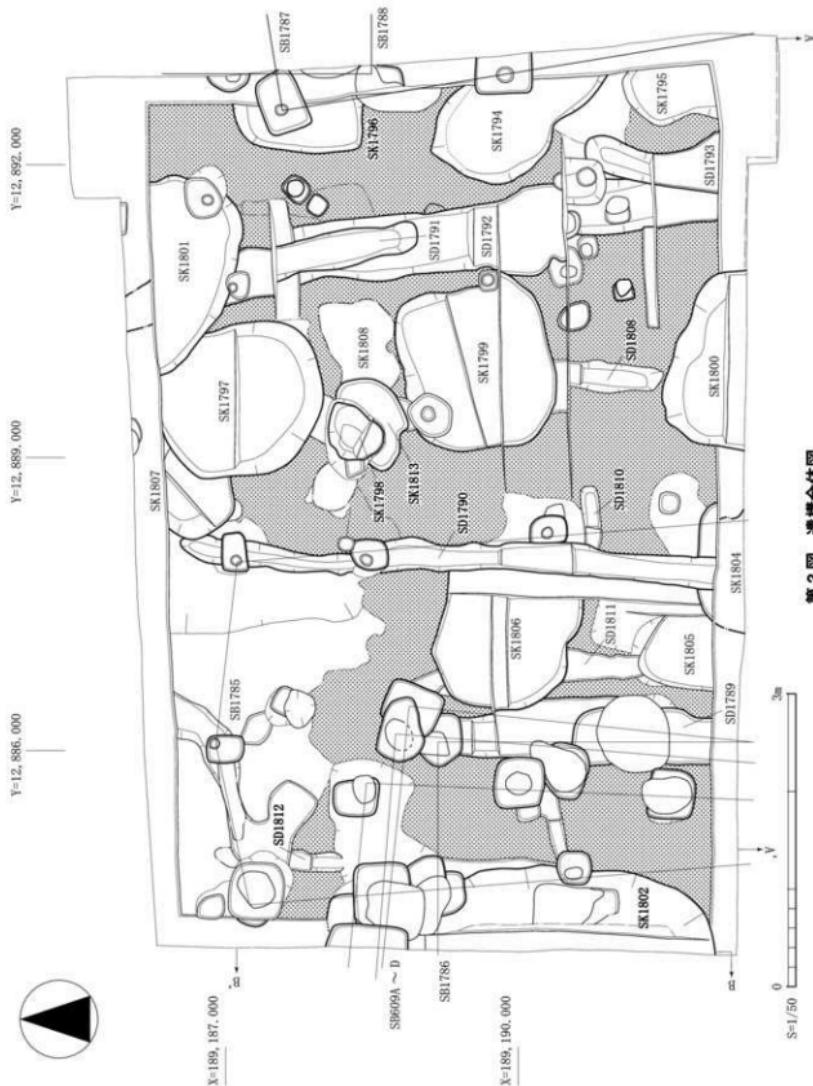
第1図 調査区位置図

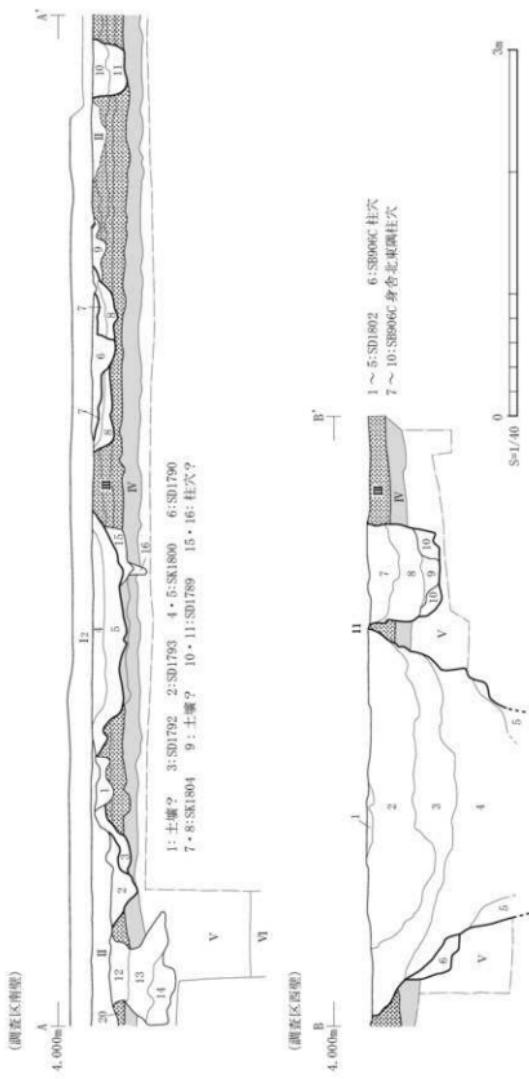
註1：近接する中山王地区では、標高約3.4mで古墳時代前期の水田層を確認している。本地区で見られるような粗砂層は、水田層の下層に認められる。

第2図 第16・136次調査区合成図



第3図 遺構全体図





第4図 調査区南壁及び西壁断面

## 2 調査成果

### (1) 層序 (第4図)

今回の調査では、現在の表土以下6層の堆積を確認した。

I 1層：現代の造成による盛土で、厚さは約1mである。

I 2層：造成前の水田耕作土である。厚さは約20cmである。

II 層：遺構の最上層や一部の窪みで確認した、炭化物が多量に混入する黒褐色砂質土である。厚さは厚い場所で約20cmである。

III 層：北西部を除く全域で確認した整地層である。上層がにぶい黄色粘質土が多く混入する黒褐色粘質土、下層が黒褐色粘質土が多く混入するにぶい黄色粘質土である。厚さは20～30cmである。古代の遺構検出面である。

IV 層：全域で確認した褐灰色粘質土であり、厚さは約10～20cmである。

V 層：全域で確認したにぶい黄色粘質土であり、厚さは南東部で約1mである。

VI 層：南東部で確認した粗砂層である。

### (2) 発見遺構と遺物

今回の調査では、III層上面で掘立柱建物跡や溝跡、土壤などを発見した。以下、発見した遺構について記載する。

#### S B 1785 掘立柱建物跡 (第5図)

【位置】調査区西部で発見した。

【桁行・梁行】桁行3間以上、梁行2間の南北棟建物跡である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は7基 (P 1～7) 検出しており、P 3～5・7で柱痕跡、P 1・2・6で柱抜取り穴を確認した。

【重複】S B 609、S D 1790、S K 1802と重複しており、それらよりも古い。

【方向・規模】方向は東側柱列で測ると、北で約5度西に偏している。建物の規模は、桁行が東側柱列で3.2m以上、柱間は北から1.35m、1.85mである。梁行は北妻で3.47m、柱間は西から1.62m、1.92mである。

【掘方】平面形は方形を基調とし、規模は北東隅柱穴 (P 5) で測ると長辺40cm、短辺25cm、深さ50cmである。埋土は黒色または黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色粘質土やにぶい黄色砂質土が小ブロック状に混入している。

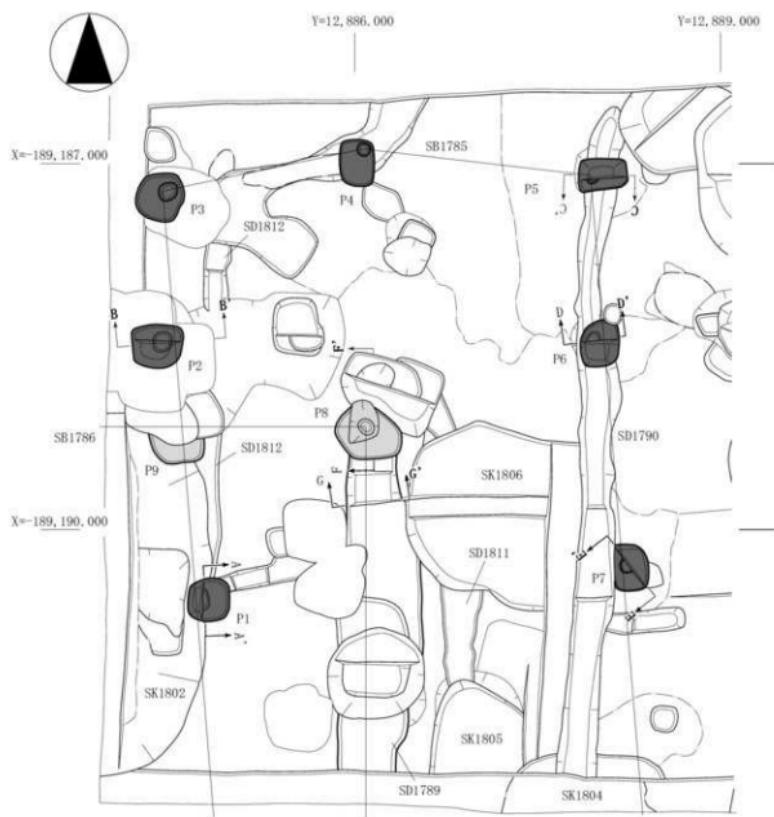
【柱痕跡】直径10～16cmの円形である。埋土はP 5が褐灰色粘土、P 7が黒褐色粘土である。

【柱抜取り穴】柱抜取り穴はほとんどが柱痕跡状に認められるものであり、柱のあたり痕跡を残すものと考えられる。埋土は黒色～黒褐色粘質土が主体であり、P 2・6ではにぶい黄橙色及びにぶい黄色粘質土が小ブロック状に混入している。

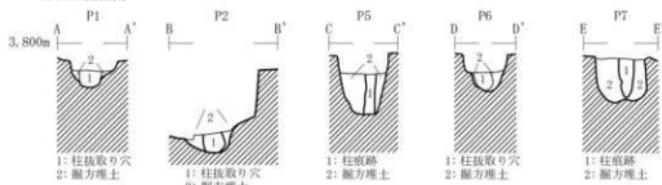
【遺物】柱抜取り穴から土師器甕 (A・B類)、須恵器壺 (I・III類) が出土している。

#### S B 1786 掘立柱建物跡 (第5図)

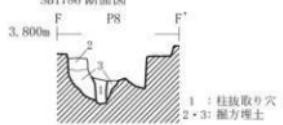
【位置】調査区西部で発見した。



SB1785 断面図



SB1786 断面図



0      2m  
S=1/40

第5図 SB 1785・1786 ほか平面・断面図

【桁行・梁行】2基の柱穴（P 8・9）より推定したものであり、北東隅柱から北側柱列1間分を確認したと考えられる。このため、本調査区内での桁行・梁行は不明である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】2基ともに柱抜取り穴を確認しており、P 8では柱のあたり痕跡を確認した。

【重複】S B 609、S D 1789、S K 1802と重複しており、S B 609、S K 1802よりも古く、S D 1789よりも新しい。

【方向・規模】方向は、西で約1度北に偏しており、柱間は約1.6mである。

【掘方】平面形はおよそ方形を基調としており、規模はP 8で測ると長辺55cm、短辺42cm、深さ47cmである。埋土は、いずれも黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土が小ブロック状に混入している。

【柱抜取り穴】いずれも柱穴の北側を壊しており、埋土は黒色及び黒褐色粘質土である。

【遺物】柱抜取り穴から土師器甕（B類）、須恵器坏が出土している。

#### S B 609 挖立柱建物跡（第6～10図）

【位置】調査区西部で発見した掘立柱建物跡である。東側に隣接する第16次調査の成果と合わせると、本調査区ではS B 609の北東部を確認したこととなる（註2）。

【変遷】第16次調査ではほぼ同位置で4時期の変遷（A→D期）と捉えているが、柱穴の位置及び重複関係より、本調査区に於いてはA→C期の3時期分を確認した。

【桁行・梁行】東側柱列を構成する柱穴は、A・B・C期ともに第16次調査で検出した柱穴と比べると規模が小さいことから、東廂であると判断した。これにより、A→C期に関しては東側に廂の付く桁行3間、梁行3間の東西棟建物跡であることが明らかとなった。

【重複】S D 1798、S K 1802と重複し、前者より新しく、後者よりも古い。

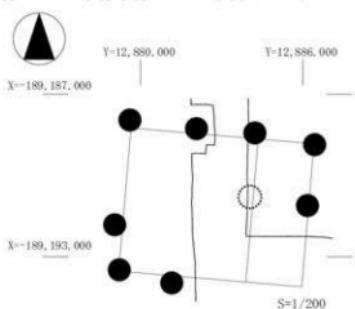
#### ・A期

【柱痕跡・抜取り穴の有無】身舎北東隅柱穴及び東廂1間分を確認した。柱穴は3基検出しており（P 1～3）、廂部分の柱穴P 1・2に柱抜取り穴が認められる。

【方向・規模】方向は東側柱列で測ると北で約7度東に偏しており、柱間は約2.2m、身舎からの廂の出は約2.2mである。16次調査と合わせた規模は、桁行き約6.8m、梁行き約5.3mと推測される。

【掘方】平面形はおよそ方形を基調としており、規模はP 1で測ると長辺約80cm、短辺約60cm、深さ約80cmである。埋土は、P 1が褐色粘質土、P 2が黒褐色粘質土であり、とともににぶい黄橙色粘質土が小ブロック状に多量に混入している。

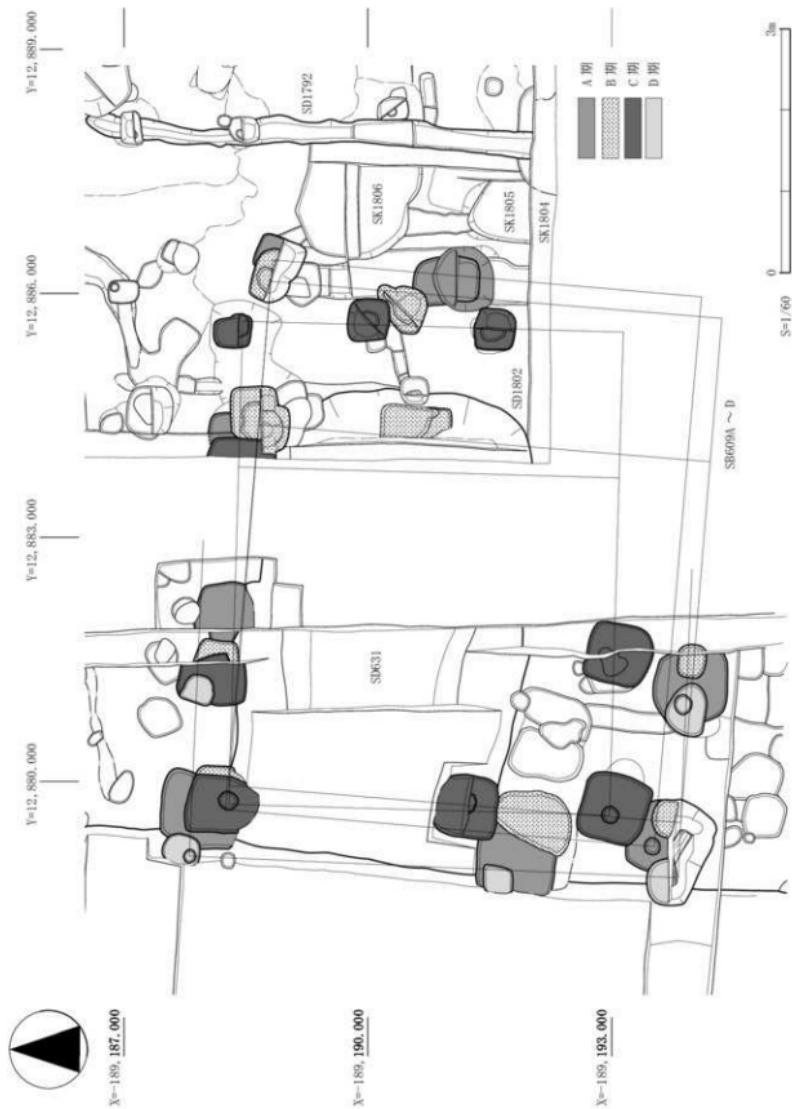
【柱抜取り穴】いずれも柱穴を大きく壊しており、P 2ではB期北西隅柱（P 7）の掘方を兼ねている。埋土は、P 1が褐色粘質土であり、にぶい黄橙色粘質土が小ブロック状に僅かに混入している。

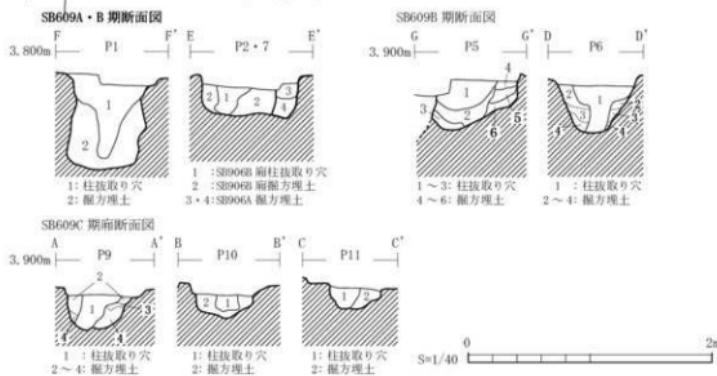
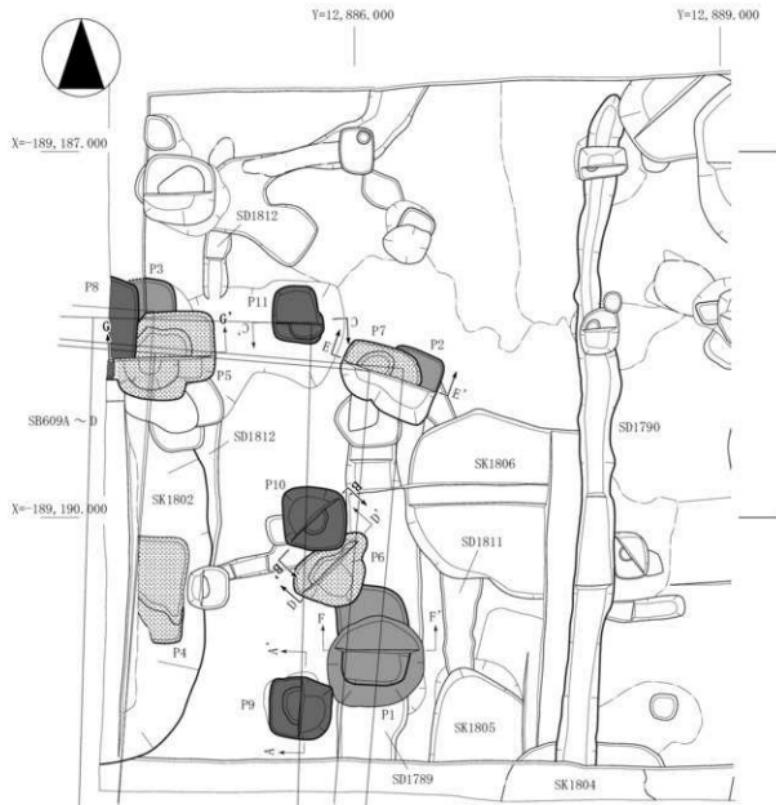


第6図 S B 609 A模式図

註2：第16次調査は平成3年に実施したものであり、実測図作成の基準点は東日本大震災以前の国土座標を基にしている。今回の調査区との合成については、周辺の地盤変動の数値を参考に移動しているものの、誤差が生じている可能性がある。このため、本報告では第136次調査で確認した柱についてのみ詳細を記載する。

第7図 S-B 609 平面図 (第16・136次調査合成)





第8図 SB 609 ほか平面・断面図

【遺物】掘方から平瓦（II B類）、柱抜取り穴から土師器壺（B類）・甕（B類）、須恵器壺（III類）・瓶・甕が出土している。

#### ・B期

【柱痕跡・抜取り穴の有無】身舎北東隅柱から東入側柱列1間分と東廂1間分を確認した。柱穴は身舎部分で2基（P 4・5）、廂部分で2基（P 6・7）検出しており、その全てに柱抜取り穴が認められる。

【方向・規模】方向は、東入側柱列で測ると、北で約4度東に偏しており、柱間は東入側柱列で約1.9m、身舎からの廂の出は約1.8mである。16次調査と合わせた規模は、規模は桁行き6.3m、梁行き5.6mと推測される。

【掘方】平面形はおよそ方形を基調としており、規模はP 5で測ると長辺65cm、短辺60cm、深さ35cmである。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色またはにぶい黄褐色粘質土が小ブロック状に混入している。

【柱抜取り穴】いずれも柱穴を大きく壞している。埋土は黒色または黒褐色粘質土であり、にぶい黄橙色粘質土が小ブロック状に混入している。

【遺物】掘方から土師器甕（B類）、須恵器壺（B類）、甕（B類）、須恵器壺・蓋・甕、砥石が出土している。

#### ・C期

【柱痕跡・抜取り穴の有無】身舎北東隅柱穴及び東廂2間分を確認した。柱穴は身舎部分で1基（P 8）、廂部分で3基（P 9・10・11）検出しており、その全てに柱抜取り穴が認められる。

【方向・規模】方向は東側柱列で測ると、北で約1度東に偏しており、柱間は北から約1.6m、約1.7mである。身舎からの廂の出は約1.8m、16次調査と合わせた規模は桁行約5.9m、梁行約4.7mと推測される。

【掘方】柱穴の平面形はおよそ方形を基調としており、規模はP 10で測ると一辺約50cm、深さ約30cmである。埋土は、褐灰色粘質土が主体であり、にぶい黄橙色粘質土が小ブロック状に混入している。

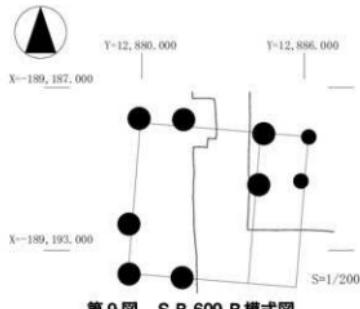
【柱抜取り穴】柱抜取り穴はいずれも柱穴を大きく壞しており、埋土はにぶい黄色粘質土や褐灰色粘質土が僅かに混入する黒褐色粘質土である。

【遺物】掘方から土師器甕、柱抜取り穴から土師器壺（B II類）・甕（A・B類）、須恵器壺（III・V類）、石製品（碁石か？）が出土している。

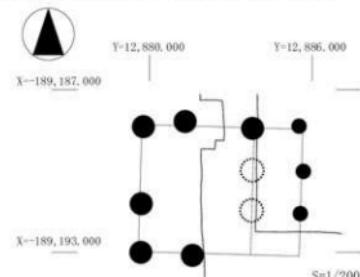
#### S B 1787 挖立柱建物跡（第11図）

【位置】調査区東端部で発見した挖立柱建物跡である。

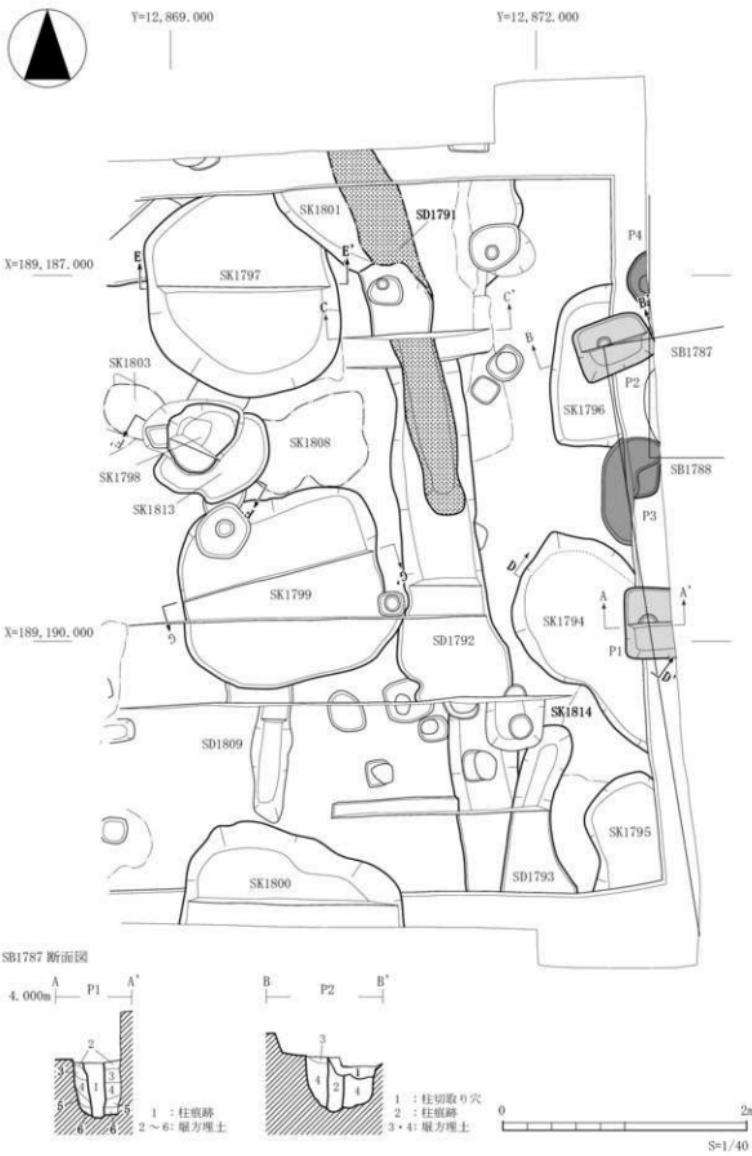
【桁行・梁行】柱穴2基（P 1・2）より推定したも



第9図 S B 609 B 模式図



第10図 S B 609 C 模式図



第11図 S B 1787・1788、S D 1792ほか平面・断面図

のであり、北西隅柱から西側柱列1間分を確認したと考えられる。このため、本調査区内での桁行・梁行は不明である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】2基ともに柱痕跡を確認した。

【重複】SB 1788・SK 1794・1796と重複しており、SK 1794・1796よりも古い。

【方向・規模】方向は、北で8度58分西に偏しており、柱間は2.31mである。

【掘方】平面形はおよそ方形を基調としており、規模はP2で測ると長辺63cm、短辺43cm、深さ49cmである。

埋土は、P1がにぶい黄褐色砂質土と黒褐色粘質土の互層であり、P2は暗灰黄色砂質土が小ブロック状に混入する黒褐色粘土である。

【柱痕跡】いずれも柱穴の西寄りで、円形の柱痕跡を確認している。規模は直径13～18cmであり、埋土はP1が黒色粘土、P2が黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S B 1788 挖立柱建物跡（第11図）

【位置】調査区東端部で発見した挖立柱建物跡である。

【桁行・梁行】柱穴2基（P3・4）より推定したものであり、南西隅柱から西側柱列1間分を確認したと考えられる。このため、本調査区内での桁行・梁行は不明である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】2基ともに柱抜取り穴を確認した。

【重複】SB 1787・SK 1796と重複しており、SK 1796よりも古い。

【方向・規模】方向は北で約2度東に偏しており、柱間は約1.4mである。

【掘方】柱穴の平面形はおよそ方形を基調としている。規模は、一部を確認したにすぎないことから、明らかでない。埋土は、いずれも黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄色粘質土が小ブロック状に混入している。

【柱抜取り穴】P3では柱穴を大きく壊しており、P4では柱痕跡状に認められる。埋土は、いずれもにぶい黄色粘質土が混入する黒褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1789 溝跡（第4・8図）

【位置・形態】調査区西半部で確認した、南北方向の溝跡である。南壁で西に位置がずれることから、この付近で西側に向きが変わるものと推測される。

【重複】SB 609・1786・SK 1806と重複し、それらよりも古い。

【方向・規模】方向は、北で約1度東に偏している。規模は長さ2.8m以上、上幅40～60cm、深さは南壁で約30cmである。

【壁・底面】壁はほとんど凹凸がなく、急角度に立ち上がる。底面も起伏はほとんどなく、北に向かって低くなっている。

【埋土】2層に分けることができる。いずれも黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄色粘質土が多量に混入している。

【遺物】出土していない。

#### S D 1790 溝跡（第4・8図）

【位置・形態】調査区中央部で確認した、南北方向の溝跡である。南壁で東西に埋土が広がることから、

この付近で東西方向の溝と接続していると考えられる。

【重複】 S B 1785、S K 1804・1806・1807と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】 方向は、北で約3度東に偏している。規模は長さ8.6m以上、上幅16~34cm、深さ8~14cmである。

【壁・底面】 壁は凹凸が著しく、緩やかな箇所と急角度で立ち上がる箇所があるなど一様でない。底面は多くの起伏を伴いながら、北に向かって低くなっている。

【埋土】 褐灰色粘質土であり、にぶい黄色粘質土や炭化物が粒状に若干混入している。

【遺物】 土師器壺（B II類）・壺（B類）、須恵器壺（I・III・V類）・壺、灰釉陶器碗、平瓦II B類が出士している。

#### S D 1791 溝跡（第11・12図）

【位置・形態】 調査区東半部で確認した、南北方向の溝跡である。

【重複】 S D 1792、S K 1801と重複し、それよりも古い。

【方向・規模】 方向は、北で約15度西に偏している。規模は長さ3.1m以上、上幅30~40cm、深さは約30cmである。

【壁・底面】 壁はほとんど凹凸がなく、急角度で立ち上がっている。底面はおむね平らであり、北に向かって低くなっている。

【埋土】 2層に分けることができる（第12図3・4層）。いずれも黒褐色粘質土が主体であるが、3層には焼土や炭化物粒、4層にはにぶい黄色粘質土が多量に混入している。

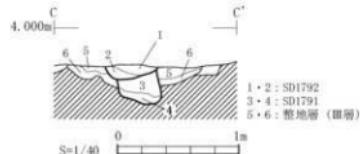
【遺物】 土師器壺（B類）、須恵器壺が出土している。

#### S D 1792 溝跡（第11・12図）

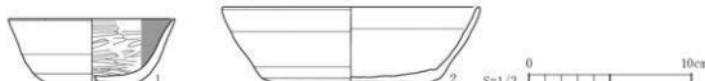
【位置・形態】 調査区東半部で確認した、南北方向の溝跡である。

【重複】 S D 1791・1793、S K 1801・1814と重複し、S D 1793よりも新しく、それ以外のものよりも古い。

【方向・規模】 方向は、北で約10度西に偏している。規模は長さ6.4m以上、上幅56~90cm、深さ10~30cmである。



第12図 S D 1791 ほか断面図



番号	種類	遺構 層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 壺	SD1793 1層	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	(10.0) 5/24	(5.5) 6/24	4.0	—	R4	B I類
2	須恵器 壺	SB1786 抜取り穴	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(14.8) 1/24	(9.7) 12/24	4.6	—	R3	I類

第13図 柱穴・溝跡出土遺物

【壁・底面】壁はやや凹凸があり、緩やかに立ち上がっており、底面には起伏がほとんどなく、南に向かって低くなっている。

【埋土】2層に分けることができる。1層は褐灰色砂質土、2層は黒褐色砂質土が主体であり、いずれも焼土や炭化物が多く混入している。

【遺物】土師器壺（A・B II・B II c・B V類）・甕（A・B類）・須恵器壺（III・V類）・瓶・甕のほか、畿内系土師器塊の口縁部（写真図版3-4）が出土している。

#### S K 1794 土壙（第11・14図）

【位置】調査区東端部で発見した。

【重複】S B 1787と重複し、それよりも新しい。

【平面形・規模】平面形は楕円形に近く、規模は長軸1.6m以上、短軸1.1m、深さ18cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がっており、底面もおよそ平坦である。

【埋土】2層に分けることができる。1層は黒褐色粘質土、2層は黒褐色粘土であり、いずれにもぶい黄色粘質土が小ブロック状に混入している。

【遺物】土師器壺（B I・B II c類）・甕（A・B類）・須恵器壺（III・V類）・瓶・甕が出土している。

#### S K 1796 土壙（第11図）

【位置】調査区東端部で発見した。

【重複】S B 1787・1788と重複し、それらよりも新しい。

【平面形・規模】平面形は方形に近く、規模は南北約1.3m、東西1.1m以上、深さ約20cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がっており、底面もおよそ平坦である。

【埋土】黒褐色粘質土であり、ぶい黄色粘質土が小ブロック状に混入している。

【遺物】土師器壺（A・B II類）・甕（A・B類）・須恵器壺（III類）・甕が出土している。

#### S K 1797 土壙（第11・15図）

【位置】調査区東半部で発見した。

【重複】S K 1801・1807と重複し、前者よりも古く、後者よりも新しい。

【平面形・規模】平面形は楕円形に近く、規模は長軸約1.7m、短軸約1.6m、深さ16cmである。

【壁・底面】壁はやや凹凸を伴いながら、非常に緩やかに立ち上がっており、底面は起伏が著しく、平坦ではない。

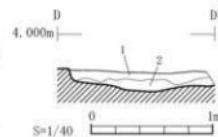
【埋土】黒褐色粘質土が主体であり、黄褐色・褐色粘質土や炭化物がブロック状に多く混入する。

【遺物】土師器壺（A・B II・B III・B V類）・甕（A・B類）・須恵器壺（II・II c・III・V類）・蓋・瓶・甕のほか、畿内系土師器塊の底部（写真図版3-5）が出土している。

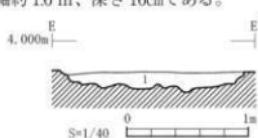
#### S K 1798 土壙（第11・16図）

【位置】調査区東半部で発見した土壙である。

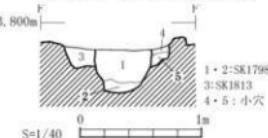
【重複】S K 1803・1813と重複し、それらよりも新しい。



第14図 SK 1794 断面図



第15図 SK 1797 断面図



第16図 SK 1798 ほか断面図

【平面形・規模】平面形は不整形であり、規模は東西約80cm、南北約60cm、深さ45cmである。

【壁・底面】壁は、東側の一部に僅かな段を伴いながら、急角度で立ち上がる。底面は起伏がほとんどなく、およそ平坦である。

【埋土】2層に分けることができる。1層は灰黄褐色粘質土を小ブロック状に含む黒褐色粘質土であり、僅かに焼土の混入が認められる。2層は暗灰黄色粘質土であり、灰黄褐色粘土が斑状に混入している。

【遺物】土師器壺（B II類）・壺（B類）、須恵器壺（III・V類）・瓶・平瓶（把手）・壺が出土している。

#### S K 1799 土壙（第11・17図）

【位置】調査区東半部で発見した。

【重複】SD 1792と重複し、それよりも新しい。

【平面形・規模】平面形は方形に近く、規模は東西約1.8m、南北約1.5m、深さ11cmである。

【壁・底面】壁はやや凹凸があり、北側が非常に緩やかに、西側が急角度に立ち上がっている。底面は起伏が著しく、平坦ではない。

【埋土】黒褐色粘質土が主体であり、底面付近に黄灰色土がブロック状に混入するほか、炭化物粒が若干認められる。

【遺物】土師器壺（A・B I・B II類）・壺（A・B類）、須恵器壺（II a・III・V類）・壺、灰釉陶器手付瓶（把手）、平瓦II B b類が出土している。

#### S K 1800 土壙（第4・11図）

【位置】調査区南端部で発見した。

【重複】他の遺構との重複はない。

【平面形・規模】平面形は方形に近く、規模は壁面で東西約2m、南北60cm以上、深さ28cmである。

【壁・底面】壁には著しい凹凸が認められるものの、非常に緩やかに立ち上がっている。底面は起伏が著しく、平坦ではない。

【埋土】2層に分けることができる（第4図4・5層）。4層は上層のII層が混入している。5層は黒色粘質土であり、にぶい黄色粘質土が斑状に若干混入しているほか、炭化物粒、焼土粒が多く認められる。

【遺物】土師器壺（B I・B II・B II c・B IV・B V類）・壺（B類）、須恵器壺（III・V類）・高台付壺・瓶・壺が出土している。

#### S K 1802 土壙（第4・8図）

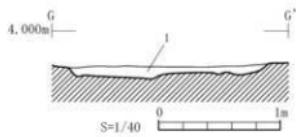
【位置】調査区南西端部で発見した。

【重複】SB 609・1785・1786と重複し、それらよりも新しい。

【平面形・規模】第16次調査SD 631溝跡と一連のものであるが、今回の調査成果より東西に長い土壙と判断した。規模は第16次調査区と合わせると東西約8.2m、上幅約3m、深さは1.2m以上である。

【壁・底面】壁は上位ではやや凹凸があるものの緩やかに立ち上がっているが、中位以下は垂直に落ち込んでいる。底面は、本調査区内では確認できなかった。

【埋土】5層確認することができた。1層は灰色粘質土、2・3層は黒色粘土であり、2層にオリーブ黄色砂質土、3層に灰オリーブ砂がブロック状に混入している。IV層は灰色砂が僅かに混入する黒色粘土、5層は黒色粘土が薄層状に混入する灰色砂である。



第17図 SK 1799 断面図

【遺物】土師器坏（B II・B V類）・壺（B類）、須恵器坏・壺、平瓦（II B類）が出土している。

#### S K 1804 土壙（第4・8図）

【位置】調査区南端部で発見した。

【重複】SD 1790、SK 1805と重複し、前者より古く、後者よりも新しい。

【平面形・規模】平面形は円形に近く、規模は壁面で東西約1.5m、南北45cm以上、深さ20cmである。

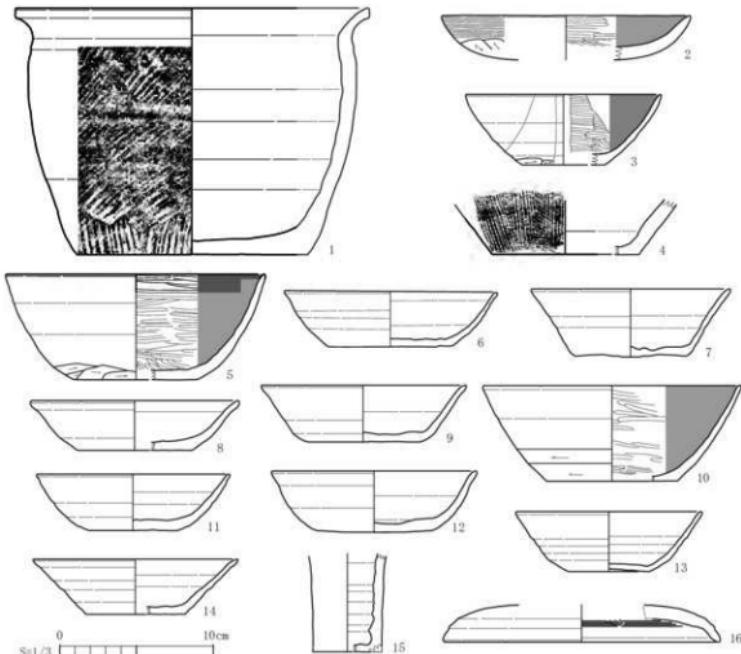
【壁・床面】壁は凹凸がほとんどなく、東側を除き非常に緩やかに立ち上がっている。底面には起伏が認められ、平坦ではない。

【埋土】2層に分けることができる（第4図7・8層）。7層はにぶい黄色砂質土が多量に混入する黒褐色粘質土、8層は炭化物が多量に混入する黒色粘質土である。

【遺物】土師器壺（B類）、須恵器坏（III・V類）・平瓶（把手）・壺が出土している。

### 3 考察

今回の調査では、掘立柱建物跡5棟、溝跡9条、土壙16基、柱穴多数を発見した。これらほとんどが、およそ調査区全域に施された整地層上面より掘り込まれており、上面は僅かに残存するII層に覆われている。西に隣接する第16次調査では、表土下に灰白色火山灰粒を含む褐色シルト層（II a層）が確認さ



第18図 土壙ほか出土遺物

番号	種類	遺構 層位	特徴		口径 底径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考	単位：cm
			外面	内面							
1	須恵器 壺	SK1796 1層	ハケメ、ロクロナデ	ロクロナデ	(22.8) 6/24	15.0 12/24	16.0	3-3	R5		
2	土師器 环	SK1797 1層	体部下半：ヘラケズリ 口縁部：ヨコナデ	ヘラミガキ、黒色処理	(16.0) 3/24	—	—	—	R6	A類	
3	土師器 环	SK1797 1層	ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	(12.5) 1/24	(5.4) 2/24	4.60	—	R7	B II類	
4	須恵器 壺	SK1797 1層	ハケメ、ロクロナデ	ロクロナデ	— 3/24	(9.6)	—	—	R8		
5	土師器 环	SK1797 1層	ロクロナデ 底部・体部下半：手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	(16.6) 8/24	8.3 9/24	6.90	—	R9	B II類	
6	須恵器 环	SK1798 1層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	13.7 10/24	8.1 22/24	3.6	3-2	R10	III類	
7	須恵器 环	SK1799 1層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(12.8) 3/24	7.2 15/24	4.40	—	R12	III類	
8	須恵器 环	SK1799 1層	ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(13.3) 8/24	(7.3) 6/24	3.20	—	R13	II類	
9	須恵器 环	SK1799 1層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.2) 1/24	(7.3) 10/24	3.70	—	R14	III類	
10	土師器 环	SK1800 1層	ロクロナデ 底部・体部下半：回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	(16.6) 1/24	(8.5) 8/24	6.2	—	R15	B I類	
11	須恵器 环	SK1800 1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(12.5) 4/24	5.7 19/24	4.60	—	R16	V類	
12	須恵器 环	SK1800 1層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.2) 3/24	7.6 14/24	4.00	—	R17	III類	
13	須恵器 环	SK1800 1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	12.0 5/24	5.2 18/24	3.90	—	R27	V類	
14	須恵器 环	SK1804 1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(13.2) 2/24	(6.3) 10/24	3.6	—	R21	V類	
15	須恵器 長颈瓶	II層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	— 1/24	(4.5)	—	—	R22	壺G	
16	須恵器 壺	II層	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ハケメ	(17.8) 2/24	—	—	3-1	R23		

れており、その上面及び下層（Ⅲ層：地山）の2面で遺構が検出されているが、本調査区ではⅡa層に対応する層序は認められない。

今回発見した遺構のうち、SK 1797 土壙からは土師器環・壺、須恵器環・蓋・瓶・壺、畿内系土師器碗が出土している。このうち环類を分類別に見ると、土師器環ではB II類8点、B III類1点、B V類1点、須恵器環ではII類2点、III類10点、V類1点がある。須恵器III類の出土数が多く、土師器では再調整を施すB II類が8割を占めている。図上で復元できたものは土師器環1点のみであり、底径／口径が0.43、器高／口径が0.37である。また、破片資料の集計ではあるものの土師器A・B類の出土数を比較すると、环でA類3点、B類39点、壺でA類4点、B類198点であり、極めて少量ながらA類の出土が認められる。

なお、畿内系土師器碗（写真図版3-5）は底部の小片であり器形全体を復元することは困難であるが、全面にヘラケズリが施されており、8世紀末～9世紀前葉頃のものと類似している（註3）。

SK 1800 土壙からは土師器環・壺、須恵器環・高台付环・瓶・壺が出土している。分類別に环類を見ると土師器環ではB I類1点、B II類9点、B IV類1点、B V類1点、須恵器環ではIII類7点、V類10点がある。須恵器V類の出土数がやや多いものの、土師器では再調整を施すB I・II類が8割以上を占めている。図上で復元したものをみると、土師器環は底径／口径が0.51、器高／口径が0.37であり、須恵器環は底径／口径が0.43～0.58、器高／口径が0.30～0.37である。また、破片資料も含め土師器は全てB類に限られ、A類の出土は確認できない。

註3：奈良市埋蔵文化財調査センター池田裕英氏・安井宜也氏のご教授による。

さて、SK 1797・1800 にみられるような坏類の組み合わせは、9世紀中葉頃とされている多賀城跡 SK 2167 土壙のものと類似している。ただし、多賀城跡 SK 2167 では土師器 A 類が出土していないことを考慮すれば、SK 1797 については9世紀中葉頃でも古いものと捉える事ができよう。

一方、上述した遺構も含め、出土した遺物のうち年代的な特徴を捉えやすい土師器坏と須恵器坏を抽出したのが表2である。これをみると、土師器坏では再調整を施したB II 類の出土数が圧倒的に多く、B V 類の出土は極めて少ない。須恵器では各遺構ともにIII類の出土数が多いのに比べ、V 類は少數若しくは同程度出土しているといった状況である。また、各遺構から出土した土師器坏・壺の集計を見ると、B 類の占める割合が圧倒的ではあるものの、A 類が少量出土するものも認められる。このような土器の出土状況は SK 1797・1800 や9世紀前葉頃の土器群と類似しており、土師器坏 B V 類及び須恵器坏 V 類が多数を占めるようになる9世紀後半頃や、須恵器系土器が多く含まれる10世紀以降の様相とは明らかに異なっている。遺構上面を浅く覆うII層出土土器も同様な傾向であり、今回発見した遺構の年代が9世紀後半には下らないことを示すものといえよう。

なお、SB 609 挖立柱建物跡（A～D期）の年代については、第16次調査の報告によれば、土師器坏では B II 類と B V 類が出土していること、須恵器坏では III 類と V 類が認められることから、9世紀後半代

表1 坏類の底部調整及び底径／口径、器高／口径比較一覧

	土師器坏 B類					須恵器坏									
	I類	II類	III類	IV類	V類	底径／口径	器高／口径	I類	II類	III類	IV類	V類	底径／口径	器高／口径	
多賀城跡 SK 2167 土壙	29.0% (449点)	29.0% (449点)			21% (268点)	0.37～0.58 0.26～0.40		1.1% (1点)	10.4% (10点)	45.8% (44点)		42.7% (41点)	0.42～0.55 0.37		
SK 1797 墓土		80.0% (1点)	10.0% (1点)		10.0% (1点)	0.43	0.37		15.4% (2点)	76.9% (10点)		7.7% (1点)			
SK 1800 墓土	8.2% (1点)	75.0% (9点)		8.2% (1点)	8.2% (1点)	0.31	0.37		41.2% (7点)	48.8% (10点)		0.42～0.58 0.36～0.37			

表2 土師器坏・壺、須恵器坏出土一覧

遺構名	土師器 壺					須恵器 壺					土師器 売		土師器 壺	
	B I	B II	B III	B IV	B V	I	II	III	IV	V	A	B	A	B
SB609A・拔取									2		0	4	0	26
SB609B・拔取	2							2			0	9	0	15
SB609C・拔取	2							2		1	0	3	1	13
SB1785・拔取						1	1				0	0	1	8
SB1786											0	0	0	2
SD1790	1					1		2		2	0	6	0	42
SD1792	5			1			6		1		3	19	3	75
SD1793	1					1	1				0	1	0	11
SK1794	1	1					4		1		0	20	2	57
SK1795											2	0	1	0
SK1796	1						1				3	7	2	20
SK1797	8	1	1		2	10		1			3	39	4	198
SK1798	1						4		2		0	19	0	58
SK1799	1	1				1	5	1			1	10	4	70
SK1800	1	9	1	1		7		10			0	32	0	52
SK1802	1			1							0	10	0	24
SK1803	1						5				4	6	4	47
SK1804							1		1			0	11	
SK1805	2										0	3	0	12
SK1806					1						0	1	0	5
SK1807											1	0	2	18
SK1813	1						2		2		0	11	3	18
L-II		4			2		2	9		5	9	42	13	158

の多賀城跡D群土器段階としていたが、今回の調査成果よりA～C期に関しては9世紀中葉を下限と改めたい。

ところで、今回実施した第136次調査区は、9世紀初めに多賀城南面に建設された古代都市の中央を東西に貫く東西大路に南面しており、西7・8道路間の区画にあたる。西側近接地で実施した第16次調査や同区画東端部で実施した第13次調査では10世紀前葉頃の遺構が確認されているのに対して、今回の調査区では出土遺物等より同時期の遺構の存在を積極的に示すものは認められなかった。調査区が小範囲であったことから詳細は明らかではないが、同じ区画の中であっても時期によって場の使われ方が異なっていたものと考えられる。

#### 参考文献

- 多賀城市埋蔵文化財調査センター『山王遺跡ほか』 多賀城市文化財調査報告書第29集 1992  
宮城県多賀城跡調査研究所『第62・63次調査』『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』1993



第19図 方格地割りと周辺の調査区



調査区全景（南より）

S B 609 据立柱建物柱穴



A期P 1断面（南より）



A期P 2、B期P 7断面（南より）



B期P 5断面（南より）



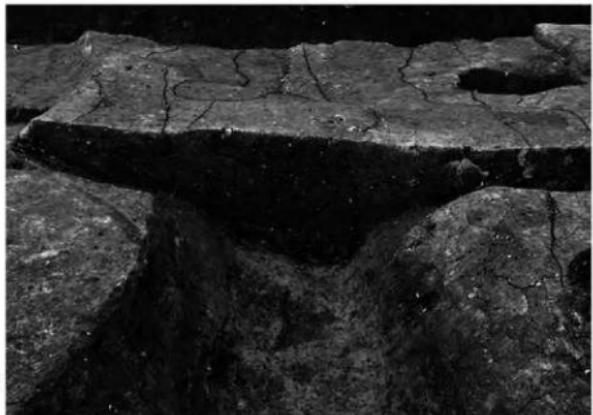
C期P 10断面（西より）



SB 1785 P 5 断面（北より）



SB 1787 P 1 断面（南より）



SD 1791 ほか断面  
(南より)



SK 1802 断面  
(調査区西壁)



1 a



1 b



2



3



4



5

1 須恵器蓋 第18図16 R23

2 須恵器壊 第18図6 R10

3 須恵器甕 第18図1 R5

4 畿内系土師器壊 (S D 1792) R28

5 † 壺 (S D 1797) R29

## VII 山王遺跡第137次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、宅地造成計画に伴うものである。平成25年4月5日に地権者より当該地区における宅地造成計画と埋蔵文化財との係わりについての協議書が提出された。計画では、開発の対象面積が約2,500m<sup>2</sup>と広範囲に及び、また、側溝を伴う南北道路内の排水管敷設のため掘削が深さ15～25m、そして擁壁設置のための掘削も1.1mに及ぶことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、業者と協議を行い、対象地内を対象に遺構の分布状況や遺構検出面までの深さを把握する目的で確認調査を実施することにした。10月5日に地権者より、調査に関わる発掘調査の依頼・承諾書の提出を受けて第137次調査として実施したものである。

調査は11月13日より開始し、対象地内に遺構の有無を確認するため8箇所の調査区（1～8区）を設定し、これらについて重機を使用して現代の水田耕作土（1層）を除去した。14日から遺構検出作業に入る。その結果、3区を除いた調査区で、X=189,460.000附近全域にわたり溝跡や土壤を発見した。29日、平面図作成のための基準点の設定を行う。12月10日、下層の状況を確認するために深掘りを行った。その結果、現地表下約90cmで黒色粘土層を確認し、水田耕作域が広がっていることが想定された。調査は各調査区から発見された遺構の写真撮影後、平面図の作成等を行い、13日に調査を終了した。

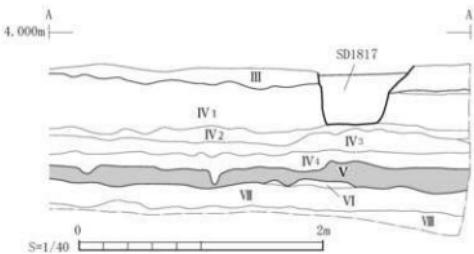
### 2 調査成果

#### （1）層序

今回の調査では、8層の堆積を確認した。なお、2区の東・南側で厚さ20～70cmの盛土が堆積する。

I 層：調査区全域で確認した黒褐色粘土で、厚さは20cm前後である。現代の水田耕作





第3図 調査区北側断面

土である。

II 層：調査区2区の西半部で確認した。酸化鉄砂を多く含んだ黒褐色土と暗オリーブ褐色粘土である。

部分的に灰白色火山灰を層状もしくはブロック状に堆積している。溝跡の一部は本層に覆われている。

III 層：砂を含んだ黄褐色粘土である。厚さは20～30cmである。古代の遺構検出面となっている。

IV 1層：黄褐色粘土で、厚さは35～45cmである。

IV 2層：灰オリーブ砂で、厚さは5～13cmである。砂の粒子は細かく、しまっている。

IV 3層：黒褐色粘土で、厚さは7～18cmである。スクモ、砂などを含んでいる。

IV 4層：オリーブ黒色粘土で、厚さは9～23cmである。

V 層：黒色粘土で、厚さは6～21cmである。古墳時代前期頃の水田土壤と見られる。

VI 層：凝灰岩ブロックが層状に堆積する灰オリーブ土で、厚さは3～5cmである。

VII 層：粒子の粗い砂を主体とした黒色土で、厚さは10～20cmである。

VIII 層：粒子の粗い砂を主体とした灰色土で、今回検出した層序の最下層である。

## (2) 発見遺構

3区を除いた各調査区のIII層上面で遺構を発見した。検出のみにとどめているが、一部の遺構については断ち割りを行っている。

### S D 1816 溝跡（第4・5・6・7図）

【位置】1・2・6区で発見した、南北方向の溝跡である。調査区西側でSD 1817・1818、東側でSD 1874・1875と接続する。

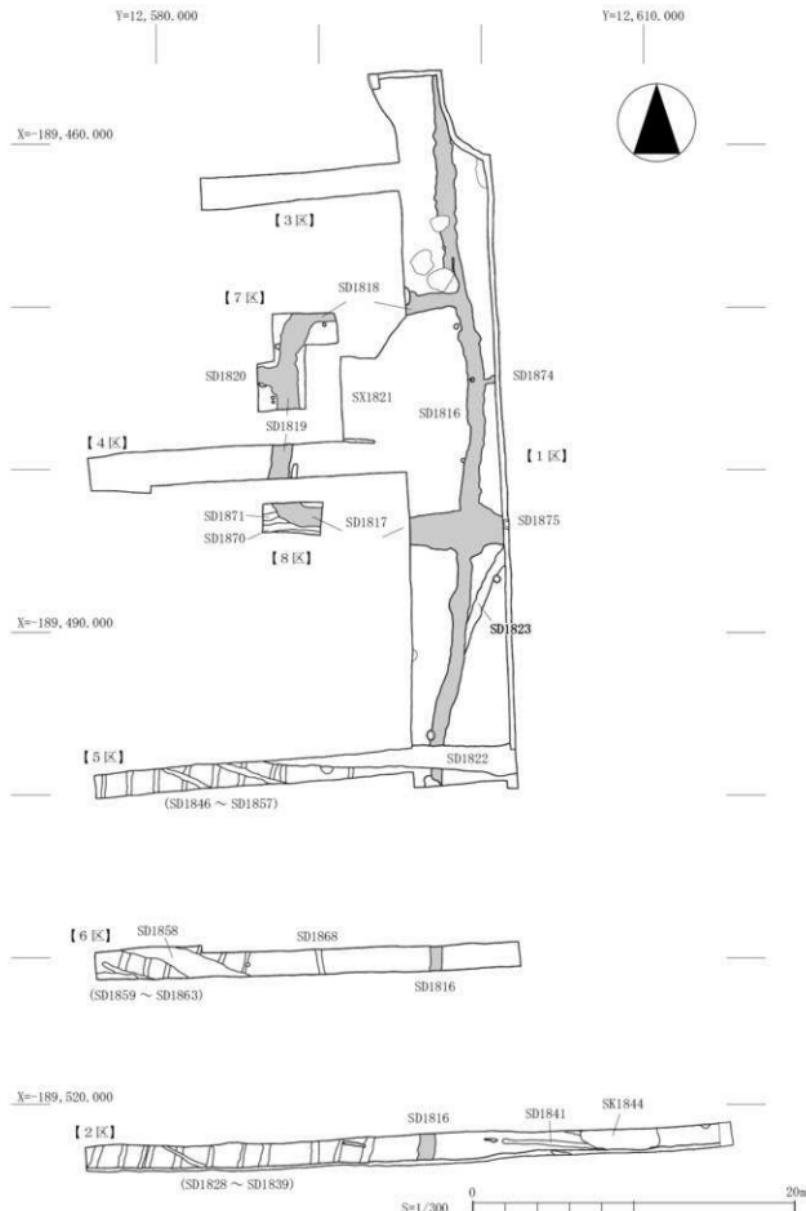
【重複】SD 1822・1823、SK 1826・1827と重複し、SD 1822、SK 1826・1827より古く、SD 1823より新しい。

【方向・規模】溝の方向は北に向かって緩やかに湾曲している。溝の北・南側は調査区外に延びて行く。長さは南北約67.3m以上で、幅0.4～1.2mである。

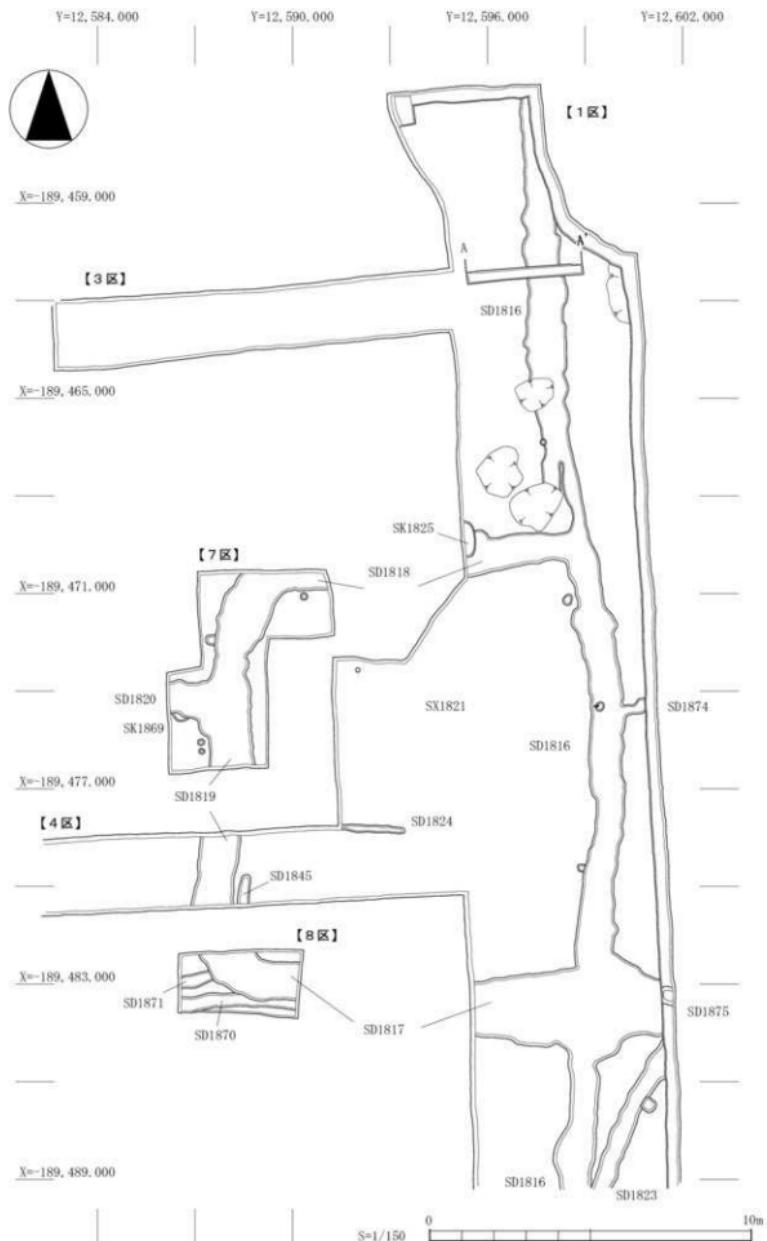
【埋土】灰白色火山灰をブロック状に含んだ黄褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

### S D 1817 溝跡（第4・5図）



第4図 遺構配置図



第5図 SX 1821 区画施設ほか平面図

【位置】調査区1・8区で発見した。東西方向の溝跡である。

【重複】S D 1870・1871と重複し、これらより新しい。

【方向・規模】方向は西で約4度北に偏している。長さ142m以上で、幅1.7～2.1mである。

【埋土】灰白色火山灰を含んだ黄褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1818 溝跡（第4・5図）

【位置】調査区1・7区で発見した。東西方向の溝跡である。東側でS D 1816と接続する。

【重複】S K 1825と重複し、これより古い。

【方向・規模】方向は東約5度北に偏している。長さは約11.4m以上で、幅0.8～1.4mである。

【埋土】灰白色火山灰をブロック状に含んだ黒褐色土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1819 溝跡（第4・5図）

【位置】調査区4・7・8区で発見した。南北方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は北で約4度東に偏している。長さ約13.1m以上で、幅0.9～1.5mである。

【埋土】灰白色火山灰を含んだ黄褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1820 溝跡（第4・5図）

【位置】7区で発見した、S D 1820に接続する東西方向の溝跡である。

【重複】S K 1869と重複し、これよりも新しい。

【方向・規模】方向は西で約9度北に偏している。規模は長さ1.2m以上、幅0.95～1.25mである。

【埋土】灰白色火山灰を含んだ黄褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1822 溝跡（第4・7図）

【位置】1区の南壁際から5区にかけて発見した。東西方向の溝跡である。

【重複】S D 1816・1854～1856、S K 1857と重複し、これより新しい。

【方向・規模】方向は西で約1度北に偏している。溝の東・西側は調査区外に延びる。長さは15m以上である。幅約1.8mである。

【埋土】酸化鉄を含んだオリーブ褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1823 溝跡（第4・5・7図）

【位置】1区の中央部東側で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】S D 1816と重複し、これより古い。

【方向・規模】方向は北で約25度東に偏している。長さは6m以上で、幅35～65cmである。

【埋土】オリーブ黒色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1824 溝跡（第4・5図）

【位置】1区の北西側で発見した、東西方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は西で約3度北に偏している。西側は調査区外に延びる。長さは1.9m以上で、幅14~23cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S K 1825 土壙（第4・5図）

【位置】1区の北西壁際で発見した。

【重複】S D 1818と重複し、これより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は遺構の延びが西側に及んでいるため、全容は不明だが、方形と見られる。規模は長軸約1.1m、短軸30cm以上である。

【埋土】酸化鉄や地山ブロックをわずかに含むオリーブ褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S K 1826 土壙（第4・7図）

【位置】1区の南西際で発見した。

【重複】S D 1816と重複し、これより新しい。

【平面形・規模】平面形は梢円形である。規模は長軸約60cm、短軸約50cmである。

【埋土】黄褐色土を含んだ黒褐色土である。

【遺物】出土していない。

#### S K 1827 土壙（第4・7図）

【位置】1区の南端部南壁際で発見した。

【重複】S D 1816と重複し、これより新しい。

【平面形・規模】平面形は遺構の延びが南側に及んでいるため、全容は不明である。規模は長軸約1m、短軸40cm以上である。

【埋土】オリーブ褐色土をブロック状に含んだオリーブ黒色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1828 溝跡（第4・6図）

【位置】2区の西端部で発見した、南北方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は北で約18度東に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ1.7m以上で、幅45~50cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1829 溝跡（第4・6図）

【位置】2区の西端部、S D 1828の東側で発見した、南北方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は北で約13度東に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ1.6m以上で、幅30~35cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1830 溝跡（第4・6図）

【位置】2区の西側で発見した、南北方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は北で約13度東に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ1.6m以上で、幅22~26cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1831 溝跡（第4・6図）

【位置】2区の西側でS D 1830溝跡と並行する、南北方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は北で約14度東に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ1.6m以上で、幅28~33cmである

【埋土】黒褐色粘土である

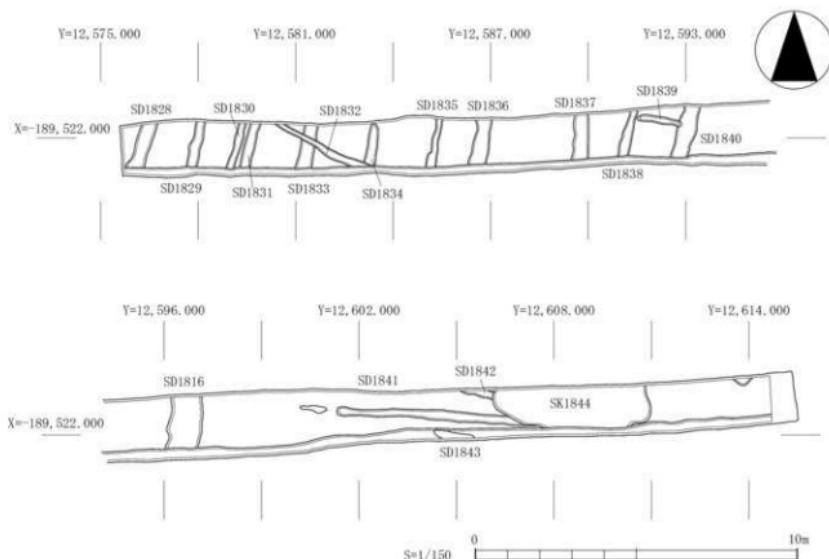
【遺物】出土していない。

#### S D 1832 溝跡（第4・6図）

【位置】2区の西側で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】S D 1833・1834と重複し、これらより新しい。

【方向・規模】方向は西で約28度北に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ3.2m以上で、幅13~26cmである。



第6図 2区遺構平面図

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1833 溝跡（第4・6図）

【位置】2区の西側で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】S D 1832と重複し、これより古い。

【方向・規模】方向は北で約11度東に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ1.6m以上で、幅40～50cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1834 溝跡（第4・6図）

【位置】2区の西側で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】S D 1832と重複し、これより古い。

【方向・規模】方向は北で約8度東に偏している。溝の南側は調査区外に延びる。長さ1.5m以上で、幅30～35cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1835 溝跡（第4・6図）

【位置】2区の西側で発見した、南北方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は北で約9度東に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ1.5m以上で、幅20～30cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1836 溝跡（第4・6図）

【位置】2区の西側で発見した、南北方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は北で約8度東に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ1.6m以上で、幅40～50cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1837 溝跡（第4・6図）

【位置】2区の中央部で発見した、南北方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は北で約5度東に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ1.5m以上で、幅28～35cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1838 溝跡（第4・6図）

【位置】2区の中央部で発見した、南北方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は北で約12度東に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ1.6m以上

で、幅 20 ~ 35cm である。

【埋土】 黒褐色粘土である。

【遺物】 出土していない。

#### S D 1839 溝跡 (第4・6図)

【位置】 2区の中央部で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】 S D 1840 と重複し、これより新しい。

【方向・規模】 方位は西で約 8 度北に偏している。長さ 1.6 m、幅 20 ~ 35cm である。

【埋土】 黒褐色粘土である。

【遺物】 出土していない。

#### S D 1840 溝跡 (第4・6図)

【位置】 2区の中央部で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】 S D 1839 と重複し、これより古い。

【方向・規模】 方向は北で約 9 度東に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ 1.7 m 以上で、幅 45 ~ 60cm である。

【埋土】 黒褐色粘土である。

【遺物】 出土していない。

#### S D 1841 溝跡 (第4・6図)

【位置】 2区の東側で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】 S K 1844 と重複し、これより古い。

【方向・規模】 方向は西で約 4 度北に偏している。溝の東側は S K 1844 に破壊されている。長さ 7.3 m 以上、幅 45 ~ 55cm である。

【埋土】 黒褐色粘土である。

【遺物】 出土していない。

#### S D 1842 溝跡 (第4・6図)

【位置】 2区の東側の南壁際で発見した、東西方向の溝跡である。

【方向・規模】 方向は西で約 17 度北に偏している。溝の南側は調査区外に延びる。長さ 90cm 以上、幅 25cm である。

【埋土】 黒褐色粘土である。

【遺物】 出土していない。

#### S D 1843 溝跡 (第4・6図)

【位置】 2区の東側で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】 S K 1844 と重複し、これより古い。

【方向・規模】 方向は西で約 17 度北に偏している。溝の東側は S K 1844 に破壊され、西側は調査区外に延びる。長さ 70cm 以上で、幅 15cm である。

【埋土】 黒褐色粘土である。

【遺物】 出土していない。

#### S K 1844 土壙 (第4・6図)



第7图 5·6区进水平面图

【位置】 2区の東側で発見した。

【重複】 S D 1841・1843と重複し、これらより新しい。

【平面形・規模】 平面形は遺構の延びが北・南側の調査区外に及んでいるため不明である。規模は長辺4.3m以上、短辺1.5m以上である。

【埋土】 暗灰黄色粘土をブロック状に含んだにぶい黄色土である。

【遺物】 出土していない。

#### S D 1845 溝跡（第4・5図）

【位置】 4区のS D 1820の東側で発見した、南北方向の溝跡である。

【方向・規模】 方向は北で約7度東に偏している。溝の南側は調査区外に延びる。長さ90cm以上で、幅30～35cmである。

【埋土】 黒褐色粘土である。

【遺物】 出土していない。

#### S D 1846 溝跡（第4・7図）

【位置】 5区の西端部で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】 なし

【方向・規模】 方向は北で約2度東に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ1.5m以上、幅23cmである。

【埋土】 黒褐色粘土である。

【遺物】 出土していない。

#### S D 1847 溝跡（第4・7図）

【位置】 5区の西半部で発見した、南北方向の溝跡である。

【方向・規模】 方向は北で約3度東に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ1.5m以上、幅25～35cmである。

【埋土】 黒褐色粘土である。

【遺物】 出土していない。

#### S D 1848 溝跡（第4・7図）

【位置】 5区の西半部で発見した、南北方向の溝跡である。

【方向・規模】 方向は北で約1度東に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ1.4m以上で、幅30～35cmである。

【埋土】 黒褐色粘土である。

【遺物】 出土していない。

#### S D 1849 溝跡（第4・7図）

【位置】 5区の西半部で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】 S D 1850・1851と重複し、これらより新しい。

【方向・規模】 方向は西で約25度北に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ28m以上で、幅25～35cmである。

【埋土】 黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1850 溝跡（第4・7図）

【位置】5区の西半部で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】S D 1849と重複し、これより古い。

【方向・規模】方向は北で約13度東に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ1.6m以上で、幅25~40cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1851 溝跡（第4・7図）

【位置】5区の中央部で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】S D 1852~1855と重複し、これらより新しい。

【方向・規模】方向は西で約19度北に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ3.7m以上で、幅18~42cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1852 溝跡（第4・7図）

【位置】5区の西半部で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】S D 1849・1851と重複し、これらより古い。

【方向・規模】方向は北約7度東に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ1.5m以上で、幅35~40cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1853 溝跡（第4・7図）

【位置】5区の中央部で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】S D 1851と重複し、これより古い。

【方向・規模】方向は北で約10度東に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ1.4m以上で、幅25~40cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1854 溝跡（第4・7図）

【位置】5区の中央部で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】S D 1822・1851と重複し、これらより古い。

【方向・規模】方向は北で約15度東に偏している。溝の北・南側はS D 1822・1851に破壊されている。長さ90cm以上で、幅25~30cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1855 溝跡（第4・7図）

【位置】 5区の中央部 S D 1849 の東側で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】 S D 1822・1851 と重複し、これらより古い。

【方向・規模】 方向の方向は北で約2度東に偏している。溝の北・南側は S D 1822・1851 に破壊されている。長さ1m以上で、幅20~28cmである。

【埋土】 黒褐色粘土である。

【遺物】 出土していない。

#### S D 1856 溝跡 (第4・7図)

【位置】 5区の東側で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】 S D 1822 と重複し、これより古い。

【方向・規模】 方向は北で約1度東に偏している。溝の北側は S D 1822 に破壊され、南側は調査区外に延びる。長さ70cm以上で、幅25~30cmである。

【埋土】 黒褐色粘土である。

【遺物】 出土していない。

#### S K 1857 土壙 (第4・7図)

【位置】 5区の東側で発見した。

【重複】 S D 1822 と重複し、これより古い。

【平面形・規模】 S D 1822 に破壊されているため、全容は不明だが、橢円形と見られる。規模は長軸75cm以上、短軸45cm以上である。

【埋土】 黒褐色粘土である。

【遺物】 出土していない。

#### S D 1858 溝跡 (第4・7図)

【重複】 S D 1861~1866 と重複し、これらより新しい。

【方向・規模】 方位は西で約22度北に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ5m以上で、幅11~15mである

【埋土】 オリーブ褐色粘土である。

【遺物】 出土していない。

#### S D 1859 跡 (第4・7図)

【位置】 6区の西端部で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】 S D 1860 と重複し、これより新しい。

【方向・規模】 方向は西で約2度北に偏している。溝の東・西側は調査区外に延びる。長さ25m以上で、幅45cm以上である。

【埋土】 黒褐色粘土である。

【遺物】 出土していない。

#### S D 1860 溝跡 (第4・7図)

【位置】 6区の西端部で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】 S D 1859・1861 と重複し、前者より古く、後者より新しい。

【方向・規模】 方向は西で約21度北に偏している。溝の東側は調査区外に延びる。長さは2.9m以上で、

幅25cm以上である。

【埋土】灰白色火山灰ブロックを含んだ黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1861溝跡（第4・7図）

【位置】6区の西側で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】S D 1858・1860と重複し、これらより古い。

【方向・規模】方向は北で約17度東に偏している。溝の両端はS D 1858・1860によって破壊されている。長さ1.1m以上で、幅45～50cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1862溝跡（第4・7図）

【位置】6区の西側で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】S D 1858・1860と重複し、これらより古い。

【方向・規模】方向は北で約9度東に偏している。溝の両端はS D 1858・1860によって破壊されている。長さ1.1m以上で、幅30～35cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1863溝跡（第4・7図）

【位置】6区の西側で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】S D 1858と重複し、これより古い。

【方向・規模】方向は北で約13度東に偏している。溝の北側はS D 1853に破壊され、南側は調査区外に延びる。長さ90cm以上で、幅25cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1864溝跡（第4・7図）

【位置】6区の西側で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】S D 1858と重複し、これより古い。

【方向・規模】方向は北で約28度東に偏している。溝はS D 1853に破壊され、北側は調査区外に延びる。長さ50cm以上で、幅20cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1865溝跡（第4・7図）

【位置】6区の西側で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】S D 1858と重複し、これより古い。

【方向・規模】方向は北で約18度東に偏している。溝はS D 1853に破壊され、北側は調査区外に延びる。長さ70cm以上で、幅25～30cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1866 溝跡（第4・7図）

【位置】6区の西側で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】S D 1858と重複し、これらより古い。

【方向・規模】方向は北で約12度東に偏している。溝はS D 1858に破壊され、北側は調査区外に延びる。長さ1.2m以上で、幅15～25cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S D 1867 溝跡（第4・7図）

【位置】6区の中央部で発見した、南北方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は北で約9度西に偏している。溝の北・南側は調査区外に延びる。長さ1.5m以上で、幅30～40cmである。

【埋土】黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### S K 1869 土壙（第4・5図）

【位置】7区の南西側で発見した。

【重複】S D 1820と重複し、これより古い。

【平面形・方向・規模】S D 1820に破壊されているため、全容は不明である。規模は長軸50cm以上、短軸20cm以上である。

【埋土】黒褐色粘土である。

#### S D 1870 溝跡（第4・5図）

【位置】8区南側で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】S D 1819と重複し、これより古い。

【方向・規模】方向は東で約1度北に偏している。溝の東・西側は調査区外に延びる。長さ3.5m以上で、幅40～45cmである。

【埋土】黒褐色粘土である

【遺物】出土していない。

#### S D 1871 溝跡（第4・5図）

【位置】8区西側で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】S D 1820と重複し、これより古い。

【方向・規模】方向は東で約23度北に偏している。溝はS D 1820に破壊され、西側は調査区外に延びる。長さ90cm以上で、幅35～45cmである。

【埋土】黒褐色粘土である

【遺物】出土していない。

### 3 まとめ

(1) 調査区内に設定した8箇所内、7箇所で遺構を発見した。Ⅲ層上面で区画施設1基、溝跡50条、土

壙6基、この約90cm下では黒色粘土層を確認した。本層については、周辺調査の成果より古墳時代前期頃の水田耕作土と見られる。

(2) SD 1816の西側に接続するSD 1817～1819には埋土上面に灰白色火山灰が堆積していることから、同時期に機能していたことが明らかである。その形状は方形を呈し、内側で東西9.8～10.5m、11.3～12.4mを計る(SX 1821)。このような形状は、内部を区画するものと考えられるが、関連する遺構は発見されなかったので、性格については不明である。

(3) 主な遺構の年代はSD 1816～1820、SD 1816に接続するSD 1874・1875、SD 1819に接続するSD 1820には10世紀前葉頃に降下した灰白色火山灰を含んでいるため、これらは降下以前に機能していたものと見られる。また、SD 1816と重複するSD 1822・1823は、重複関係より前者は新しいことから灰白色火山灰降下以降、後者は古いことからそれ以前である。SD 1858については、方向や埋土がSD 1822と類似することから、同時期と理解したい。他の溝跡について見ると、方向と重複関係から、A群：東西方向の溝(SD 1832・1839・1841～1843・1849・1851・1859・1860)とB群：南北方向の溝(SD 1828～1831・1833～1838・1840・1846～1848・1850・1852・1853～1856・1861～1864・1866・1867)に大別できる。重複関係からA群が新しい。年代については、A・B群の一部には、灰白色火山灰を含む層に覆われるものもあることから灰白色火山灰降下以前の年代が考えられる。なお、SD 1859については、灰白色火山灰に覆われるSD 1860より新しいことから灰白色火山灰降下以降である。SK 1825～1827・SK 1869は、重複関係からSK 1825はSD 1818より新しく、SK 1826・1827はSD 1816より新しい。SK 1869はSD 1820より古いことが判明している。前者の遺構の年代は灰白色火山灰降下以降、後者はそれ以前である。SK 1844は重複関係からA群より新しいことが判明しており、年代は灰白色火山灰降下以降である。

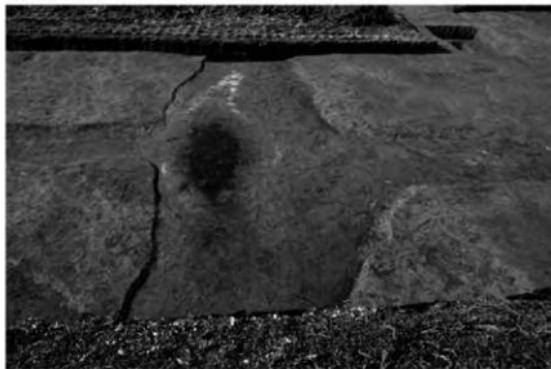


1区全景（北より）



1・5区SD 1822検出状況（東より）

写真図版 1



1区 SD 1817 検出状況(西より)



1区 SD 1818 検出状況(西より)



4区 SD 1819 検出状況(南より)

写真図版2



2区遺構検出状況（西より）



2区遺構検出状況（東より）



6区遺構検出状況（西より）

写真図版3



6区東半部遺構検出状況  
(西より)



7区SD 1819検出状況(南より)



8区SD 1817検出状況(東より)

写真図版4

## VIII 西沢遺跡第24調査

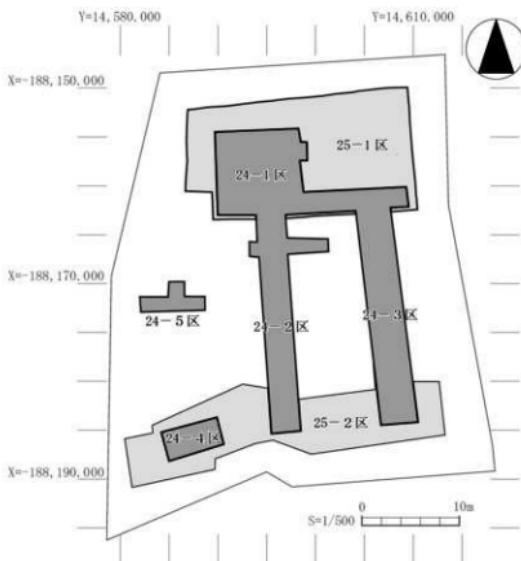
### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、集合住宅新築に伴う確認調査である。平成25年7月、地権者より当該区における集合住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、計画範囲の南側約3分の2の範囲で盛土、北側約3分の1の範囲で切土を行い、北側に基礎工事最深87cmの掘削を伴う建物、南側には道路と擁壁を建築することとなっていた。本調査区の西側隣接地の調査成果から、地表面から遺構検出面までの深さは30～90cmであることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺構の分布と密度を確認するための調査を実施することに決定した。その後、8月6日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

調査区は、建物部分を東西に横断する1区、調査区を南北に縦断する2、3区、道路部分の西側を確認する4区、調査区西側の切土部分の5区の5箇所設定した。8月21日より調査を開始し、重機を使用して現代の耕作土を除去したところ、Ⅲ・Ⅳ層上面で竪穴住居跡や溝跡などを確認した。

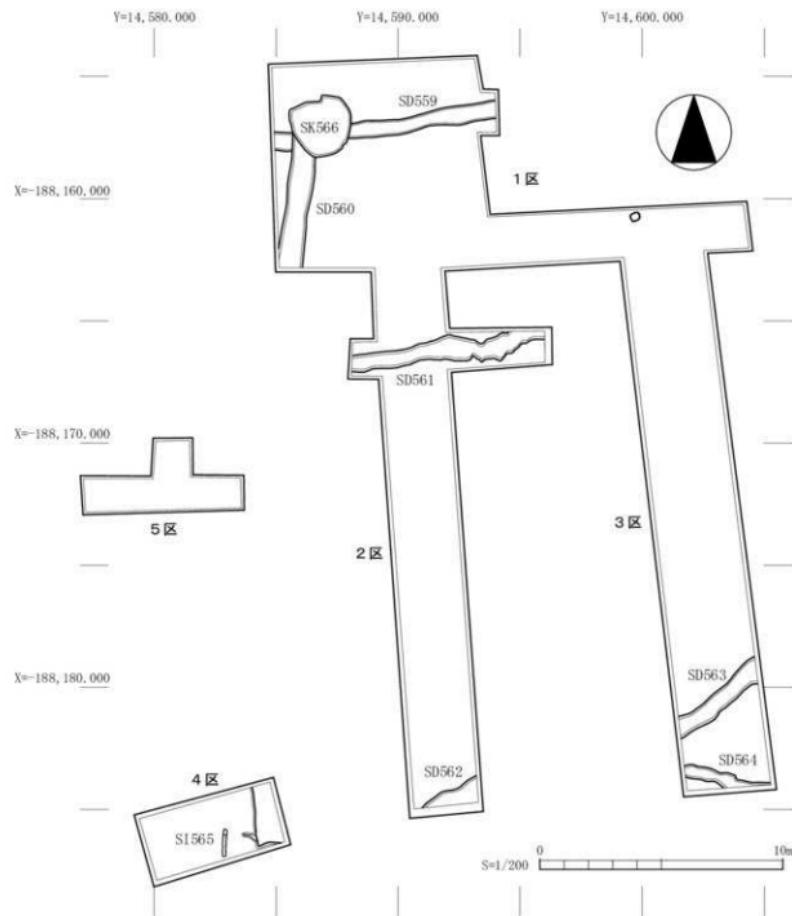


第1図 調査区位置図



第2図 調査敷地と調査範囲

22日から精査を開始し、SD559溝跡の伸び方を確認するために1区を拡張した。その後、遺構の精査と写真撮影を行ふ、10月1日に埋め戻して調査を終了した。



第3図 遺構配置図

## 2 調査成果

### (1) 層序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。

I 層：調査区全域に堆積する現代の表土で、厚さは1区で15cm～60cmである。2・3区南側の斜面

下方では70cmとより厚くなる。

II 1層：調査区全域に堆積する褐色土で、厚さは15cmである。

II 2層：2・3区南側に堆積する暗褐色土で、厚さは25cmである。

III 層：2・3区南側に堆積するIV層の明黄褐色の岩盤をブロック状に多量に含む黄褐色粘土層で、  
厚さは20cmである。調査区南側の斜面下方の一部では、この層が遺構検出面となっている。

IV 層：基盤となる岩盤層であり、北側は風化が激しい。調査区北側の斜面上方から中腹では、この層  
が遺構検出面となっている。

### (2) 発見遺構と遺物

#### S I 565 穫穴住居跡（第3図）

【位置】4区全域で発見した。

【検出面】III・IV層上面で検出した。

【遺存状況】良好であり、東辺とカマドの一部以外は調査区外である。

【平面形・方向】平面形は方形と考えられる。方向は東辺で測ると北で1度西に偏している。

【規模】東西5.0m以上、南北4.5m以上である。

【壁の状況】地山を壁としている。

【カマド】東辺の調査区南東隅に付設され、煙道と北側壁と考えられるIV層の岩盤をブロック状に含む  
褐色粘質土の張り出しを確認した。

【埋土】IV層の岩盤を小ブロック状にやや多く含む褐色粘質土である。

【遺物】検出面から土師器壊・甕の破片が出土した。また、カマド前面の埋土中に長さ1.1m、幅15cm  
の凝灰岩製の角柱状石製品が横位で埋まっているのを確認した。

#### S D 559 溝跡（第3図）

【位置】1区北西側の拡張部で発見した東西方向の溝跡であり、東側と西側は調査区外へ延びている。

【検出面・重複】IV層上面で検出した。S D 560・S X 566と重複し、それらよりも古い。

【方向・規模】方向は東で約9度北に偏している。規模は長さ9.1m以上、上幅90cmである。

【埋土】IV層の岩盤がブロック状にやや多く混入する褐色土である。

【遺物】検出面から砥石の破片が出土している。

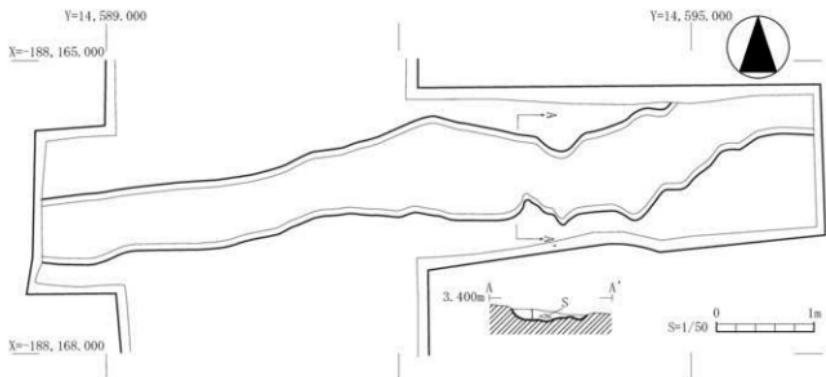
#### S D 560 溝跡（第3図）

【位置】1区北西側の拡張部で発見した南北方向の溝跡であり、南側は調査区外へ延びている。

【検出面・重複】IV層上面で検出した。S D 559・S X 566と重複し、S X 566よりも古く、S  
D 559よりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約10度東に偏している。規模は長さ5.5m以上、上幅0.9～1.1mである。

【埋土】黄褐色土であり、埋土上部にこぶし大の丸礫が並ぶ。



第4図 SD 561 平面・断面図

【遺物】検出面から平瓦の破片が出土している。

#### SD 561 溝跡（第3・4図）

【位置】2区北側で発見した東西方向の溝跡であり、東側と西側は調査区外へ延びている。

【検出面】IV層上面で検出した。

【方向・規模】方向は蛇行しながら東で約9度北に偏している。規模は長さ8.1m以上、上幅0.7～1.1m、深さ13cmである。

【埋土】明褐色灰色をブロック状に少量含む褐色粘質土であり、こぶし大の丸礫が多量に混入している。

【遺物】検出面から土師器甕の破片が出土した。

#### SD 562 溝跡（第3図）

【位置】2区南端で発見した東西方向の溝跡であり、北辺以外は調査区外に延びている。

【検出面】III層上面で検出した。

【方向・規模】方向は東で約57度北に偏している。規模は長さ3.6m以上、上幅1.0m以上である。

【埋土】褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

#### SD 563 溝跡（第3図）

【位置】3区南側で発見した東西方向の溝跡であり、東側と西側は調査区外へ延びている。

【検出面】III層上面で検出した。

【方向・規模】方向は東で約52度北に偏している。規模は長さ3.9m以上、上幅69～79cmである。

【埋土】黄褐色粘土である。

【遺物】検出面から土師器甕が出土している。

#### SD 564 溝跡（第3図）

【位置】3区南端で発見した東西方向の溝跡であり、東側と西側は調査区外へ延びている。

【検出面】Ⅲ層上面で検出した。

【方向・規模】方向は東で約11度南に偏している。規模は長さ3.6m以上、上幅63cmである。

【埋土】Ⅳ層の小礫をブロック状に少量含むオリーブ褐色である。

【遺物】検出面から土師器壺、須恵器壺の破片が出土している。

### 3 まとめ

今回の調査では、竪穴住居跡と溝跡などを発見した。遺構の検出でとどめており、灰白色火山灰の混入も認められないことから、年代を推定できる手がかりはほとんど得られていないが、S I 565 竪穴住居跡は方形と考えられ、検出面からではあるが土師器の壺や壺の破片が出土していることから、古代のものと考えられる。それ以外の遺構の年代については不明である。



1区遺構検出状況（北西より）



2区遺構検出状況  
(南西より)



3区遺構検出状況  
(南西より)

写真図版 1



4区遺構検出状況（北東より）



5区状況（東より）



SD 561 検出状況（東より）

写真図版 2

## IX 高崎遺跡第97次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、留ヶ谷一丁目地内における駐車場および物置の建設に伴うものである。平成25年9月、地権者より当該区における駐車場・物置建設設計図と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、駐車場建設に際して最大1.7mの掘削を伴うことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺跡保存の協議を行ったものの、申請どおりの工法で着手することに決定したことから、本発掘調査を実施することになった。11月1日に地権者から発掘調査に関する依頼・承諾の提出を受け、11月26日より現地調査を開始した。

はじめに、重機による住宅建築部分の表土除去を行い、現表土40cm下の黄褐色粘質土(Ⅲ層)上面でSB 1767掘立柱建物跡やSD 1768溝跡を確認した。11月27日より作業員を動員し、Ⅲ層上面の精査およびSB 1767、SD 1768の



第1図 調査区位置図

埋土掘り下げを行った。29日に平面図作成を行い、12月3日に調査区の全景写真を撮影した。写真撮影終了後、調査区西壁の断面図を作成するとともに調査器材の搬出を行い、本発掘調査的一切を終了した。

### 2 調査成果

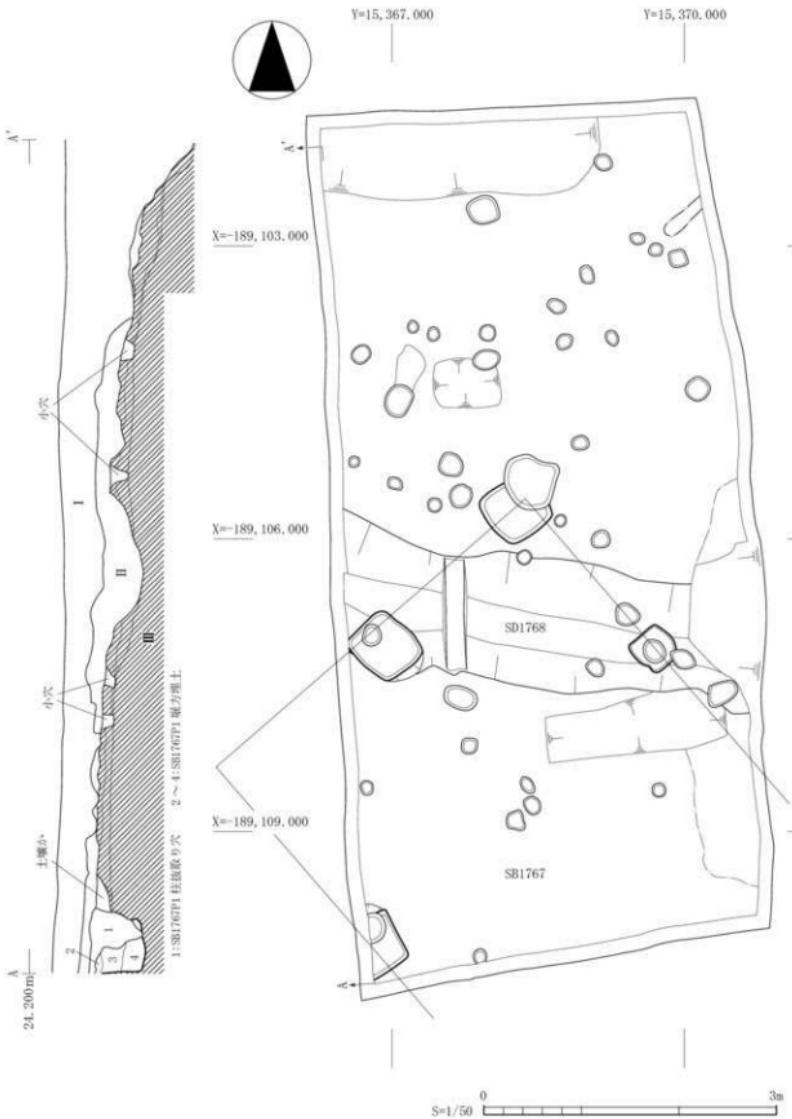
#### (1) 層序 (第2図)

今回の調査では、現在の表土以下3層の堆積を確認した。

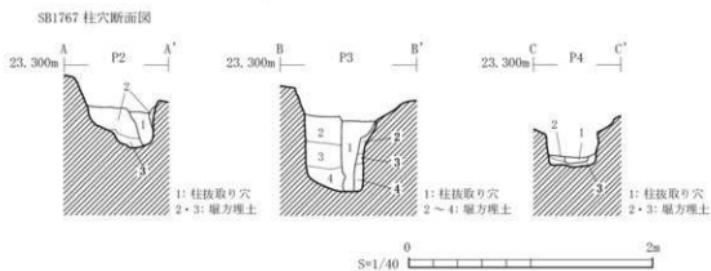
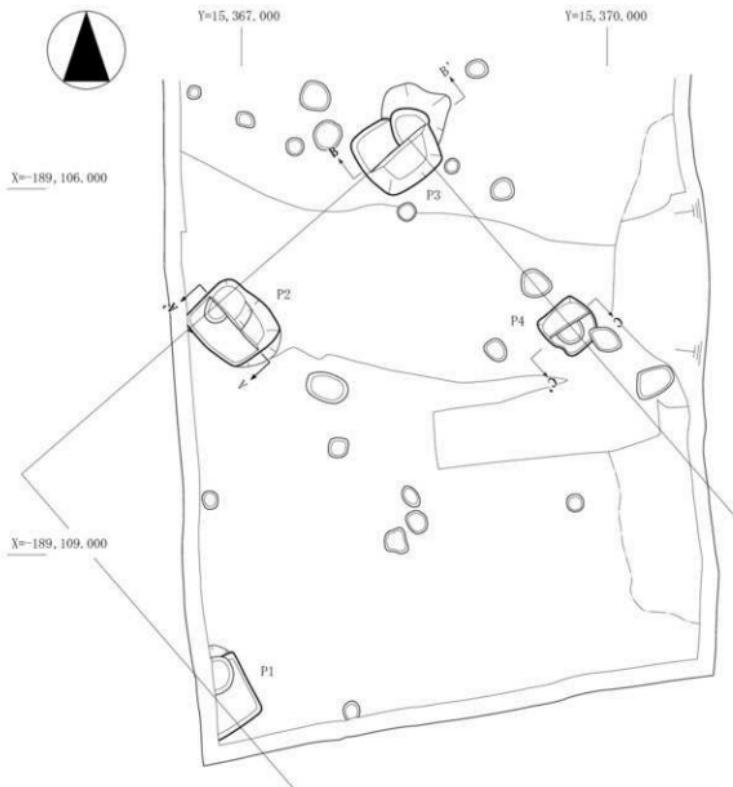
I層：現代の造成による盛土である。北側丘陵斜面に向かって厚く堆積しており、厚さは南側で約30cm、北端部で約1.3mである。

II層：炭化物粒、焼土粒が混入する暗褐色粘質土である。I層と同様に北側丘陵斜面に向かって厚く堆積しており、厚さは南側で約10cm、北側で約20cmである。

III層：黄褐色粘質土または褐色粘質土であり、古代の遺構検出面である。



第2図 遺構位置図



第3図 SB 1767 平面・断面図

## (2) 発見遺構と遺物

今回の調査では、Ⅲ層上面で掘立柱建物跡や溝跡、土壌などを発見した。以下、発見した遺構について記載する。

### S B 1767 掘立柱建物跡（第3図）

【位置】調査区南半部で発見した。

【桁行・梁行】桁行2間以上、梁行2間の南北棟建物跡である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は4基（P 1～4）検出しており、全ての柱穴で柱抜取り穴を確認した。

【重複】S D 1768 と重複しており、それよりも古い。

【方向・規模】方向は梁行で測ると、北で約52度10分東に偏している。建物の規模は、梁行が約5.2mと推測され、柱間は桁行が約2.1m、梁行が2.15mである。

【掘方】平面形は方形を基調とし、規模はP 3で測ると長辺65cm、短辺60cm、深さ85cmである。埋土は暗褐色粘質土がブロック状に混入する明褐色粘質土または明褐色粘質土がブロック状に混入する暗褐色粘質土が主体であり、P 3ではこれらが互層状に埋められている。

【柱抜取り穴】柱抜取り穴は、P 1・4が柱穴を大きく壊しているが、P 3・4は柱痕跡状に認められることから、柱のあたり痕跡を残すものと考えられる。埋土は焼土粒や炭化物粒が混入する褐色粘質土が主体である。

【遺物】柱抜取り穴から土師器坏・甕が出土している。

### S D 1768 溝跡（第3図）

【位置・形態】調査区中央部で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】S B 1767 と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は、西で約9度北に偏している。規模は長さ4.2m以上、上幅1.1～1.4m、深さは西壁で約40cmである。

【壁・底面】壁はほとんど凹凸がなく、非常に緩やかに立ち上がる。底面も起伏はほとんどなく、東に向かって低くなっている。

【埋土】II層が直接堆積している。

【遺物】土師器坏・甕、須恵器瓶・甕が出土している。

## まとめ

- 1 今回の調査では、掘立柱建物跡1棟、溝跡1条を発見した。
- 2 このうち、S B 1767 掘立柱建物跡柱抜取り穴から、土師器坏・甕が出土している。磨滅が著しくA・B類の判別は困難であるが、古代の範疇に含まれるものである。柱穴の形状についても、周辺地区で確認されている古代の掘立柱建物跡と近似していることから、およそ同様の年代と考えられる。



調査区全景（北より）

S B 1767 柱穴断面



P 1断面（東より）



P 2断面（北より）



P 3断面（東より）

## 報告書抄録

ふりがな 書名	たがじょうしないのいせき 2 多賀城市内の遺跡 2
副書名	平成 25 年度発掘調査報告書 新田遺跡 山王遺跡 西沢遺跡 高崎遺跡
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 114 集
編著者名	武田健市、石川俊英、小原一成
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒 985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目 27-1 Tel: 022-368-0134
発行年月日	西暦 2014 年 3 月 31 日

所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新田遺跡 (第 95 次)	みやぎけん多賀城市新田字西後 14 番、43 番の 1 の一部	042099	18012	38 度 17 分 34 秒	140 度 57 分 46 秒	20130625 ~ 20130810	374m <sup>2</sup>	宅地造成
山王遺跡 (第 126 次)	みやぎけん多賀城市 山王字下部 11-10, 12-9	042099	18013	38 度 17 分 45 秒	140 度 58 分 54 秒	20130410 ~ 20130427	24m <sup>2</sup>	個人住宅 建設
山王遺跡 (第 128 次)	みやぎけん多賀城市 山王字中三 42-15	042099	18013	38 度 17 分 39 秒	140 度 58 分 47 秒	20130510 ~ 20130628	38m <sup>2</sup>	個人住宅 建設
山王遺跡 (第 129 次)	みやぎけん多賀城市 山王字西町浦 61 番、1、62 番 3	042099	18013	38 度 17 分 45 秒	140 度 58 分 25 秒	20130508 ~ 20130615	67m <sup>2</sup>	個人住宅 建設
山王遺跡 (第 136 次)	みやぎけん多賀城市 山王字山王三区 56-57 地内	042099	18013	38 度 17 分 42 秒	140 度 58 分 49 秒	20131001 ~ 20131204	60m <sup>2</sup>	個人住宅 建設
山王遺跡 (第 137 次)	みやぎけん多賀城市山王字山王 四区 195-2, 196-2, 197-2 地内	042099	18013	38 度 17 分 33 秒	140 度 58 分 37 秒	20131106 ~ 20131213	500m <sup>2</sup>	宅地造成
西沢遺跡 (第 24 次)	みやぎけん多賀城市 浮島字高原 150 番	042099	18017	38 度 18 分 14 秒	140 度 59 分 59 秒	20130821 ~ 20131002	347m <sup>2</sup>	個人住宅 建設
高崎遺跡 (第 97 次)	みやぎけん多賀城市 留ヶ谷一丁目 22-11	042099	18018	38 度 17 分 44 秒	141 度 00 分 33 秒	20131126 ~ 20131205	36m <sup>2</sup>	駐車場 及び 物置建設

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新田遺跡 (第 95 次)	集落・屋敷	古代・中世	溝跡・土壤・ 小溝群	剥片石器・土師器・ 須恵器・瓦・無釉陶器	新田遺跡第 97 次で本発 掘調査
山王遺跡 (第 126 次)	集落・都市	古墳時代・ 古代以降	水田跡	土師器・須恵器・ 須恵系土器	
山王遺跡 (第 128 次)	集落・都市	古墳時代・ 古代・中世	水田跡・掘立柱建物跡・ 豊穴住居跡・溝跡・井戸跡	土師器・須恵器・ 須恵系土器	
山王遺跡 (第 129 次)	集落・都市	古墳時代・ 古代・中世	水田跡・溝跡・ 井戸跡	土師器・須恵器・青磁・ 無釉陶器・鉄製品	
山王遺跡 (第 136 次)	集落・都市	古代	掘立柱建物跡・ 溝跡・土壤	土師器・須恵器・ 灰釉陶器・瓦	
山王遺跡 (第 137 次)	集落・都市	古墳時代・ 古代	水田跡・溝跡		山王遺跡第 139 次で本 発掘調査
西沢遺跡 (第 24 次)	集落	古代以降	豊穴住居跡・ 溝跡・土壤	土師器・須恵器・瓦	西沢遺跡第 25 次で本発 掘調査
高崎遺跡 (第 97 次)	集落・城館	古代	掘立柱建物跡・ 溝跡	土師器	

要 約	新田遺跡第95次調査では、古代の小溝群と10世紀前葉以降の溝跡などを発見した。
	山王遺跡第126次調査では、10世紀前葉前後の複数面の水田跡を発見した。
	山王遺跡第128次調査では、古墳時代前期の水田跡と古代の掘立柱建物跡・竪穴住居跡・溝跡と中世以降の掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡などを発見した。
	山王遺跡第129次調査では、古墳時代前期の水田跡と古代の溝跡と中世の溝跡・井戸跡を発見した。
	山王遺跡第136次調査では、古代の掘立柱建物跡・溝跡・土壌などを発見した。
	山王遺跡第137次調査では、古墳時代前期の水田跡と古代の溝跡を発見した。
	西沢遺跡第24次調査では、古代の竪穴住居跡と溝跡を発見した。
	高崎遺跡第97次調査では、古代の掘立柱建物跡を発見した。

---

## 多賀城市文化財調査報告書第114集

### 多賀城市内の遺跡2

—平成25年度発掘調査報告書—

平成26年3月31日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022)368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022)368-1141

印刷 今野印刷株式会社

仙台市若林区六丁の目西町2番10号

電話 (022)288-6123

